
魔法少女リリカルなのはstrikersW 二人で一人の仮面ライダー

フォートレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは `striker's W` 二人で一人の仮面ライダー

【Nコード】

N3677Q

【作者名】

フォートレス

【あらすじ】

これは管理局員の高宮翔とその相棒が機動六課に配属される物語である。（この作品は、作者の処女作ですので少し変な所もありますが御了承下さい）

プロローグ（前書き）

始めましてフォートレスです。

6月23日プロローグ一部送迎です

プロローグ

ここはとある管理外世界の研究所。

ここに一人の少年が走っていた。彼の名前は、高宮翔。年齢は15歳、時空管理局で働いている。

翔が研究所の中を走っている理由は依頼でここで捕まっていた謎の少年を助けたからだ。

翔「ハア、ハア、クソオ」

翔は助けた少年を連れて研究所の人物から逃げている。すると広い部屋にたどり着いた。

翔「ハア、ハア、ここまでくれば大丈夫だろ」

研究所の人物も追ってこないし助かった。と思っていると。

ドゴオンと強い衝撃が部屋に伝わった。

翔「な、何だ」

翔が後ろを振り向くと、そこには杖を持って飛んでいる人の形をした怪物がいた。

翔「魔導士か!？」

翔が少し驚いた声をあげた。しかしそれを隣の少年が否定した。

「???」「いやアレはドーパントだ」

最悪だ。翔は心の中でそうつぶやいた。翔も魔導師だが今日は魔法を使うのに必要な機械であるデバイスを持ってきていない。理由は今回の依頼をなめていたからだ。

翔「くそお、どうすればいいんだよ!!」

翔が叫ぶが、ドーパントは翔にデバイスを向けて砲撃を放とうと
していた。その時

「???」「……これは、マズイかもしれない……」

翔の隣にいた少年が言った。そして持っていたトランクケースを開き

「???」「……その君」

翔「な、何だよ」

「???」「悪魔と相乗りする勇氣あるかな？」

そう言い少年が翔にケースの中身を見せた。中身は、赤いドライバーらしき物とUSBメモリが6本あった。翔にはこれがなんなのかわ解らなかった。でもこれを使わないとここで二人共やられると思った翔はドライバーを腰につけた。すると少年にも同じ物が装着された。

翔「……やってやるよ。……うおおおおお!!」

翔は黒いメモリを左のスロットへ少年は緑のメモリ右のスロットに差しこんだ。それと同時にドーパントが砲撃を撃った。

ドゴオンという衝撃がまた広い部屋に伝わった。ドーパントの放った砲撃は、生身の人間を確実に殺せるものだった。ドーパントは二人の少年を殺したと思えば煙が晴れると二人の死体があると思っていたがそこには……

右半身が緑、左半身が黒の仮面の戦士が立っていた。

第1話（前書き）

1話です。翔が六課にやって来ます。

第1話

四年後

翔は、上司の命令で新しい配属先である機動六課に向かっていた。

翔「ふあゝ寝みいゝ」

????『もう少し緊張感を持つたらどうだい?』

今の声は四年前翔が助けた少年の声だ。翔の持ってきているバックの中から話している。何でバックの中にいるかとゆくと。少年の正体はユニゾンデバイスで、いつもは普通の人間型なのだが、人の多い所は苦手らしくこうして引きこもっているわけだった。

????『今、少し失礼な事を考えていなかったかい?』

翔「俺じゃねえよ」

そんな会話をしていると機動六課の目の前にきていた。結構でかい建物だ。

翔「よし、じゃあ行きますか。シエル」

シエル『ああ、そうだね。翔』

こうして翔とシエルは機動六課の隊舎に入ってしまった。

ここは機動六課。この部隊は先日発足した部隊だそしてその部隊長は現在

はやて「うん、どうゆうことなんやろっ?」

机の上で頭をかかえていた。理由は目の前の書類にあるらしい。部隊長室に来ていた機動六課隊長の一人
高町なのはがはやてに尋ねた。

なのは「はやてちゃん、どうしたの?」

はやて「あ、なのはちゃん。いやあちょっと新しく来る人について資料もろたんやけど・・・ほぼ何も書いてないんや」

なのは「え、それどうゆうこと?」

はやて「それでな、書いてあるのは、魔力ランクと性別、年齢だけや、名前や階級は本人の口から聞いてくれるって」

なのは「そ、そうなんだ」

コンコン

はやて「はい」

ガチャ

フェイト「はやて、新しく配属された人連れてきたよ」

今、入って来たのは、機動六課の隊長の一人フェイト・T・ハラオウンがそう言っって入っって来た。

はやて「フェイトちゃん。配属されてきた人連れてきたって本当？」

フェイト「うん、入ってきて。」

そこには黒髪の少年が立っていた。

翔は今、部隊長室の前にいる。翔が隊舎の中に入って部隊長室を探していると金髪の女の人に会った。年は翔と同じぐらいだと思う。その人に「部隊長室はどこですか？」と聞いたら連れていってくれた。とゆう訳だ。

翔「（それにしてもあの人が、何処かで見た気がするんだけど・・・）」

そんなことを考えていると部隊長室の前に来ていた。そして今、金髪の女の人が先に入って翔は外で呼ばれるのを待っている。

フェイト「うん、入ってきて」

そしてあの人に呼ばれたので部屋の中に入っていった。

ガチャ

翔が部屋に入ると部屋に三人の女の人があった。さっきの人と、サイドポニーの人そして椅子に座っている人、この人が多分この部隊長、八神はやてだろう。

それにしてもあのサイドポニーの人、何処かで・・・

その時、一瞬ある映像が流れた。

『翔君！』

・・・違う。アイツじゃない、アイツはこんな所にいない。他人だ。

はやて「あ、じゃあ名前と階級を教えてください。」

そう言われ翔は自己紹介を始めた。

そう言われたので俺は自己紹介をした。

翔「はい、今日から機動六課に配属されました。高宮翔一等空佐です。よろしくお願いします。」

こうして翔の機動六課での生活が始まった。

そしてこれがすべての始まりだった。

第1話（後書き）

1話を見てくれてありがとうございます。相棒の名前はシエルにしました。理由は、空が好きだとゆう設定だからです。次回はキャラ設定を書くことと思っています。

キャラ設定（前書き）

タイトル通りです。

4月30日設定追加

6月2日備考追加

キャラ設定

フ：どうも作者のフォートレスです。

翔：主人公の翔です。

フ：今回は、キャラ設定について書きたいと思います。

翔：ちゃんと考えてるのか？

フ：……まあ、一応。

翔：一応かよ。

フ：と、とりあえずどうぞー！！

翔：（ごまかしたな）

名前 たがみや 高宮 翔 かける
年齢 19歳

性別 男

階級 一佐

性格 基本誰にでも優しいが自分の大切な人達を傷つけた奴には容赦ない。実は子供好き

目の色 黒（バースト状態は紅、シエルとユニゾン状態だと碧）

髪の色 黒

趣味 基本何でもやる

魔力ランク

AAA（使えないけど）

所持メモリ

ジョーカー、メタル、トリガー、（バースト）

備考

8歳まで普通に過ごしていたが自分の特異体質の所為で両親を殺され研究所で実験動物と同じ扱いを受ける。その時10歳の時マリナに救われ管理局に入るが任務中に組織のドーパントの襲撃が多々ありその度に周り人間が傷つき翔は他人とのつながりを切る事を決めマリナに翔を知る人の記憶から翔の事を消すように頼んだがマリナは記憶を封印し翔と出会うもしくは会話などに出ると封印が解除されるようにしてあった。現在は機動六課で仲間達と毎日忙しく働いている。マリナの所為でデスクワークが速い、料理は人並みにできる。顔と髪型はスパイラルの鳴海歩に似ている。

名前

シエル（ユニゾンデバイス）

性別 男

性格 おとなしい、常に冷静

目の色 蒼

髪の色 黒

趣味 空を見ることがだが普通の空は飽きたので珍しい気候や天候の時だけ見てる。

所持メモリ

サイクロン ヒート トリガー ファング

特殊能力

世界の本棚（あまり使わない）

備考

4年前翔に助けられ翔の相棒になる。基本は部屋に引きこもっているが、任務の時だけは外に出る。世界の本棚を使えるがあまり使わない。顔・髪型はスパイラル（推理の絆のカノン・ヒルベルト似で

ある

マリナ・アークライト

年齢 26

性別 女

階級 少将

性格 基本明るい、頭はよろしくない

目の色 碧

髪の色 青

趣味 マンガ読む ゲームする 寝る テレビ見る

魔力ランク SSS

デバイス 持ってるけど半年使ってない

備考

管理局の中でも最強の部類にはいる人。Aランクだったら魔法無しでも倒せるらしい
9年前翔を助けてから面倒見てる。機動六課に翔を入れたのはそろそろ仲間をつくって欲しいから。基本は戦闘しかできない、デスクワークは翔や他の人に押しつけてる（人が居ないと自分のデバイスを使う）裏エースと呼ばれているのは表舞台に出ることが少ないから。

リュウヤ・アークライト

年齢 20歳

性別 男

階級 無し（囑託魔導士）

性格 クール

髪の色 青

目の色 紅

趣味 本を読む

魔力ランク A

デバイス 剣型のがあったが、改造した

所持メモリ アクセル エンジン ????

備考

マリナの弟で囑託魔導師。アクセルに変身してマリナの命令に従い行動している。クールだけど抜けてる所がある。剣型デバイスを改造してエンジンブレードにするなど機械を扱うのも得意。顔・髪型はスパイラル（推理の絆のアイズ・ラザフォード似）。

Wドライバー

翔とシエルが変身するのに使う機械。右スロットにシエルのメモリを、左スロットに翔の、メモリを挿入する事でWに変身する。（普段は翔の肉体にシエルの精神を憑依させているが、ユニゾン状態でも使用する事が可能）

ガイアメモリ

いろいろな世界の記憶を収めている。USB型の生体感応端末。超常的な力を手に入れられるが、使用者に悪影響を及ぼす。ちなみに翔とシエルの使用するメモリは、ドライバーに挿入する事を前提に作られた純正のメモリで使用しても問題はない。メモリを作ってい

る組織は今、行方をくらましている。

フ：まあ、だいたいこんな感じですよ。

翔：そうか。

フ：次回からまた本編です。早めに更新できるように頑張ります。
それでは皆さん、さようなら。

翔：これからもよろしくお願いします。

キャラ設定（後書き）

スパイラル使いまくりですね。これからも増えるかも・・・

第2話（前書き）

第2話です。

駄文ですがよろしくお願ひします。

第2話

「はやて」機動六課部隊長、八神はやてです。よろしくお願いします。」

翔が挨拶するところの部隊の部隊長である八神はやてが自己紹介してきた。

フェイト「ライティング隊、隊長のフェイト・T・ハラウンです」

さっきの金髪の方はフェイトと言うらしい。

翔「（あゝマリナがこの人の名前叫んでた気がする）」

マリナというのは翔の上司で翔はこの人のお陰で救われたがその分困っている。

なのは「スターズ分隊、隊長の高町なのはです」

次にサイドポニーの女の人、高町なのはが挨拶してきた。

翔はその女性の名前を聞き驚いた。

翔「（・・・嘘だろ・・・）」

そんなはずは無い。彼女は自分の知ってる高町なのはではなく同姓同名の他人だと思ったが多分それも無い、あれは真正銘自分の知ってる高町なのはだろう。

はやて「え〜じゃあ高宮一佐に質問があるのでいいですか」

翔が頭の中で結論を出したのと同時にはやてが尋ねた。

翔「ああ、いいぜあと俺の事は翔でいい。年齢も同じぐらいだし堅苦しいのは嫌いなんでな」

翔は三人にそう言った。翔にとって階級はないのと同じだからだ。

はやて「じゃあ翔君、君は地球出身なんか？」

翔「まあ、そうだけど」

翔はなのはの方を少し見た。なのはは翔の事にまだ気付いていない

翔「（そうだよな、アイツにもちゃんとかけてあるんだよな）」

特になのはの様な人には、強めの鍵をかけといてあるし俺の事は気付かないだろうと思ってる。今度はフェイトが翔に尋ねてきた。

フェイト「そうなんだ。じゃあどこら辺に住んでいたの？」

翔「え」と、海鳴市って所に住んでいたけど8歳の時に違う町に引っ越した」

フェイト「え、海鳴に住んでたの！私たちもだよ」

翔「へ〜そうなのか俺も驚いそ」あー！……！……何だいきなり」

いきなり声を上げたのは、なのはだった。本当にいきなりどうした

んだか

なのは「思い出した！翔君確か小学生の時2年間、同じクラスだったよね？」

翔は驚いていた。まさか鍵が一瞬で解けるなんて思ってもいなかった。そして翔はとりあえず・・・

翔「あーーーーー！！！！お、思い出した」

大袈裟にリアクションを取っていた。

翔「そういえば、そうだったな、まさかこんな形で会うとはな」

なのは「だよな！うわ〜久しぶりだね〜」

はやて「いやあ〜ビックリしたわ〜まさか同じ所出身の人が配属されるなんて」

フェイト「うん、私もビックリしたよ」

はやてとフェイトも俺が同じ所で育ったと知って驚いている。

翔「それで俺はどうしたらいいんだ」俺は、はやてに質問した。

はやて「じゃあ六課のみんなに挨拶してくれへん。ロビーにみんなを集めとくから。なのはちゃん、翔君を案内してくれへん？」

なのは「うん分かった。翔君行こう」

翔「ああ、分かった。」

翔はなのはと部隊長室を出た。

はやて「いやあ、ホンマにビックリしたわ。」

「はやてちゃんどうしたんですか？」

今部屋に入ってきたのは、はやてのユニゾンデバイスのリインフォース？である。

リイン「今の人は今日新しく配属された人ですか？」

はやて「そうやで高宮翔君。私達と同じ海鳴市出身や。」

リイン「へえ、そうなんですか。」リインもビックリしている。それもそうか私達以外で地球、しかも海鳴市に住んでた人が管理局で働いているなんて知らなかったなあ。

フェイト「ねえ、はやて。」

はやて「どうした？フェイトちゃん。」

フェイト「翔がどうゆうデバイスを使うのかとか聞かなくてよかった。」

たの？」

はやて「まあそのうち分かるし大丈夫やろ、とりあえずみんなを口ビーに集めへんといかんからフェイトちゃんとリインは先に行つていて」

フェイト「うん分かった」

リイン「はいです」

そして二人は部屋から出ていった。そして一人になった部屋ではやてはつぶやいた。

はやて「それにしても一佐か・・・私よりも階級が上の人が部下ってなんかちょっと複雑やなあ」

翔となのはは一緒に廊下を歩いていた。

最初はどちらも無言だったがなのはが翔に話掛けた。

なのは「ホントビックリしたよ」

翔「ああ、そうだな」

その後またしばらく無言になるが再びなのはが尋ねてきた。

なのは「翔君はどうしてミッドに？何時魔法と出会ったの？」

その問いに対して翔は笑って

翔「それは企業秘密だ」

と言った。

↳数時間後↳

翔は今、訓練所に向かっている。理由はさっき翔の自己紹介が終わり昼食を食べ終えた後なのはに訓練所に来てくれと言われた。

翔「一体何なんだ？」

翔が訓練所につくとなのはと、ほかに四人いた。さっきの自己紹介の時もいた、おそらくあの四人がなのはの教え子のフォワード部隊四人だろうと翔は推測した。

なのは「あ、翔くん」

なのはがこつちに向かって手を振って翔を呼んでいる。すると他の四人もこつちを見た。

翔「よう、で何かようか？」

なのは「あ、うんはやてちゃんに言われて翔君の実力を見てくれって言われてね。それとこの子達が私の教え子の前線フォワード部隊四人だよ、みんな自己紹介して」

ティアナ「はい！ティアナ・ランスター二等陸士です」

オレンジのツインテール、ティアナが敬礼して自己紹介をした。

スバル「スバル・ナカジマ二等陸士です」

エリオ「エリオ・モンディアル三等陸士です」

キャロ「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

他の三人も続いて自己紹介した。

翔「ああ、よろしくな。あと俺の事は翔でいいぜ固苦しいのは嫌いだからな」

ティアナ「は、はい分かりました」

翔「それじゃあ始めますか」

なのは「うんそうだね。じゃあ翔君準備して」

翔「ああ、分かった」シエル変身する準備してくれ」

シエル「分かった」

シエルに念話で話しかけた。翔の力は、シエルの存在が必要不可欠である。

翔はWドライバーを装着した。その頃何も無かった訓練所は市街地

になっていた。

翔「よし行くぜ」

俺は黒いUSBメモリみたいなものを取り出した。

【JOKER!】

シエル『ああ』

【CYCLONE!】

翔・シエル「『変身』」

そしてシエルから緑のUSBメモリが転送されてきてそのメモリを挿入した。俺も自分のメモリもドライバーに挿入し展開させた。

【CYCLONE・JOKER!!】

俺の体を中心に風が吹き荒れ右半身が緑、左半身が黒の仮面の戦士になった。

第2話（後書き）

無事に2話を投稿することが出来ました。次の話も早めに投稿します。

第3話（前書き）

第3話です

第3話

なのはは今FWのみんなと訓練所にいる。理由は翔の実力を見るため……

しかし翔がいきなり半分個怪人になった！

なのは「どうゆう事なの〜？」

ティアナ「な、何あれ？」

キャロ「あれが翔さんのバリアジャケットなんですかね？」

スバル・エリオ「か、かつこいいい！！」

FWの四人はそれぞれ翔の姿を見て感想を言っている。

なのは「本当にあれなんなの〜……あとでお話しないといけないね……」

なのはが黒いオーラを少し出しながら言った。

W（翔）「さて、行くか」

W^{シエル}「……なんか少し殺気を感じるけど……」

W（翔）「気の所為だろ」

W、サイクロンジョーカーになった翔とシエルは、ガジェットに向かって走り出していった。

W（翔）「はあ！！」

Wはガジェットを殴り破壊した。

W（翔）「まだまだ行くぜ」

W^{シエル}「翔、あれには、AMFを発生させる機能があるらしい」

W（翔）「だが、俺達には、関係無い！！」

そのままWが次々とガジェットを破壊していくそして残るガジェットが一機になった。

W（翔）「あれで決めるぜ、シエル」

W^{シエル}「ああ、分かった」

Wはジョーカーメモリをドライバーから抜きベルトの右腰にあるマキシマムスロットに挿入した。

【JOKER！MAXIMUMDRIVE！】

W「ジョーカーエクストリーム」

Wが竜巻を発生させ浮き上がり正中から分割され両半身が連続して飛び蹴りを喰らわせ、ガジェットが爆発させた。

W（翔）「さて、これで終わったか」

Wはドライバーからメモリを抜いて変身を解除すると、翔の姿に戻った。

翔が変身を解除すると、みんながこっちに來た。

なのは「翔君、さっきのあれは、一体何なのかなあ？」

なのはが翔に質問してきた。そういえばWの事やガイアメモリの事を話していなかったなと翔は思った。

なのは「（てゆうかなのはの背後から黒いオーラが出ているけど・・・一体何なんだ？）」

まさかシエルの殺気の正体？と思ったが違つと信じたい

翔「あゝわりい、その事を言うのを忘れてた。みんなに説明しないといけないな・・・どうするか？」

なのは「じゃあ食堂に行こうか、はやてちゃんにも言つとくから」

翔「ああ、分かつた」

こうして俺達は食堂に行くことになった。その途中で俺は部屋にいるシエルに念話で話しかけた。

翔『おい、シエルお前も來い。』

シエル『……………めんどくさい』

翔『お前も自己紹介しとかないと面倒だぞ』

シエル『……………わかったよ』

翔『じゃあ、迎えに行くな』

そう言っつて俺は念話を切った。

翔「わりい、俺ちよつと忘れ物取っつて来るから先に行っつてくれ」

なのは「うん、わかった」

翔はシエルと言っつ名のお荷物を持っつて来る為に部屋に戻った。

翔は今食堂にいる。ちなみに隊長、副隊長達あとFWのみんなもいる

翔はその中でリインフォース？を見て

翔「（あの浮いているちっちゃんのは、シエルと同じユニゾンデバ
イスか？）」

と思った。ちなみにユニゾンデバイスでWの半分、シエルは現在

シエル「翔・・・確かに隠れるのに適してるかもしれないが、これはキツイぞ」

食堂の前でダンボールの中に入り待機していた（スーク）の様に
はやて「じゃあ翔君、さっきのやつのごとうゆう事が説明してもらおうか？」

翔「ああ、これは、ガイアメモリって言う物だ」

翔は、ガイアメモリの話をした。みんなガイアメモリの力に驚いていた。

シグナム「まさか、そんな物があるなんてな」

桃色の髪のポニーテールの女性シグナムがそう呟いた。まあそういう反応をするのは当たり前か。

ヴィータ「でも、そんな物聞いたことねえぞ」

外見8歳ぐらいの少女ヴィータが言った。

翔「それもそうだ、ガイアメモリの関わる事件は俺が解決してるし、事件の事もマリナが極秘扱いにしているからな」

フェイト「マリナさんで、翔の上司でここに配属させた人だっけ？」

翔「まあ、そうだけど」

そう言いながら心の中で

翔「（あの人の事あんまり上司って感じしないんだけど）」

翔「じゃあ何か質問あるか？」

スバル「はい！」

翔「何だ、スバル」

スバル「翔さんもガイアメモリを使ってみましたけど。大丈夫なんですか」

翔「なるほどなかなかいい質問だ。ああ、俺のメモリは純正でドライバを使わないと変身できなくて、体に影響が無いんだよ」

スバル「そうなんですか」

ティアナ「はい！質問です」

翔「はい、ティアナ」

ティアナ「さつき、変身したときは緑のメモリが有ったのに翔さんが見せてくれたメモリには有りませんでしたけど・・・あれは何なんでしょうか？」

この質問で翔は固まった。

「……あ、すっかり忘れてた」

翔「あゝそうだそうだすっかり忘れてた。俺の相棒を紹介するのをほら、出てこい」

翔はそう入口の方に向かって言った。すると入口からダンボールが入ってきた。

「同『……？』」

全員がその光景に？マークを浮かべている中、翔はダンボールに近づきダンボールを叩いた。

翔「……何やってんだ」

そう言うとダンボールの中から高校生ぐらいの青年がでてきた。

シエル「いや、初対面だから」

シエル「やあこんにちは、僕の名前はシエル。翔のユニゾンデバイスでWの半分だよらしく」

翔がユニゾンデバイスを持っていると知ったはやては翔に向かって言った

はやて「翔君ユニゾンデバイスもってたんか！！何で言わんかったの？」

翔「だってコイツがあまり人と関わりたくないって言うものだから」

リン「わゝいリンと同じです」

キャロ「でも大きさが違うような・・・？」

翔「ユニゾンデバイスも人と同じ大きさになれるんだ」

エリオ「初めて知りました！」

それぞれシエルの感想を言っている。

シエル「まあそれで、僕がWの右側のメモリを3つ使い翔をサポートしているんだ・・・他に質問は有るかい？」

はやて「いや、もう大丈夫やみんな戻ってええで」

翔「わかった、じゃあな」

翔とシエルは部屋に戻って行った。

翔とシエルは部屋に戻った。翔の分の荷物を整理するためである。

シエル「君は荷物を持って来すぎなんだよ」

翔「お前が少なすぎるんだー！！！！」

シエル「本とメモリがあれば問題ないと思うが」

翔「お前はちよっとのお金と明日のパンツがあれば十分な人間と同じか」

シエル「……それとは違う気がする」

そう言うとシエルは窓の外を見て立ち上がった。

シエル「……もう少し経ったらおもしろい空がみれそつだ。行って来る」

翔「わかった」

そつするシエルは部屋を出て外に向かった。

翔は部屋の椅子に座つてため息をついた。

翔「………何でこんな所に配属するかなあ……」

翔は窓の外を眺めながらそつ言った。

翔「………俺には相棒以外大切な物はいらねえよ」

一人しかいないこの部屋で

翔「………みんなが傷つくだだけだよ……」

弱々しくただそつ呟いた。

第3話（後書き）

最後のやつは翔の過去と関係があります。

第4話(前書き)

前よりもほんの少し長い

第4話

翔が機動六課に来て数日経った、今FWの訓練を見学している・・・うん、ただ見ているだけだぜ。なぜなら翔は魔力は確かに高いかもしれないけど、魔法は全然使えないのだ。だから教える事なんてできないのだ〜！！

シエル「それって自慢できる事じゃないよね」

翔「うるさい！！しょうがないじゃないか！俺だって頑張ったんだぞ。でもなあ出来ないものは出来ないんだ〜」

翔は空を見ているシエルに向かってそう叫んだ。

シエル「では、高町なのはに教えてもらったらどうだい？」

翔「・・・それは勘弁してください」

翔はいつもフォワードの訓練を見てるのでなのはの訓練がキツイのも知ってる為一緒に教えて貰うのは嫌だった。

シエル「翔、みんな終わったみたいだよ」

翔「それじゃ、行きますか」

翔はみんなのいるほうへ向かった。

F Wの訓練を終わらせると遠くに居た翔とシエルがなのはの元へ来た。

翔「よお、今日もすごかったな」

なのは「翔君も教えてみる？」

翔「何回も言っけど俺は魔法は全然使えないんだよ」

翔はため息吐きながら言った。

翔「で、みんなはこれからどうするんだ？」

なのは「え〜と、みんなに新デバイスを渡そうと思って」

翔「そうか、じゃあ俺も行くぜ」

翔もなのは達とデバイスルームに行くことになった。

↓デバイスルーム↓

スバル「うわぁ・・・これが」

ティアナ「私達の新デバイス・・・ですか？」

スバルの前にはペンダント型、ティアナの前にはカード型のデバイスがある。

シャーリー「そうです。設計主任私、協力なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

手を挙げて主張しているのは機動六課のデバイス整備等をしている、シャーリーだ。

翔「おおーこれは凄いな〜！」

シエル「なかなかすばらしい物だね」

翔とシエルもデバイスの出来に驚いている。

エリオ「ストラダとケリユケイオンは変化なしかな？」

キャロ「うん、そうなのかな？」

リイン「ちがいます〜！」

エリオの頭の上にリインが現れた。

リイン「変化なしは外見だけです。二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから感触になれてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

エリオ「あ、あれで最低限！」

キャロ「ホントに・・・」

リインの言葉に驚いているエリオとキャロ、後ろで翔とシエルも驚いていた。

リイン「みんなが扱うコトになる四機は六課の前線メンバーとメカニックススタッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型」

リインがみんなが見える位置に来る。

リイン「部隊の目的に合わせて、エリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて造られた文句無しに最高の機体です」

リインが両手を広げるとデバイス達がリインに寄ってきた

リイン「この子達はまだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められてていっぱい時間を掛けて完成したです。ただの道具や武器と思わないで大切に・・・だけど性能の限界までおもいきり全開で使ってほしいです！」

そう言うとリインはシャーリーの隣に飛んでいった。

シャーリー「うん、この子達もねそれを望んでいるから」

翔「ああ、そうだな」

ブシユ

なのは「ごめん、ごめんお待たせ」

扉が開きなのはが入ってきた。

リイン「なのはさーん」

翔「やっと来たか」

シャーリー「ナイスタイミングです、ちょうどこれから機能説明をしようかと」

なのは「そう、もうすぐに使える状態なんだよね？」

リン「はい！」

なのはの問いに元気よく答えるリンそしてシャーリーが説明を شدした。

シャーリー「まず、何段階かに分けて出力リミッターを掛けてあるのね。一番最初の段階だとそんなにビックリするほどのパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

なのは「で、各自が今の質力を扱えきれないようにしたら、私やフエイト隊長、翔君やリン、シャーリーの判断で解除していくから」
リン「ちょうど一緒にレベルアップしていく感じですね」

翔「つてか、俺もかよ」

なのは「それぐらいはいいでしょ？」

翔「ああ、まあな」

ティアナ「あ、出力リミッターっていうのはさん達にもかかってますよね？」

ティアナがなのはに聞いてくる。

なのは「うん、私達にはデバイスだけじゃなくて本人にもだけどね」

FW「……ええ!？」

FW陣が驚く

エリオ「リミッターがですか？」

エリオが聞き返してきた

なのは「能力限定っていつてねうちの隊長と副隊長はみんなだよ私とフェイト隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長」

リン「はやてちゃんもですね」

リンがなのはの説明に補足する

なのは「うん」

キャロ「え」と

エリオ・スバル「……んん？」

スバル、エリオ、キャロが首を傾げる

シャーリー「ほら、部隊ごとに保有出来る魔導師ランクの総計規模
って決まっているじゃない」

スバル「あ、あははそうですね」

リイン「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有した場合はそこにうまく収まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ」

リインが説明をした

シャーリー「まあ裏技っちゃ裏技なんだけどね」

それに補足するシャーリー

なのは「ウチの場合だとはやて部隊長が4ランクダウンで隊長達が2ランクダウンかな？」

ティアナ「4つ!？はやて部隊長がSSランクだから……」

エリオ「Aランクまで落としているんですか!？」

ティアナとエリオが驚いた。

リイン「はやてちゃんもいろいろ苦労してるです」

スバル「なのはさんは……?」

スバルが少し遠慮がちになのはに聞いてきた。

なのは「私は元々S+だから、2・5ランクダウンでAA……だからもうすぐ一人でみんなの相手をするのはつらくなってくるかな」

リイン「隊長さん達は、はやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除は出来ないですし……許可は滅多な事では出せないそうです」

エリオ「……そうだったんですね……」

シエル「そんなめんどくさい物があるなんてね」

黙ってしまうエリオとさほど興味なさそうにうなづくシエル

キャロ「翔さんにもリミッターがついてるんですか？」

翔「俺には必要ないさ、だって魔力持っても全然つかないからな」

はっはっはと笑う翔、だが翔の一言に一同は苦笑するしかなかった。

シエル「ガイアメモリにもリミッターを掛けることが出来ないしね」

なのは「まあ隊長達の話は心の片隅ぐらいでいいよ、今はみんなのデバイスの事」

スバル・エリオ「はい」

スバルとエリオが答える。

シャーリー「デバイスもみんなの訓練データを基準に調整してあるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

シャーリーがモニターの近くでパネルをいじりながら言った。

なのは「午後の訓練の時にでもテストして微調整しよっか」

シャーリー「遠隔調整も出来ますから手間はほとんどかからないと思いますよ」

なのは「はあく便利だよね最近は」

リン「便利です！！」

翔「まさかそんな物があるなんてな」

シエル「まあデバイスを使わない人が知らないのは当然だけどね」

シャーリー「あ、スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能もうまく設定出来てるからね」

スバル「え、ホントですか！？」

シャーリー「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといた」

スバル「あはは、ありがとうございます」

翔がそれを聞いて本当に便利だなあと思っていると、警告音が鳴りモニターに「ALERT」の文字が出現した。

六課の初任務が始まろうとしていた。

第4話（後書き）

やっとアニメの話にいった
次回も頑張ります！！

第5話（前書き）

第5話です

第5話

翔達がデバイスルームに居ると突然アラートが鳴り出した。

スバル「このアラートって!」

エリオ「一級警戒態勢!」

スバルとエリオが言う。そう、これが機動六課の初出勤になるわけであった。

なのは「グリフィス君!」

グリフィス『はい、教会本部から出動要請です』

なのはが話しているモニターに映っている青年はグリフィス・ロウラン、はやての副官を勤めている人だ。

はやて『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、こちらははやて』

別のモニターに聖王教会に行っているはやてが映し出された。

なのは「うん」

フェイト『状況は?』

フェイトの声が通信で聞こえてきた。

はやて『場所はエイリム山岳丘陵地区、対象は山岳リニアレールで

移動中』

フェイト『移動中って・・・』

なのは「まさか！」

はやて『そのまさかや、内部に進入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体、大型や飛行型の未確認タイプもでてるかもしれないへん』

ガジェットが最低30は結構多い数だと翔は素直に思った。

はやて『いきなりハードな初出勤やなのはちゃん、フェイトちゃん、翔君いけるか？』

フェイト『私はいつでも』

なのは「私も」

翔「俺もいぜ」

翔達の返事を聞いて次にはやてはFWの4人に聞く

はやて『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもオツケーか？』

FW「はい」

元気よく返事をする4人

はやて『よし、いいお返事や。シフトはAの3グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場官制』

リイン・グリフィス「はい』」

返事するリインとグリフィス

はやて『なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

なのは・フェイト「うん」

はやて『ほんなら・・・機動六課フォワード部隊出動』

座っていたはやてが立ち上がりそう言った。

一同「……………はい……………」

フェイト『了解、みんなは先行して、私もすぐに追いかける』

翔「よし、いくぜシエル！」

シエル「ああ、わかった」

翔達はへりへ向かった。

へり内部へ

なのは「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

ティアナ「はい!!」

スバル「頑張ります!!」

少しだけ緊張しながらティアナとスバルが答える。

翔「まあ緊張せずにいつも通りやればいいさ」

ティアナ「はい」

リン「エリオとキャロそれにフリードもしっかりですよ」

キャロ「はい」

エリオ「はい」

フリード「キュル」

リンの言葉に答えるエリオとキャロ、そしてフリード

なのは「危ない時は私やフェイト隊長、リンや翔君がフォローするから・・・おっかなビックリじゃなくておもいきりやってみよ」

FW「・・・はい!!」「」「」

元気に返事するFWの4人

なのは「うん」

キャラ「・・・・・・・・・・」

フリード「クウ〜」

エリオ「？・・・・あつ、大丈夫？」

キャラ「あ・・・ごめんなさい、大丈夫」

エリオが俯いているキャラに声を掛ける

ティアナ「・・・・・・・・・・」

ティアナが手のひらのクロスミラージュを見つめている。スバルも手のひらのマツハキャリバーに声を掛けた。

スバル「はじめましてでいきなりになっちゃったけど、一緒に頑張ろうね相棒」

それぞれの考えを乗せへりが飛び去っていった。

そろそろ現場に着く頃になり翔がへりを操縦している青年、ヴァイス・グランセニツクに声を掛けた。

翔「ヴァイス！そろそろ俺がでて抑えてやる」

なのは「あ、私もできるよ」

ヴァイス「うつつ、なのはさん、翔、お願いします」

翔「よし、いくぜ!!」

翔はWドライバーを腰に装着したするとシエルの腰にもWドライバーが装着された。それと同時にヘリのハッチが開いた。

なのは「じゃあ、ちょっとでてくるけどみんなも頑張つてズバツとやっつけちゃおう」

スバル・ティアナ・エリオ「はい!!」「」

キヤロ「・・・はい」

キヤロだけ少し返事が遅れた、何か考え事でもしていたらしい

翔「キヤロ」

そこに翔がキヤロに声を掛けて近づいてきた。

キヤロ「はい」

翔「心配するな、俺達がついてるからそれにお前の力はお前の人傷つける力じゃない、人を助ける力だ。だからな!」

そう言いながら翔はキヤロの頭を撫でた。翔は基本子供に優しいのだ。

キャラ「・・・はい」

キャラが返事をする。翔は立ち上がった、シエルも準備をする。

翔「シエルいくぜ！」

シエル「ああ、ユニゾンはどうする？」

翔「ガジェット相手じゃ必要ねえ」

翔はシエルにそう返した

シエル「じゃあいくよ」

【CYCLONE】

翔「じゃあ俺はこれでいくか」

【METAL】

翔・シエル「変身」

シエルがサイクロンメモリを挿入すると意識を失った。

スバル「か、翔さんシエルさんがいきなり倒れましたよ！」

翔「ああ、前にも説明したとおりシエルの意識が俺の方に来たんだ、こうしないと変身出来なくてね」

翔は簡単に説明すると装填されたサイクロンメモリを挿入し自分の

持っている銀色のメモリ、メタルメモリを装填し変身した

【CYCLONE・METAL】

そして俺は右が緑、左が銀のW、サイクロンメタルになった

翔・シエル「さあて、行くぜ(よ)」

第5話（後書き）

次も頑張ります。関係無いけどオーズのタジャドルすごかったな

第6話（前書き）

今回は長くていつも通りの文なので読みにくいと思いますがよろしくお願ひします。あとデバイスのセリフとか間違っていたらすみません。

第6話

なのはside

翔君がWに変身して飛んでいった。翔君、空を飛ぶのは出来るんだね。

なのは「キャラ」

私はキャラに声を掛けた翔君のお陰でさっきより緊張は取れてるけどまだ少し緊張しているみたいだし

なのは「大丈夫そんなに緊張しなくても」

私はキャラの顔に触れた。

なのは「離れてても通信でつながっている一人じゃないからピンチの時は助けあえるし、キャラの魔法は翔君の言った通りみんなを守ってあげられる優しくて強い力なんだから、ね」

私はそうキャラに微笑みながらそう言ってへりから飛び降りた。

レイジングハート【スタンバイ、レディ】

なのは「レイジングハート、セフトアップ」

私はバリアジャケットを身に纏いレイジングハートをデバイスモードにする

なのは「スターズ1高町なのは行きます!!」

私は翔君の元へ向かった。

なのはside out

翔side

W（翔）「うおりやあああああ!!」

俺はW、サイクロンメタルになって空中のガジェットを破壊している。一応空を飛ぶことは出来る。

W（翔）「へ、こんなもんか！」

W^{シエル}「翔、大きい魔力反応が2つ来ているよ」

W（翔）「なのはとフェイトか、別にこっちは一人で十分なんだが」

俺はメタルシャフトでガジェットを叩きながらそう呟いた。

W（翔）「まあ、どう言っただってあいつらはこっちに来るだろうな」

そんなこと言っているうちに前からなのはが来た。

なのは「翔君！」

W（翔）「よお、来たか」

なのは「大丈夫！」

W（翔）「見りゃわかるだろ」

俺はガジェットの大群を風とメタルシャフトを使って破壊した。

W（翔）「全く問題ねーよ」

今の攻撃を見てなのはが啞然としているが俺は気にせずWドライブの左スロットからメタルメモリを抜き青いガイアメモリ、トリガーメモリを装填する。

【CYCLONETRIGGER】

俺は右半身が緑、左半身が青のWサイクロントリガーになる。

W（翔）「さあて、早いとこ終わらせて新人達の所に行きますか」

なのは「うん」

そして俺はトリガーマグナムでガジェットを破壊していった。

翔sideout

フェイトside

私はパーキングエリアから飛んで現場へ向かいました。そして現場について少し驚いた事があります。それは……

W（翔）「なのは、そっち行つたぜ！」

なのは「うん、分かつた」

レイジングハート【アクセルシューター】

ドゴオン！

なのは「翔君そっちに一機行つたよ！」

W（翔）「ああ」

バキユン！バキユン！

初めて一緒に戦っているはずなのに二人とも凄くコンビネーションがよくガジェットもいつきに減って行っている。

フェイト「……凄い」

私は思わずそう呟いてしまった。そこで自分の近くにガジェットが来ているのに気づき破壊した。

フェイト「なのは、翔！」

なのは「フェイトちゃん！」

W（翔）「よお」

私が二人の方へ行くと二人もこっちへ来た。

フエイト「大丈夫だった!？」

なのは「うん」

W（翔）「ああ」

そして私達はガジェット達のいる方向を向き

W（翔）「よし、じゃあ残りもすぐ終わらせるか」

翔の言葉に私となのはも頷きガジェットの方へ向かった。

フエイトsideout

（リニアレール内部）

リイン「任務は2つガジェットを逃走させずに全機破壊する事そしてレリックを安全に確保する事」

モニターを出現させ説明するリイン

リイン「ですからスターズ分隊とライトニング部隊、2人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かいます」

モニターを使いながらFW陣に言うリイン

リン「レリックはここ7両目の重要貨物室、スターズかライトニング先に到着した方がレリックを確保するですよ」

FW「はい」

返事をするFWの四人

リン「で、私も現場に降りて官制を担当するです」

一回転しバリアジャケットを纏ったリンがニッコリ笑いそう言った。

ヴァイス「さあて新人共隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで安全無事に降下ポイントに到着だ、準備はいいか！」

ヴァイスが言いFWの四人が降下の準備をする。先にスバルとティアナが降下するためハッチに向かう。

スバル「スターズ3スバル・ナカジマ！」

ティアナ「スターズ4ティアナ・ランスター！」

スバル・ティアナ「行きます！！」

そして2人共飛び降りて行った

スバル「行くよ、マツハキヤリバー」

ティアナ「お願いね、クロスミラージュ」

スバル・ティアナ「セットアップ!!」

【スタンバイレディ】

2人はバリアジャケットを身に纏いスバルはアームドデバイス、リボルバーナックルとローラーブーツになったマツハキャリバーを装着しティアナはクロスミラージユを銃型に変形させた。

ヴァイス「次、ライティング。チビ共気いつけてな」

エリオ・キャロ「はい!!」

キャロ「……」

エリオ「……一緒に降りようか」

不安そうに下を見るキャロにエリオが声を掛け手を差し出した。

キャロ「……うん!」

キャロは差し出された手を握った。

エリオ「ライティング3エリオ・モンディアル!」

キャロ「ライティング4キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ!」

フリード「きゅん」

エリオ・キャロ「行きます!!」

エリオとキャロも勢いよく飛び降りていった。

エリオ「ストラダー！」

キャロ「ケリユケイオン！」

エリオ・キャロ「セットアップ!!！」

エリオとキャロもバリアジャケットを纏いストラダーは槍にケリユケイオンはグローブになった。

そして四人はリニアレールの屋根に着地した。

スバル「あれ？ねえ、このジャケットって」

スバルは自身のバリアジャケットが変化しているのに驚く

エリオ「・・・もしかして」

リイン「デザインと性能は各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ」

リインが四人の疑問に答える。

リイン「チョット癖がありますが高性能です」

スバル「わあ〜」

ティアナ「・・・っ！スバル、感激は後！」

ティアナがスバルを叱咤すると同時にリニアレールの屋根が不自然に盛り上がった。どうやらガジェットがFW陣の存在が気づかれたらしい。そしてガジェットがスバルとティアナに攻撃してきた。

【ドライブイグニション】

FWの戦いが始まった。

スバルside

【ヴァリアブルバレット】

ティアナ「シュート！」

ティアが魔力弾を2つ生成してガジェットに放ち撃墜した。

スバル「うおおおおおおお！」

私はリニアレールの屋上に空いた穴から車内に飛び込んでいき真下にいたガジェットをリボルバーナックルを叩き込んで撃墜した。

スバル「はあああああああああ！！！」

そして破壊したガジェットを持ち旋回して後ろにいたガジェットに持っている破壊したガジェットを投げつけ破壊する。すぐにガジェットが攻撃してくるけど私はそれをすべて避けて走り出した。

【アブソーブグリップ】

私はそのまま壁を駆け上りリボルバーナックルのスピナーを回転させた。

スバル「リボルバー……シュート!!」

そしてガジェットに思いつ切りガジェットに衝撃波を叩き込んだんだけど……

ドーン!!

スバル「うわあ」

勢い余って屋根を貫いちゃった! わくどうしよう!?

【ウインググロッド】

スバル「え!？」

いきなりマツハキャリバーがウインググロッドを展開し私は隣の車両に着地した。

スバル「わくマツハキャリバーお前ってもしかしてかなり凄い? 加速とか、グリップコントロールとか……それにウインググロッドまで」

と、思わずマツハキャリバーに言った。するとマツハキャリバーは、

【私はあなたをより強くより速く走らせるために作り出されました

から】

と言ったので私は

スバル「うん、でもマツハキャリバーはAIとはいえ心があるんでしょ？だったらちよつと言ひ換えよう。お前はね私と一緒に走るために生まれてきたんだよ」

私は自分の空けた穴を見ながらそう言った。

【同じ意味に感じます】

スバル「違うんだよ色々」

うーんどう言えばわかるんだろつと思っているとマツハキャリバーが

【考えておきます】

と言ってくれたので私は少しうれしかった。

スバル side out

ティアナ side

リン『ティアナ、どうです？』

ティアナ「ダメです。ケーブルの破壊効果無し」

ガジェットを破壊してリイン曹長の通信に私は応答した。

リイン『了解、車両の停止は私が引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください』

ティアナ「了解」

【ワンハンドモード】

私はクロスミラージユを二丁にしてスバルと合流するために走り出した。

ティアナ「しつかしさすが最新型、色々便利だし弾体生成までサポートしてくれんだね」

【はい、不要でしたか？】

クロスミラージユが聞いてきたので私は走りながら答えた。

ティアナ「アンタみたいな優秀な子に頼りすぎると私的にはよくないんだけど……」

突き当たりの道を左に曲った

ティアナ「でも実践では助かるよ」

【ありがとうございます】

さて早くスバルと合流しよう

ティアナsideout

キャロside

私とエリオ君の前に新型のガジェットがいます。新型のガジェットは触手みたいな物を伸ばしてきた。私とエリオ君は後方に跳びそれを避けるけど、触手の片方がこっちに向かってきたので私は着地と同時に魔法陣を展開した。

キャロ「フリード、ブラストフレア！」

フリード「きゅーくる〜」

フリードの口前に火炎弾が出現し

キャロ「ファイア！」

ガジエットの触手に向かって放った。けど火炎弾は触手に弾かれちゃった。そこにストラーダに電気を付加させたエリオ君がガジエットに斬りかかった……けど

バチイ、バチイ

エリオ「か、硬い」

新型ガジエットはかなりの硬度を持っているらしくて全然ダメージ

を喰らっていない。しかもガジェットはAMFを展開してストライダの電気と私の魔法陣が消えちゃった。

エリオ（AMF！）

キャロ（こんな遠くまで）

効果範囲の広さに私もエリオ君も驚きました。

エリオ「くっ……」

エリオ君がガジェットの攻撃を受けてるエリオ君に屋根の上にいる私は声を掛けた。

キャロ「あ、あの！」

エリオ「大丈夫！任せて」

エリオ君がそう言ったちよつと後にガジェットがレーザーを放ってきた。

エリオ「くっ……」

エリオ君はガジェットの背後に避けるけどガジェットは体を回転させてまたエリオ君に攻撃してきた。

エリオ「うわあ！」

エリオ君が攻撃を避けきれず床を転がる。そのエリオ君をガジェットの触手で壁に叩きつけた。

エリオ「うわああああ」

壁に叩きつけられた気を失ったエリオ君をガジェットは屋根を開けてエリオ君を投げ捨てた。

キャラ「ああ……」

エリオ君の体がゆっくり落ちていく。

キャラ「エリオ君……」

私の頭の中に次々とエリオ君との思い出が蘇ってくる。そして列車から落ちてくるエリオ君を見た瞬間、私は……

キャラ「エリオくん」

エリオ君を追って列車から飛び降りた。

キャラ side out

翔 side

W^{シエル}「翔、キャラがエリオを追って飛び降りたようだが」

シエルがそんなことを言ってきた……なるほど飛び降たか

W（翔）「……別にいいんじゃないか」

W^{シエル}「どうゆう事だい？」

W（翔）「ガジェットから離れればAMFも弱くなる・・・つまり」

W^{シエル}「なるほど、そうゆう事か。でもかなり危険なんじゃないかい？」

W（翔）「大丈夫だ」

俺はシエルに向かってそう言った。

W（翔）「キャラ口はこれまでのキャラロじゃない大切な物を手に入れて心も魔法も強くなった。だから大丈夫だ。」

W^{シエル}「・・・君らしい理由だね。まあ翔がそこまで断言できるなら大丈夫なのかもね」

シエルが納得しているその時

W（翔）「っ！」

W（翔）「どうした？翔」

W（翔）「・・・行くぞシエル」

W^{シエル}「え？」

W（翔）「リニアール付近にドーパントの気配がする」

W^{シエル}「本当かい！」

W（翔）「ああ、行くぜシエル」

俺達はリニアールの方へ行つた。

翔 Side out

キャロ（守りたい、優しい人を、私に笑いかけてくれる人達を・・・）

落下していくエリオに手を差し伸べるキャロ

キャロ（自分の力で）

キャロ「守りたい！」

そしてエリオの手を握る。

【ドライブイグニッション】

ケリユケイオンが輝きピンク色のバリアみたいなものがエリオとキャロを包み浮き上がった。そしてフリード が近づいてくる。

キャロ「フリード、不自由な思いさせてごめん。私ちゃんと制御す

るから」

そう決意しフリードを見るキャロ……そして

キャロ「いくよ、竜魂召還!!」

バリアが強く輝き、キャロの足下に魔法陣が出現した。

キャロ「蒼穹を走る白い閃光、我が翼となり天を駆けよ」

魔法陣から翼が現れさらにケリュケイオンの輝きが強くなる。

キャロ「来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召還!!」

キャロの掛け声と共に大きくなったフリードが現れた

フリード「グオオオオ!!」

ティアナ「あれがチビ竜の本当の姿……」

スバル「かつこいい……」

リニアレールの上でフリードを見て驚くスバルとティアナ。

リン「あつちの2人には、もう救援はいらないです。さ、レリッ
クを回収するですよ!!」

そう言いスバルとティアナの方にリンが向き直った。

そしてエリオを投げ飛ばした方から新型ガジェットが這い上がった
きた

キャロ「フリード！ブラストレイ！！」

キャロがフリードに命じると、フリードの前に大きな火炎弾が現れる。

キャロ「ファイア！！」

キャロの号令によりフリードがガジェットに強力な炎を放つ。しかし触手は無くなったが本体は無傷だった。

キャロ「やっぱり、硬い」

エリオ「あの装甲形状じゃ、砲撃だと抜きずらいよ。僕とストライダがやる」

キャロ「うん」

エリオの申し出にキャロが頷いた。

キャロ「我が来うは聖銀の剣、我が槍騎士の刃に祝福の風を」

【エンチャントッドフィールドインバレット】

ケリユケイオンが光輝き

キャラ「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

【ブーストアップ・ストライクパワー】

そしてキャラの両手にピンク色の玉が現れた。

キャラ「いくよ、エリオ君」

エリオ「了解、キャラ。だああああ！」

エリオがストラダを構えフリードから飛び降りる

キャラ「ツインブースト、スラッシュアンドストライク」

キャラは両手にあるピンクの玉をエリオに向かって放ちピンクの玉はストラダの穂先に吸収され穂先はピンク色に輝いた。

【受諾】

エリオ「はあああああああ！」

エリオはストラダで向かってくる触手を破壊して屋根に着地する。

【エクスペローション】

カートリッジをロードしエリオの足下に魔法陣が展開される。

エリオ「一閃必中！」

ストラダーを構えエリオはガジェットに突撃し貫き

エリオ「でええええやあああああ!!」

そのまま真つ二つに切り裂いた。

キャロ「やった!」

フリードの上からキャロが喜びの声を上げた・・・が

???「ウオオオオオオオオオオ!」

いきなり謎の怪物が現れエリオに襲いかかってきた。

エリオ「ぐっ!」

怪物の攻撃をギリギリ避けるエリオ。

キャロ「何、あれ」

エリオ「わからないけど、やるしかない」

そう言いエリオは怪物に攻撃するが

???「ウオオオ!」

ガキイン

エリオ「な!?!」

エリオの攻撃は怪物に止められてしまった。

????「ガアアアアアア！」

エリオ「うわあああ」

怪物に殴られエリオは吹っ飛ばされる

キャロ「エリオ君」

エリオ「だ・・・大丈夫」

ゆっくり起きあがるエリオ、そこに

????「ガアアアア」

怪物が火山弾のような物をエリオに向けて発射してきたが、それはエリオに当たらなかった。

W「「はあ！」」

火山弾をWが蹴って弾いた。

エリオ「か、翔さん」

W（翔）「大丈夫かエリオ、コイツは俺に任せろ」

今、Wと怪物の戦いが始まる。

第6話（後書き）

翔は色々あってドーパントの気配が分かります。

第7話（前書き）

前の話より短くなっています。

第7話

W（翔）「さあていくぜ。シエル、あのドーパントは？」

W^{シエル}「ああ、あのドーパントはおそらくマグマだね」

W（翔）「マグマか、てか何でドーパントがここに？」

W^{シエル}「さあね、でも今はコイツを倒すのが先だ」

そう言うとWは拳を握って駆けだした。

マグマ「ウオオオオオオ」

マグマドーパントもWに向かって攻撃してきた。

W（翔）「効くか！」

Wはマグマドーパントの攻撃を避けて胴体を右腕で殴った。

W（翔）「ハアアア！」

マグマ「グワアアアア」

Wの腕力とサイクロンメモリの風の力でマグマドーパントが吹っ飛ばされた。

エリオ「す、凄い」

エリオはWの戦いを見てそう呟いた。そしてあんな強い怪物をあんなに圧倒しているWに驚いた

W（翔）「エリオ」

エリオ「は、はい！」

いきなり声を掛けられビックリするエリオにW（翔）は、

W（翔）「少し離れている。ちょっとハデなのブチかますから」

エリオ「あ、はい」

そう言いエリオはWとマグマドールパントの戦っている場所から少し離れた。

その直後マグマドールパントが立ち上がり火山弾で攻撃してきた。

マグマ「ウオオオオオオオオオ！」

W（翔）「うわあ、あぶね！」

Wは飛んでくる火山弾を避けようとするが・・・

W^{シエル}「任せたまえ」

W（翔）「うおー！」

Wの右手がいきなり動きWドライバーのサイクロンメモリが抜かれルナメモリを挿入した。

【LUNA JOKER】

Wは右半身が黄色、左半身が黒のルナジョーカーになり火山弾を弾き腕を伸ばして攻撃した。

W（翔）「おい、シエル勝手にメモリを変えるなよ！」

W^{シエル}「気にするな」

W（翔）「まったく、まあいいそろそろ終わりにするか」

そう言い再びサイクロンジョーカーになったWはジョーカーメモリを右腰にあるマキシマムスロットに挿入した。

【JOKER！MAXIMUMDRIVE】

W「ジョーカーエクストリーム！！！」

マグマ「グワアアアア」

Wはジョーカーエクストリームをマグマドーパントに向けて使い直撃したマグマドーパントは爆発した。

W（翔）「よし、終わったぜ」

Wが変身を解除して翔の姿になる。そして翔はマグマドーパントが爆発した所へ行く。

そこには気絶している男と壊れているガイアメモリがある。翔は壊れているガイアメモリを回収して倒れている男に簡単にバインドを掛けといた。

翔「さて、これで初任務も無事に終了か。はやて、この後どうすればいい？」

オペレータールームにいろはやてに聞くがはやての返事は無く替わりにズボンのポケットにある携帯、スタックフォンから着信音が鳴った。翔は着信音が鳴ったとき、

すぐく嫌そうな顔をした。理由はこの携帯の番号を知っている人はごくわずかで、電話をかけてくる人はただ一人である。その人は・

『ヤッホー！任務ご苦労さ〜ん』

翔「……………やっぱお前か。マリナ」

マリナ『上司にお前はないんじゃない？翔』

電話の相手は翔の上司、マリナ・アークライトだ。魔力ランクSSで管理局の裏エースと呼ばれているらしい人物である。

翔「んで、なんだよいきなり」

マリナ「いや〜あなたの今いる所にドーパントがでたでしょ。でさドーパントになっていた人どうしようとか思ってたでしょ」

翔「まあ……………そうだけど」

マリナ「うわ〜私スゴ〜イ、天才いや超能力者かも！」

翔「……………そうゆうのいいからさ、早くしてくれないか」

翔が冷たい口調で言う。

マリナ「うわ、冷たい！まあいいや。ガイアメモリはそっちで回収して、使用者は現地の局員に渡しといていいや。」

翔「そうか・・・じゃあ切るぞ」

マリナ「ああ、ちょっと待って明日倉庫に来てくれる。修理中だったバイク渡すから」

翔「いいけど、何で倉庫？」

バイクなら渡すのどこでもいいと思うのにどうしてだ？と心の中で疑問に思う翔

マリナ「え〜とバイク以外にも渡したい物があるから。あとシエルも連れてきてね、それじゃ」

そう言っただけ電話を切るマリナ。バイク以外に渡す物があるって言ったけど倉庫で渡すなんてどんだけデカイんだよと思う翔にエリオが近づいてくる。

エリオ「あの・・・翔さん」

翔「うん？」

エリオ「八神部隊長がヘリに戻ってレリックの護送をしてくれって言っていました」

翔「わかった。今行く」

そう言っつて翔はへりの方へ向かっていった。

????「ふふ、この案件はすばらしい私の研究にとって興味深い素材が揃っているうえに生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから」

男がモニターを見てそう言う。そして違うモニターには

????「まさか、ガイアメモリの力を見ることができるとはね・・・
・これからおもしろいよ」

マグマドールパントと戦うWが映っていた。

第7話（後書き）

次の話にはアレが出ます。最初は出さない予定だったんですが、出しくなってきたので出すことにしました。

第8話（前書き）

うまく書ませんでした。
今回も本当に駄文です。すみません

第8話

翔「……………ここか」

機動六課初出勤の翌日、翔とシエルはミッドチルダの倉庫に来ていた。理由はマリナに呼ばれたからである。

翔「あゝ何でこんな所に呼び出しやがったあいつ」

シエル「知らないけど、まあ何か考えがあって呼んだんだろう？」

翔「……………本当に考えがあればいいけどなあ」

マリナは翔の上司で信頼できる人間だが、よく周りの人を巻きこんでは好き放題している。翔とシエルも数え切れない程巻きこまれている。しかも真面目な話をしている最中に爆弾発言をしたりするので翔はいつも、彼女の事で頭を悩ましていた。

翔「とりあえず、入るか」

翔とシエルが扉を開けると……………

マリナ「よく来たな2人とも—————!!」

倉庫の中には腕を組んでいるマリナと黒い装甲車があった。

翔「……………シエル」

シエル「何だい翔」

翔「何だあれは」

シエル「僕が聞きたい」

翔は啞然とし、シエルは呆れている。

マリナ「フッフッフ、開いた口が塞がらないようね！」

翔「なあ俺達を呼んだ理由って」

マリナ「そう、あなた達をここに呼んだのはW専用の高速移送装甲車リボルキャリアを渡すためなのだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

どーん！とゆう爆発音と共に花火がマリナの背後で上がった。

翔「……あの、俺のバイクは何処へ？」

マリナ「その質問待っていた！！リボルキャリア、オープン！！」

マリナが叫ぶとリボルキャリアのボディがいきなり開き翔のバイク、ハードボイルダーが姿を現した。

翔「……これはどうゆう事ですか。マリナサン」

マリナ「うーんと、まあ簡単に言うとハードボイルダーには換装ユニットがあるらしくてそれを格納しているのがリボルキャリアってわけよ」

マリナがりボルキャリアの説明をしている。それを聞いていたシエ

ルはマリナに質問した。

シエル「その換装ユニットってゆうのはどんな物があるんだい？」

マリナ「え」と、まずはハードボイルダーにダッシュユーストユニットを装備した、ハードボイルダースタートダッシュモードと空戦形態のハードタービュラー、そして海戦形態のハードスプラッシュャーがあるの、まあ詳しい事はこの紙に書いてあるからこれ読んで」

そう言いマリナはリボルキャリーの事が書いてある資料を取り出しシエルに渡す。その直後、シエルはその資料を読み頷く

シエル「なるほど、大体わかったよ」

マリナ「そう、じゃあそれ機動六課の隊舎に持って行ってね〜頼んだよ」

翔「いいけど……マリナ、お前に聞きたい事がある」

翔が真剣な表情でマリナを見る

マリナ「……何かしら」

マリナは表情をまったく変えずに答える。

翔「俺を何で機動六課に配属した」

マリナ「理由は簡単、あの部隊にあなたの力が必要だから」

翔「俺にはそう思えないな、あの部隊は俺達がいなくても十分やっ

ていける力を持っている」

翔はマリナを真っ直ぐ見ながら言った。しかしマリナは

マリナ「まあ本当の事を言っちゃうとね〜あんたに知ってもらおうよ」

マリナが翔の目を真っ直ぐ見つめながらそう言った。

翔「……何を」

マリナ「決まっているでしょ……アンタにお友達を作ってもらおうためよ」

その言葉を聞いた翔は少し俯き悲しそうな顔をした。

翔「言ったはずだぜ……俺に仲間なんていらぬ、居ても傷つけちまうだけだ」

そんな翔を見てマリナは呆れた様子で

マリナ「はあ、まだそんな事言ってたの。ハッキリ言うけどさ、もうあの組織はアンタの事を狙ってないし、周りの人間があんたのせいで傷つくなんて事はもうないわ」

翔「………だけど」

マリナ「あと、アンタの体も別にたいした問題じゃない。ちょっと普通と違うだけだし、あの子達が気にするとは思わぬわ」

翔「……そうか」

翔はそう言っただけでリボルキヤリーの方へ歩き出した。シエルもそれに続くそして翔はマリナに背を向けて呟いた。

翔「それでも怖いんだよ、自分に大切な人が出来て、その人がいなくなると思うと」

そう言うと翔はリボルキヤリーに乗り込み、シエルもあとに続きリボルキヤリーに乗り込むとリボルキヤリーは発車していった。

マリナ（怖い……か）

マリナは翔の言っていた言葉を心の中で呟いた。

マリナ（確かに今の翔にとっては怖いものかもしれないわね……でも、仲間の存在が翔を大きく変えてくれる……良い意味でね）

マリナは何かを企んでいるような笑みを浮かべた

マリナ（そうすればあれも使えるだろうし）

そしてマリナも倉庫から出ていった。

「機動六課部隊長室」

機動六課部隊長、八神はやてが自分の席に座りお茶を飲んでいる。

はやて「いや〜平和やなあ〜」

初任務から一日しか経ってないがそんな事をつぶやくはやて。そして

シャマル「そうですね〜」

第8話でやっと出てくる事ができた、はやての守護騎士の一人シャマルが言った。

シャマル「やっと出てきたって・・・仕方無いじゃないですか私が出る場面が無かったんですから」

シャマルが若干涙目になって言った

シャマル「そ、それにまだザフィーラだってでてませんよ」

ザフィーラ「呼んだか」

シャマルの隣にいきなり狼が現れたこの狼もはやての守護騎士、ザフィーラである。

シャマル「ザ、ザフィーラ。い、いきなり出てきてどうしたんですか」

ザフィーラがいきなり現れて驚くシャマル、そんなシャマルにザフ

イーラは

ザフィーラ「ここで出ないと当分出れない気がするからだ」

ザフィーラの言葉を聞き何も言えなくなったシャマル、いや当分出れないは言い過ぎなんじゃと思った。それを聞いたはやては、

はやて「大丈夫やザフィーラ、作者が頑張ってザフィーラの出番を増やしてくれるから」

はやては親指を立ててそう言った。シャマルとザフィーラは、作者って誰?と思っていた時、頭の中に

《努力はしてみます》

そんな声が聞こえてきた。

シャマル「はやてちゃん、今のは?」

シャマルが聞こえて声がなんなのかはやてに聞く。はやては

はやて「今のが作者や」

そう言うてはやては再びお茶を飲んだ瞬間

キイイイイイイ!とゆう音がいきなり外から聞こえはやてがお茶を盛大に吹いた。

はやて「な、何や!?!」

はやては驚いて外を見る、そこには黒い装甲車が止まっていた。

はやて「何、あの車」

はやてが黒い装甲車を見てそう言つと、いきなり装甲車が開き翔とシエルが現れた。

はやて「翔君、シエル君！」

いきなり装甲車から出てきた2人に驚くはやてだが、通信で翔達に話しかけた。

はやて「翔君、その装甲車は一体何や？」

翔『え〜と、これは、マリナがWに必要なだとかなんとか言つて持つて帰れつて言われたから』

翔が困つたような口調で話す、翔自身これを持って帰つてどうすればいいか悩んでいた。
それを見ていたシエルが

シエル『別にどこでもいいんじゃない、置くスペースがあれば』

はやて「そ、そうなんか」

リボルキャリアーは機動六課の敷地の隅に置かれることになった。

数時間後

翔「ふう〜」

翔は食堂に居た。まだ昼食にはちょっと早く周りには誰もいない。

翔（仲間か・・・）

翔はさつきマリナに言われた事を思い出してみた。

翔（確かに仲間とかそうゆうものは必要だと思う・・・だけど）

翔の頭の中にある出来事が思い出される。それは、翔が大事なものを失った出来事で翔がもう大切な人を作らないと決めた出来事。

翔（逃げてるだけだってわかってるけど、どうすればいいんだろう）

そんな事を考えていると

なのは「翔君」

翔「うわあ」

いきなりなのはに声を掛けられた。

なのは「どうしたの、何か考え事？」

翔「ああ、大丈夫だ」

なのは「そう、ならいいけど」

なのはが心配そうな顔で見えてきたが翔は笑って返した。気がつくとなのはとフォワードの四人がいた。どうやら訓練が終わって昼食を食べにきたらしい。

翔「よお、訓練終わったのか」

スバル「はい！」

スバルが元気よく答えた。翔は訓練した後でよくそんな元気が残ってるなと翔は思った。

ティアナ「あの、翔さん外に止まってるのって翔さんですか」

翔「ああ、あれはりボルキャリアって言って……」

翔はりボルキャリアの説明をして食堂を出ていき自分の部屋に戻っていった。

第8話（後書き）

今回も読んでくれてありがとうございます。何か更新がだんだん遅くなってる気がする。何でかな？

???「それはあなたの力不足だからよ！」

フォートレス「え、誰。ここには作者しか入れないのに」

マリナ「私だー」

ドン

フォートレス「マ、マリナさんでしたか。なぜここに」

マリナ「出番を得るためよ」

フォートレス「そうなんだ。でもハッキリ言ってあなたが一番出しやすいキャラなんだよ」

マリナ「そうなんだ」

フォートレス「まあ出すと色々とんでもない事になるんだけどね」

マリナ「なるほど、まあ私だし」

フォートレス「自覚みたいなのはあつたんだね」

マリナ「当たり前よ。自覚がないとただの痛い人じゃない」

フォートレス「・・・自覚がなくても十分痛い気がする」

マリナ「何か言った」

フォートレス「い、いえなんにも」

マリナ「そう、じゃあ反省会でもしましょう」

フォートレス「はい」

マリナ「まず、今回の話って・・・何が言いたいの？」

フォートレス「え」と、翔は昔大切な人を失って仲間とかはいらな
いと思うようになってしまったんですね

マリナ「なんか体がどうこうとか、私の言ってるアレとかは何？」

フォートレス「体の事はドーパントの気配が分かる事とかに関係し
ていて、アレはまだ秘密です」

マリナ「何かWに関係する事？」

フォートレス「どうかね」

マリナ「なにその答え」

フォートレス「本編でいつか分かるから」

マリナ「あ、そう。で、次回は」

フォートレス「……何にしようかな」

マリナ「ええ、まだ決めてないのー！」

フォートレス「では次回をお楽しみに〜」

マリナ「ねえ〜〜〜」

第9話（前書き）

今回の話はサウンドステージです。

第9話

翔「はあ〜今日もいい天気だ〜」

翔は空を見ながら言った。リボルキャリーの事があってから数日経った。これといった事件も無くリボルキャリーを出勤させたりは無いが換装ユニットは使ってみた事はある。

使った結果……。まずハードボイルダースタートダッシュモードは確かに爆発的な加速が出来るしかし陸上での戦いでよっぽど事がない限り使わないようなものつまりそんなに必要無いと言われてしまった。空戦形態のハードタービュラーは空戦魔導士なのに空を飛ぶのが少し苦手な翔（昔よりはマシになった）にとってはありがたいものだった。ハードスプラッシュャーは水中を移動出来るとゆう能力を持っているがハッキリいって水中戦なんて事、本当に特別な敵相手にしか使わないものである。

翔（まあ多分どこかで役に立つんだろうけどハードタービュラー以外使う回数が少ない気がするな）

シエル「何してるんだい翔。早く行きなよ」

翔「ああ、分かった」

シエルに言われて翔は足を動かした。翔がどこに行くのかとゆうと、なんか異世界でロストロギアがでてそれがレリックの可能性があるから回収しに行くらしい。

翔「シエル、お前は行かないのかよ」

翔がシエルに聞いた。シエルは

シエル「ああ、こっちにいるよ」

翔「そうか」

そう答えたシエルを見て翔はやっぱり来ないのかと少し呆れた。まあいつもの事だし気にする事じゃないなと思いヘリポートへ向かった。

翔がヘリポートへ向かうとフォワードの四人がいた。それから少し経ってはやて達も来た。

翔「よ、来たか」

はやて「うん、みんな揃ってるね」

翔「ああ、で一体何処へ行くんだ？」

翔がはやてに聞く。はやては

はやて「第97管理外世界「地球」日本海鳴市」

翔「地球!？」

翔は少し驚いた。まさか自分の故郷に行くことなるとは思ってもみなかった。

キャロ「地球ってフェイトさんが昔住んでた」

フェイト「うん」

なのは「私とはやて隊長はその生まれ、あと翔君もだよね」

翔「ああ」

スバル「ええ、そうなんですか!？」

スバルが驚きの声を上げた。

翔「そんなに驚く事か？名前でわかるだろ」

スバル「あ、そうですね」

スバルが納得したように言う。そして翔達は転送ポートへ行くためにヘリに乗り込んだ。

翔「なんか今無理矢理つなげた気がする」

ヴィータ「ん、なんか言っただか」

翔「いや、何でも無い」

キャロ「え」と第97管理外世界、文化レベルB」

ティアナ「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って魔法文化無いの!？」

ティアナが地球に魔法文化が無いことに驚く。

スバル「無いよ、うちのお父さんも魔力ゼロだし」

キャロ「スバルさん、お母さん似なんですね」

キャロがスバルに聞いた。

スバル「うん」

ティアナ「いや、何でそんな世界からなのはさんとか八神部隊長みたいなの

オーバーS魔導士が・・・」

はやて「突然変異というか、たまたまかな」

ティアナの疑問にはやてが答えた。

ティアナ「あ、すみません」

はやて「ええよ、別に」

なのは「私もはやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね」

はやて「な？」

フォワード「くくくへえ」「」「」

スバル「あの、翔さんも魔法と出会ったのは偶然なんですか？」

スバルが翔に聞いてきた。

なのは「あ、それ私も聞きたいかも」

フェイト「私も」

はやて「うちも聞きたいな」

隊長三人も話にのってきた。翔はため息をついて

翔「はあ、そうだな俺が魔法と出会ったのは・・・奇跡かな」

エリオ「奇跡・・・ですか」

翔「ああ、」

翔は初めて魔法に出会った時の事を思い出した。もう自分はここで死ぬと思った時いきなり銀色の砲撃で壁を破壊した少女、自分の命の恩人である少女の事を。

翔（まったく、今思うととんでもないよな。あれ）

そんな事を思っていると・・・

シャルル「はい、リンちゃんのお洋服」

リン「わー！シャルルありがとうございます！」

リンがシャルルから洋服をもらって嬉しそうにしていた。

キャロ「え、リンさんその服って・・・」

キャロがリンの服を見て首を傾げた。

リン「はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」

エリオ「あ、いえそうではなく・・・」

キャロ「なんか普通の人のサイズだなあって」

キャロがリンの服を見て首を傾げたのはリンの妖精サイズの身長にはやての小さい頃の服は大きすぎるとゆうことだった。

リン「ああ、フォワードみんなには見せたことなかったですね」

なんの事だろう？とフォワードのみんなはそろって首を傾げた。

リン「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ」

リンの体が輝くと、そこには普通の子供と同じぐらいの大きさになったリンがいた。

フォワード「「「「おお！」「」」」

リンのサイズが大きくなったのに驚くフォワードの四人

リン「と、一応これぐらいのサイズにもなれるですよ」

ティアナ「でか！」

スバル「いや、それでもちっちゃいけど」

ティアナとスバルがリンを見て感想を言う。翔はシエルもできるしそんなに驚く事かなあ？と少し疑問に思ってた。

キャロ「普通の女の子のサイズですね」

ヴィータ「向こうの世界にはリンサイズの人間もふわふわ飛んでる人間もいねえからな」

そりゃそうだと翔は思わず心の中でつつこんだ。魔法の無い世界でそんな人間いたら最悪、どっかの研究所に連れてかれそうだ。

ティアナ「あの、一応ミッドにも居ないと思います」

ティアナが言った。確かにそうだリンの様なユニゾンデバイスは極めて少ない。

その理由の一つが所有者との相性が悪いと融合事故を起こしてしまうとの関係があるのだろう。

リン「うん、大体エリオやキャロと同じぐらいですね」

エリオ「ですね」

キャロ「リンさん、可愛いです」

リン「えへへ」

スバル「リン曹長、そのサイズの方が便利じゃないんですか？」

スバルがリンに聞いてきた。

リン「こっちの姿は燃費と魔力効率があんまり良くないですよ、

コンパクトサイズで飛んでる方がらくちなんです」

キャロ「なるほど」

キャロが納得した様に言う。

スバル「あれ、でもシエルさんてユニゾンデバイスなのにいつも大きいですよね？」

スバルが翔に聞いてきた。

翔「ああ、あいつが滅多に小さくなんないのは普通のユニゾンデバイスと違うかな。」

いつも大きいサイズでも燃費と魔力効率が変わらないんだ」

シエルはガイアメモリを使用出来るように普通のユニゾンデバイスと異なった構造をしている。燃費と魔力効率が変わらないのもそのせいである

リイン「そうなんですか」

リインが納得したように頷いた。

それから数時間後、翔達は地球に到着した。

リイン「はい到着です」

地球に到着してリインが声を上げた。

キャロ「はあ」

ティアナ「ここが……」

スバル「なのはさん達の……故郷」

スバル達が地球の景色を見て呟く。

フェイト「そっだよ」

なのは「ミッドとほとんど変わらないでしょ」

ティアナ「空は青いし太陽も一つだし……」

キャロ「山と水と自然のニオイもそっくりです」

フリード「キユクル」

エリオ「湖、きれいです」

地球の自然を見てそれぞれの感想を言うエリオ達。

ティアナ「とゆうか、ここは具体的には何処でしょう？なんかこの湖畔のコテージって感じですが」

ティアナが自分の周囲を見て言う。

リン「現地の方がお持ちの別荘なんです、捜査員待機所としての使用を快く許諾してくれたですよ」

別荘を持つてるなんて結構な金持ちなんだろうっな」と翔が思っていると車の音が聞こえ車がやってきた。

ティアナ「あ、自動車？こっちの世界にもあるんだ」

翔「いや、車ぐらいはあるから」

ティアナが車があることに驚き、翔がつっこむ。そんな事してる
と車から短い金髪
の女性が出てきた。

「なのは！フェイト！」

なのは「アリサちゃん」

フェイト「アリサ」

アリサと呼ばれた女性となのはとフェイトがハイタッチをした。

アリサ「何よもう、ご無沙汰だったじゃない」

なのは「にやはは、ごめんごめん」

フェイト「色々忙しくって」

アリサ「私だって忙しいわよ、大学生なんだから」

リン「アリサさーん、こんにちはです」

アリサ「リイン、久しぶり」

リイン「はいです」

フェイト「あ、紹介するね私となのは、はやての友達で幼なじみ」

アリサ「アリサ・バニングスです、よろしく」

フォワード「「「よろしくお願いします」」」

フォワードのみんなが挨拶をした、翔も挨拶をしようとしたら・・・

アリサ「ん？アンタどっかで会った気がするんだけど」

アリサが翔をじっと見て聞いてきた。

翔「あ、ええ」となんて言えばいいんだ」

翔がなんて答えればいいのか困る。よく11年前の同級生の顔を覚えてるなー！と翔は心の中で驚いた。そしたらなのはが

なのは「えっと、アリサちゃんこの人は私達の小学2年生頃まで同級生だった高宮翔君だよ」

と翔の事を紹介した。翔はいや思い出せないでしょ、11年前の事なんかと思ってるよ

アリサ「ああ、そういえばいたわね」

なんて言った。その反応に翔は

翔「ええー！何で覚えてるの！11年前の事なのにー」

思わず大声で言ってしまった。

アリサ「いや覚えてるわよ。昔アンタと遊んだ事もあるでしょ忘れ
たの？」

翔「あゝそういえばそうだったな」

翔は思い出したかの様に言った。確かに昔なのは達と一緒に遊んだ
ことが何度かある。

その他にも昔の思い出が色々翔の頭の中に蘇ってきた。

アリサ「まあいいわ、ところではやて達は？」

リン「別行動です。違う転送ポートから来るそうなので」

そんな話をしばらくしてなのはが任務の話をし始めた。

なのは「さて、じゃあ改めて今回の任務を簡単に説明するよ」

フォワード「……はい」「……」

なのは「搜索地域はここ、海鳴市の市内全域。反応があったのはこ
ことこことここ」

なのはが反応のあった場所を示した。

ティアナ「移動してますね」

フェイト「そう、誰かが持って移動してるか独立して動いているのか分からないけど」

なのは「対象ロストロギアの危険性は今の所確認されてない」

フェイト「仮にレリックだったとしてもこの世界は魔力保有者が滅多にいないから、暴走の危険はかなり薄いね」

なのは「とはいえ相手はやっぱり相手はロストロギア。何が起ころか分からないし場所も市街地、油断せずにしっかり搜索していこう」

フェイト「では、副隊長達には後で合流してもらおうので」

なのは「先行して出発しちゃおう」

フォワード「」「」「はい」「」「」

こうして海鳴市でのロストロギア探しが始まった。

第9話（後書き）

フォートレス「今回も無事に投稿することができました。作者のフォートレスです」

マリナ「このぐる三日に一話更新になってきたね」

フォートレス「何で今回もいるの？」

マリナ「いや〜だって暇なんだもん」

フォートレス「そうですか、まあいいや」

マリナ「じゃあ、1つ質問いい？」

フォートレス「何？」

マリナ「何で翔は過去の事を色々忘れてるの？」

フォートレス「それはね昔の記憶がふっ飛ぶような事があったんだよ」

マリナ「ふ〜ん」

フォートレス「まあ翔の過去の事はもう少し話が進んだら書こうと思っっています」

マリナ「それじゃあ皆さん次回をお楽しみに〜」

第10話(前書き)

今回の話はいつもより早く投稿出来ました。

第10話

ロストロギアの探索はスターズとライトニングに別れてすることになった。

ちなみに翔はスターズと行動する事になった。

なのは「じゃあ中距離探査は、リンお願いね」

リン「お任せです！」

なのは「クロスミラージュにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから、そっちとこっちで少し離れて探して歩こう」

スバル・ティアナ「はい」

なのは「翔君はスバルとティアナの方へ行ってあげて」

翔「ああ」

フェイト「あとは市内の各所にサーチャーとセンサーを設置。作業としてはそんな感じかな」

エリオ・キャロ「はい！」

なのはとフェイトの説明が一通り終わると、シグナム達がやってきた。

シグナム「隊長。すまん遅くなった」

フェイト「シグナム、ちょうど始める所ですよ」

はやて「ロングアーチも準備万端や」

ヴィータ『あたしもこれから探索と設置をしながらスターズに合流する』

はやて「ほんなら機動六課出張任務、ロストロギア探索、任務開始や！」

フォワード「了解！」「」「」

ティアナ「つーか本当にミッドの田舎辺りと大差ないわね。町並みも人の服装も」

ティアナが海鳴の町並みを見て言った。

スバル「うーん、私は好きだな。こつゆう感じ」

スバルも海鳴の町を見て言った。

ティアナ「まーね、何かのんびりしてる」

スバル「あ、ティア！アイス屋さんかな！？」

スバルが店を指をさして言った。

ティアナ「あ、そうかも……ってやめなさいよ任務中に買い食いなんて恥ずかしい」

スバル「え〜でも翔さんは買ってるよ〜」

スバルが指を指して言った。

ティアナ「バカ！翔さんが任務中に買い食いするわけ無いでしょう」

ティアナがスバルの指さす方を見る。そこには袋いっぱいのお菓子を抱えてる翔がいた。

ティナナ「翔さん！何やってんですか！」

翔「……栄養補給」

ティアナ「いや、お菓子で栄養補給する事なんてできませんから」

ティアナが翔のボケに冷静につっこんだ。

翔「甘いなティアナ。俺は糖分を補給すると……なんか色々凄くなるのだー」

スバル「なんだってー」

スバルが驚愕する。しかし横にいるティアナは呆れた表情で

ティアナ「いや、絶対今作った口実ですよね」

ギクつとゆう表情と共に固まる翔。どうやら凶星らしい

ティアナ「あの、翔さん」

ティアナが硬直したまま動かない翔に声を掛ける。するといきなり翔が

翔「食べるぞー！！スバルー！」

と大声で叫ぶ。そしてスバルも

スバル「おおー！！」

翔同様に叫び2人で袋の中のお菓子を食べ始めた。ティアナはこの状況をどうすればいいか本気で悩んだ。

ヴィータ「おうなのは隊長、あたしはロングアーチからの直接指示で動いてっからな。
上空からのセンサー散布だ」

ヴィータが空を飛びながらなのはとラインに通信で話しかけた。

なのは『了解。お願いねヴィータ副隊長』

ライン『ラインも手伝わなくて平気です？』

リンがヴィータに聞いた。

ヴィータ「平気だ、リンはなのはを手伝ってあげな。お前の探査魔法は優秀だからな」

リン『はいです。ヴィータちゃん!』

なのは『じゃあまた後で』

ヴィータ「おう」

そしてヴィータは通信を切った。

翔とスバル、ティアナがなのはとリンに合流した頃

シャマル『ロングアーチからスターズとライティングへ、さっき教会本部から新情報がきました。問題のロストロギアの保有者が判明。運搬中に紛失したとの事で事件性はないそうです』

シャマルからそうゆう連絡が入った。

はやて『本体の性質も逃走のみで攻撃性は無し。ただし、大変に高価な物なので出来れば無傷で捕らえて欲しいとの事。まあ気い抜かずにしつかりやる』

攻撃性が無いのはいいことだけど無傷で捕らえて欲しいなんて面倒な話だなあと翔はため息を吐いた。

なのは「ちょっと、肩の力は抜けたかな？」

なのはがリン達に聞いてきた。

リン「はいです」

スバル「ほつとしました」

ティアナ「うん」

と三人が答えた。どうでもいいかもしれないが翔はなぜか牛乳を飲んでる。何でもカルシウムを取りたくなったとの事。

リン「とゆうかそろそろ日も落ちてきたし、晩御飯の時間ですね」

なのは「ライトニング、そっちはどう？」

フェイト「こちらライトニング。こっちも一段落ついたから待機所に戻るよ。ロングアーチ何か買ってこようか？」

はやて「こちらロングアーチ。ありがたい事に夕食は民間協力者のみなさんが用意してくれるそうや」

フェイト「了解、スターズのみんなを車で拾って帰るね」

なのは「ありがとう。フェイト隊長」

そう言い思念通信を切ったなのは。そして

なのは「うん、でも手ぶらで帰るのも何かな」

と言い携帯を取り出した。誰に電話するんだ？と翔は少し気になったがどうでもいいやと再び牛乳を飲み始めた。

なのは「あ、お母さん。もしもなのはです」

スバル・ティアナ「え？」

翔「ブウウウウウ」

なのはの電話の相手が母親と知り驚くスバルとティアナ。翔も驚いて牛乳を思わず吹き出した。

なのは「にやはは、うんお仕事で近くまで来てて・・・そうなの、うんホントすぐ近くでね現場のみんなにケーキ差し入れて持っていないってあげたいから・・・」

なのはが電話で母親と連絡を取っていた。それを聞いていたスバルはティアナに念話で

スバル（なのはさんのお母さん・・・）

ティアナ（それは存在はしてて当然なんだけど）

などとゆう会話をしていた。

なのは「じゃあ十分ぐらいでお店に行くから。うんそれじゃあ」

そう言い電話を切り、携帯をしまったなのは。そしてこっちを見て

なのは「じゃあちょっと寄り道」

リン「はいです！」

ティアナ「あの、今お店って・・・」

なのは「そうだよ、うち喫茶店なの。」

リン「喫茶翠屋、おしゃれでおいしいお店ですよ」

スバル・ティアナ「ええー！！」

スバルとティアナなのはの実家が喫茶店だとゆうのに驚く。翔はあゝと思いついた様に頷いた後なのはに

翔「なのは、ちょっと別行動していいか？」

なのは「え、いいけどどうしたの？」

翔「ああ、ちょっと行かなきゃなんない所があるから」

なのは「そうなんだ。ちょっと残念だなあ」

残念そうな表情をするなのは。

翔「ああ、甘い物の方へ行きたいんだけど、こっちを優先しなきゃ

いけないから。じゃあ後で合流しよう」

そう言っつて翔はどっか行っつてしまった。

スバル「翔さんの用事つてなんだろうティアア？」

ティアアナ「さあ？」

リン「と、とりあえず翠屋に行きましょう」

なのは「うん、そうだね」

なのは達は翠屋に出発した。

翔「ここに来るのは久しぶりかな」

翔は今、墓地にいる。翔はその一番端にある墓に止まってここに
来る前に買った花を添えた。

翔「最後に来たのは一年半ぐらい前かな」

翔は墓を見ながら言った。その表情は寂しそうです。悲しそうです。
あった。

翔「久しぶり。母さん、父さん」

第10話（後書き）

フォートレス「はい、海鳴でのロストロギア探し第二弾どうだった
でしょうか？」

マリナ「いや、どうだったとゆうか・・・最後のどうゆう事？」

フォートレス「見ての通りだよ」

マリナ「見ての通りだよってさ、いきなりあんな展開になってビッ
クリしたわよ！」

フォートレス「しょうがないでしょ。次回はWに変身予定です」

マリナ「え、何で？」

フォートレス「教えない」

マリナ「え〜！」

フォートレス「次回も見てください」

第11話(前書き)

今回は翔の過去が分かったり分かんなかったりします。

第11話

翔は墓に来ていた。理由はここに眠っている家族に久しぶりに顔を見せようと思ったからである。

翔の家族である父と母は既に他界してしまってる。ある者に殺されてしまったのだ。くだらない、ふざけた理由で翔の家族を殺され翔は全てを失った。

翔「父さん、母さん。俺ね仕事でなのはに会ったんだよ。覚えてる？高町なのは。よく家にも来てたよね」

翔は懐かしそうにそして悲しそうな顔をした。

翔「それとさ、なのはと会ってから昔の記憶が色々蘇ってきたんだ。・・・封印したはずの記憶がさ」

多分マリナが何かしたんだろうね。と言いそのまま翔は墓を見つめて数分動かずにいた。そして立ち上がり

翔「俺は多分親不孝者だよな。だけどこれが俺の生き方なんだよ。自分があるせいで誰か傷つくのが嫌だかって言って、本当は自分が傷つくのを一番恐れている、最低な奴だよ。でもそれが今の俺なんだよ分かってくれよな」

そう言い翔は墓を立ち去った。

墓地を後にした翔はなのは達に連絡しようとした。しかしその手を止めWドライバーを取り出し身につけた。Wドライバーには翔とシエルの感覚を共有出来る機能があり念話などの通信手段を使わなくても会話が出来る。

翔「シエル、地球にドーパントの気配がある」

シエル（そうか、でもなぜ地球に？）

翔「分からねえ、でもたとえどんなドーパントだろうと誰かを傷つけるならばっ倒す！」

そう言い翔はドーパントのいる場所に走り出した

翔（あいつらにもう誰も殺させねえ。俺みたいな思いをする人が二度と出ないように）

翔「ここら辺だ」

翔は今公園みたいな所にいる。ドーパントの気配を追ってきたらここにたどり着いた。

翔「何処にいるんだ？」

翔が辺りを見渡してると。

???「まさか、本当に来るとはね」

翔「っ！」

翔が声のした方を見ると緑色の鳥のようなドーパントがいた。

翔「お前、まさか俺の能力を知っていて・・・」

???「噂だけですよ、でもまさか本当にいるとは思いませんでしたよ・・・ガイアメモリを司る者」

翔「・・・お前は这个世界で誰かを襲ったか」

???「いいや、ただあなたの力の見に来たんですよ。あなたが最後に組織の人間の前に現れたのは四年前ですか。そしてその時手にした力を使つて戦っている。」

翔「何が言いたい」

???「つまり、あなたは組織の、いやガイアメモリの力から逃れることは出来ない。たとえ管理局なんて組織に入っても」

そう言われるが翔は黙つたままジョーカーメモリを出した。

【JOKER】

翔「確かに逃げられないかもな、俺が一番憎いはずのこの力にいつ

も頼ってる。この世界から存在を消したいはずの力に」

翔はそう言ってジョーカーメモリをWドライバーに挿入する。既に右スロットにはサイクロンメモリが転送されてある。

翔「でもそんな力を使ってでもお前らの事をぶっ潰したいんだよ！」
そしてバツクルを展開した。

【CYCLONE JOKER】

翔が強風を纏った。風が止まるとそこには右半身が緑で左半身が黒のWサイクロンジョーカーになった。

W（翔）「さあ、お前の罪を数えろ！」

Wとドーパントの戦いが始まった

W（翔）「いくぜ！はあ」

Wが敵のドーパントに向かって走りだした。しかし

????「ふん」

敵のドーパントは羽を使って飛び上がった。

W「『何！？』」

Wは敵のドーパントが飛んだのに驚いた。

????「そんなに驚く事ですか？私のガイアメモリは見ての通りバード。つまり飛行を得意としています」

鳥のドーパント。バードドーパントが言った。

W^{シエル}「翔、こつちも飛ぼう」

シエルが言ったしかし翔は魔法を使って飛ぼうとせずトリガーマモリを出した。

W^{シエル}「何故だい？」

W（翔）「もし、俺が飛行魔法を使ってそれをあいつらが感知したらどうする？」

W^{シエル}「間違いなくここに来るだろうね」

W（翔）「これは俺の戦いだ。あいつらに手を出してもらいたくないし、コイツ等と関わって欲しく無い」

翔が言うといきなりWの右手が動き右手にルナメモリが握られた。

W（翔）「シエル・・・」

W^{シエル}「確かに彼女達とあの組織は関わって欲しく無いのは同感だね。それに僕の相棒は一度決めた事を曲げないからね」

W（翔）「おう！ありがとうなシエル」

そう言っつてメモリを変えようとしたが・・・

ドン！ドン！ドン！

空を飛んでいたバードドーパントがWに火炎弾を発射してきた。

バード「仲間思いですね。しかし人の心配をしてる場合ですかね！」

さらにバードドーパントは羽根手裏剣で攻撃してきた。

W（翔）「うおっと！あぶね〜」

Wは向かって来る攻撃を全てギリギリで避けた。そして全部避けた直後Wドライバーの両方のメモリを抜き右スロットにルナメモリ、左スロットにトリガーメモリを挿入した。

【LUNATRIGGER】

Wは右半身が黄色、左半身が青のルナトリガーになった。

W（翔）「はあー！」

ルナトリガーは胸部にあるトリガーマグナムを手に持ち、銃口を上空のバードドーパントに向け弾丸を撃ちだした。

バード「く、この程度」

バードドーパントはルナトリガーの弾丸を全て避けたが

W（翔）「甘い！」

バード「ぐわあ！」

突然、ルナトリガーの弾丸がバードドーパントに直撃した。

バード「な、何故だ。攻撃は確かに避けたはず」

バードドーパントは避けた弾丸が当たったのに驚愕する。避けた弾丸が当たった理由は

ルナメモリの力で弾丸のコントロールをしたからである。

W（翔）「そんなもんか？ならそろそろ終わりにしてやる」

バード「く、なめるなー！」

バードドーパントは羽根手裏剣と火炎弾の同時攻撃をしてきた。

W（翔）「うおおおおおおお！！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

トリガーマグナムでWはバードドーパントの全攻撃を撃ち落とす。

バード「バ、バカな」

バードドーパントは自分の攻撃が全て撃ち落とされて動揺した。

W「もう一発いくぜ」

さらにトリガーマグナムでバードドーパントを撃ち落とした。

バード「ゲワア！」

W^{シエル}「翔、いくよ」

W（翔）「ああ！」

Wはドライバーからトリガーマモリを抜きトリガーマモリをトリガーマグナムのマキシマムスロットに挿入した。

【TRIGGER！MAXIMUMDRIVE！】

その直後トリガーマグナムをマキシマムモードにした。そしてトリガーマグナムの銃口に黄色と青の光が集まってきた。

W「トリガールバースト」

そしてトリガーマモリの銃口から黄色と青の無数のエネルギー弾が放たれた。

バード「うわあああああ！！」

そして爆発と共にバードドーパントは爆発した。

W（翔）「あとお前、俺が仲間思いと言っただけどそれは違う。俺に仲間はいない、俺が心配したのは普通の管理局員とお前等が関わりを持つことだ。面倒な事になりそうだしな」

そうやってWは変身を解除し、壊れたメモリを回収してその場を立ち去った。そこにスーツを着た若い男が倒れていたが多分あいつ等の組織の人間が回収するだろうと思ひ翔はその場を立ち去った。

第11話（後書き）

マリナ「ドラマCDの内容から脱線してない!？」

フォートレス「だってこれやらないと頭の中で考えてる話にならないだもん。次回から戻るから許して」

マリナ「それは許すけどさ、私の出番が無いよね!それを一番早くどうにかして！」

フォートレス「まあそれはどうにかしてあげるよ・・・いつか」

マリナ「いつかなの!出来れば早くやって欲しいんだけど」

フォートレス「それよりもこの小説10話越えたね」

マリナ「話変えるな!まあこれが小説と言えるものなのか分からないけど無事に10話を越えたね。ちなみに評価とかってどうなってるの?」

フォートレス「え」と、総合評価24ptでお気に入り登録7件」

マリナ「0じゃないんだ。よかったね」

フォートレス「本当だよ。最初見てくれる人がまったくいないと思っただけでプロローグ書いてたもん」

マリナ「プロローグの時からそんなの考えてたんだ」

フォートレス「ちなみにPVは累計16117、ユニークは累計213人です」

マリナ「そんなに多くの人が見てくれてんだ」

フォートレス「本当に感謝しまくります。これからも一生懸命がんばります」

マリナ「またね」

第12話(前書き)

サウンドステージの話も終わりです。

第12話

翔「……………」

翔は黙ったまま夜の町を歩いていた。他のメンバーは数分前待機所に戻ってるらしい。

翔「……………あまり考えても仕方無いか」

翔は少し立ち止まって呟いた。翔が考えていた事それは機動六課とあの組織が接触するかもしれないとゆうこと。この四年間動かなかったのにいきなり知ってるはずの翔の能力を見に来た。それは組織が近い将来動くかもしれない可能性があるとうゆうことでもある。その時も翔が機動六課にいたら確実に機動六課に攻めてくるだろう。翔を連れ戻すために。

翔（もしも本当にそうなる可能性があるとしたら俺は……………）

そんな事を考えてる内に待機場所の近くに来ていた。翔はとりあえず考えるのをやめてみんなの所に行くことにした。

翔「……………なんじゃこりゃ」

翔が戻ってきて見たものそれはスバルとエリオの食事シーンだった。この光景、最初は翔も驚いたがだんだん慣れてきたと思っていたのだが、いきなり目にはいると驚いてしまう。

なのは「あ、翔君！」

なのはが翔が帰ってきたのに気付いてやってきた。

翔「よう、ちよつと遅くなつたな」

なのは「うん、用事は済んだの？」

翔「ああ」

そんな会話を二人がしているとフェイトが来た。

フェイト「翔、戻ってきたんだ」

翔「ああ、ちよつと遅かつたかな？」

フェイト「全然、大丈夫だよ」

翔「そうか、ならいいや」

はやて「でも、何処に行つてたか気になるな」

いきなり翔の後ろにはやてが現れた。

翔「うわぁ！はやて、いきなり出てくるな！」

はやて「別にええやる。それで何処に行ってたんや？」

スバル「私も聞きたいです！」

食事をしてきたスバルが言ってきた。

アリサ「そうね、私にも聞かせてもらおうかしら」

アリサも会話に参加してきた。どうすればいいんだと頭を抱えたくなっていると、アリサの隣にいる女性と目が合った。

「あの、翔君だよな」

翔「えっと、確かすずかだったよな？」

すずか「うん、久しぶり」

この女性の名前は月村すずか。なのは達の友達であり翔にとっても小学二年生までの友達であり同級生である。

はやて「で、何処に行ってたんや翔君？」

はやてが結構強引に話しを戻した。翔はしょうがねえなど言いながらみんなの疑問に答えた。

翔「俺は家族と会ってた。それだけです」

嘘は言っていないよなと翔は心の中で呟きながら言った。それを聞いていたみんなは

へえ〜とゆう感じの顔をしている。

なのは「翔君、家族と会ってたんだ」

翔「そうだけど」

フェイト「でも、家は引越したからこの近くにないんでしょう？」

翔「家族と会うのに別に家じゃなきゃいけないなんて事無いだろ」

はやて「翠屋で会えばよかったのに」

翔「向こうが指定した場所がいつって言ったから仕方無いだろ」

そんな感じで質問を色々されながら翔は食事をとった。その後他の協力者の人に翔は自己紹介をしたりした。

翔「はあくどうしてこうなった」

翔は歩きながら独り言を言った。翔の周りには六課のみんなや協力者のみなさんがいる。何故こんなに大人数で移動してるかとゆくと、はやてが食事後に

はやて「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂すまそうか？」

と言った。でもコテージにはお風呂が無いらしい。なのでこうしてスーパー銭湯を目指し歩いていた。それにしてもこの人数で移動ってなんか目立つなと翔は思ったがあえて言葉に出さなかった。そんなことを考えてるとスーパー銭湯の目の前にいた。そして中に入ると

「いらつしゃいませー海鳴スパラクーアツーへようこそ・・・団体様ですか？」

はやて「え」と大人13人と

フェイト「子供4人です」

ティアナ「エリオとキャロと・・・」

リン「私とアルフです」

アルフ「うん」

嬉しそうに答えたのは、フェイトの使い魔アルフだ。

スバル「えっと、ヴィータ副隊長は・・・」

ヴィータ「あたしは大人だ」

ヴィータが少し不機嫌そうに言った。店員は少し困っていたがしっかり接客した。

「あ・・・はい。ではこちらへどうぞー」

はやて「あ、お会計しとくから先行っててな」

そう言っってはやてはレジに行った。

『はい！』

そう言ってみんなは中へ入っていった。

エリオ「良かった、ちゃんと男女別だ」

エリオが男湯と女湯の入口を見て言った。

翔「いや、今じゃ混浴の方が珍しい気がするけど」

キャロ「広いお風呂だって、楽しみだねエリオ君」

エリオ「あ、うんそうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

キャロ「え、エリオ君は？」

エリオ「ぼ、僕は一応男の子だし」

エリオが慌てて言った。

キャロ「んーでもほらあれ」

キャロが看板を指さして言った。

エリオ「注意書き？えっと・・・女湯への男児入浴は11歳以下の

お子さまのみでお願いします」

キャロ「ふふ、エリオ君10歳」

キャロが嬉しそうに言った。

エリオ「い、あ……」

エリオがなんて言い返そうか困っていると

フェイト「うん、せっかくだし一緒に入ろうよ」

キャロ「フェイトさん」

フェイトも話に入ってきた。それによりエリオはさらに慌てだした。

エリオ「い、あ……い、いや、あ、あのですね。それはやっぱり

スバルさんとか隊長達とかアリサさん達もいますし！」

必死になってエリオは言ったが

ティアナ「別に私がかまわないけど」

スバル「てゆうか、前から頭洗ってあげようか」とか言ってるじゃない」

エリオ「う……」

エリオが段々追い込まれてきた。そして

アリス「あたし等もいいわよ。ね」

すずか「うん」

なのは「いんじゃない？仲良く入れば」

そう言われ段々逃げ場が無くなってきたエリオに

フェイト「そうだよ、エリオと一緒に風呂は久しぶりだし・・・
入りたいなあ」

フェイトがトドメをさした。そしてエリオも固まってしまった。

エリオ「あ・・・あの・・・お気持ちは非常に・・・なんです・・・
すみません遠慮させていただきました」

フェイト・キヤロ「え」

そろそろ助けてやるかと思ひ翔が

翔「まあ、エリオがそう言ってるんだしそうさせてやれば？無理に
一緒に入るのも可哀想だし」

翔がそう言って助け舟をエリオに出した。そうするとエリオが感動
したように翔の顔を見た。

翔「それじゃ行くか。エリオ」

エリオ「はい」

翔とエリオは先に入っていった。

フェイト「・・・行っちゃった」

フェイトは少し不満気だった。

シヤマル「人数分、ロッカー確保できたわよー入りましょ」

『はい』

そして女性陣は女湯へ入ってった。

キャロ「え」と

キャロはさっきの注意書きを見て何かを企んだ。

翔とエリオは脱衣所で服を脱いできた。

翔「それにしてもいつもあんななのか？」

エリオ「はい・・・」

翔「大変だな」

そう言い翔は自分の服を脱いだ。

エリオ「ひ！？翔さん。その傷・・・」

エリオが翔の体についてる傷を見て言った。

翔「ああこれか。これは昔ちょっとあつてな・・・まああんまり気にするな」

エリオ「あ、はい」

翔「あとさ、このことはあまり他の人に言わないでくれ。あまり心配させたくないし」

エリオ「分かりました。じゃあ先に入ってきます」

翔「ああ、分かった」

そう言つてエリオは先に風呂に入つていった。その少し後翔も入つて背中越しの流し合いなどをしていたりしていたすると

キャラ「エリオくん」

エリオ「キ、キャラ！？どうしてここにいるの！」

エリオはキャラが男湯に来たことに驚く。

キャラ「11歳以下なら女の人も男湯に入つていいんだって」

翔「なるほどな。おいキャラこつち来いよ、俺が背中洗つてやる」

キャラ「あ、ありがとございます」

翔「気にすんなって」

翔はキャラの背中も洗った。

エリオとキャラは子供用露天風呂に向かい翔は一人で風呂に浸かっている。なんかエリオの悲鳴が聞こえてきたが……まあ気にしなくて大丈夫だろうと思って

翔「それにしても、柄にもない事したな……」

翔はさつきエリオとキャラにしたことを思い出した。まあたまにはああゆうのもいいかなとか思いながら翔はそれから数十分風呂に浸かっていた。その後風呂から上がり数分経った時ロストロギアの反応が現れ全員戦闘態勢になった。

翔「さてと、俺はフォワードの援護でもしますか」

そう言いロストロギアの方へ翔も向かうそしてロストロギアの形状を見て

翔「なんじゃこりゃ」

思わずそう言いつてしまった。

ロストロギアの形状はスライムみたいで、危険を感じると複数に分裂してダミー体を増殖する物だった。しかし本体は一つで本体を封印すればダミー体も消えるらしい。

翔「面倒な敵だなあ。シエル行くぜ」

そう言いながらWドライバーを腰に装着した。

シエル『ああ、行くよ』

【サイクロン】

【ジョーカー】

翔・シエル「『変身』」

サイクロンメモリが装填され翔もジョーカーメモリを挿入する。

【サイクロン・ジョーカー】

そしてバックルを展開してWサイクロンジョーカーになった。

W（翔）「さて、今回は援護だからこいつを使うか」

Wはスタッグフォンを取り出しヒートメモリを挿入した。

【ヒート！マキシマムドライブ】

するとスタッグフォンが炎を纏いスライムに体当たりをした。

W（翔）「さてと、次はコイツを使うか」

次にルナメモリをバッドショットに挿入した。

【ルナ！マキシマムドライブ】

そしてバッドショットが特殊発光を放った。そうすると大半のダミ
ー体が消えた。

W（翔）「これだけやれば、あとは大丈夫だろ」

その後フォワードが本体を封印し今回の任務は終わった。

すずか「そう、もう帰っちゃうんだ」

アリス「一晩位止まってけばいいのに……って訳にもいかないの
か」

フェイト「ごめんね」

なのは「今度は休暇の時に遊びに来るよ」

そんな会話をなのは達がしてる時翔は

翔（さて、まず帰ったらマリナに色々聞かないとな。あと俺がこの

部隊を出る相談も)

NOと言われそうだが何とか言わないと

翔(無駄に被害を出すのはごめんだしな)

エリオ「翔さん」

翔「ああ、今行く」

翔達はミッドチルダに戻っていった。

すずか「行っちゃったね」

アリサ「・・・うん」

すずか「ねえアリサちゃん。翔君の事なんだけど・・・」

アリサ「うん、なんかアイツなのはやアタシ達に壁をつくってる気がする」

アリサは言った。今の翔は11年前と同じようどこか違う気がする。本当の自分に偽りの自分を混ぜているそんな感じだと

すずか「なのはちゃん達は気付いて無いみたいだけど・・・」

アリサ「・・・一体何があったってゆづのよ」

第12話（後書き）

フォートレス「サウンドステージの話も終わりました」

マリナ「うんでも翔はどうなるの？」

フォートレス「いや、どうなるって何が」

マリナ「六課から出て行っちゃって感じだけど」

フォートレス「さ、どうだろう？」

マリナ「どうだろうって何よ！」

フォートレス「だって言ったら次回あんまり書く意味ないし・・・
まあ残る予定だけどね」

マリナ「言っちゃてんじゃん！」

フォートレス「さて、今回はホテル・アグスタの話です。あとそろそろ翔の過去が明らかになるかも！？」

マリナ「カラー無視するなー！」

フォートレス「ではまた次回」

マリナ「おーい！」

第13話(前書き)

今回すごく短いです。

第13話

地球での派遣任務を終えた日の夜。翔は自分の部屋で電話をかけていた。

マリナ『うん、もしもし』

電話の相手はマリナ・アークライト。翔の直属の上司である。

翔「お前に聞きたい事がある」

マリナ『分の中の関わりを持った人達の記憶と自分と関わりを持った人達の自分の記憶を何故完全に消さなかったか？』

翔「……………」

翔は思わず黙ってしまった。自分の言いたい事をこの女は知っていたからだ。

マリナ『その理由はね、はっきり言って私が消したくなかったの。だって勝手に人記憶をいじるなんて結構やっちゃいけない部類に入るし。だから高宮翔とゆうキーワードで記憶が蘇るように細工したって訳よ』

翔「……………そうか」

マリナ『別に文句とかは無いよね？』

翔「ああ……………あとさ『機動六課を抜けるって言うのも無しよ？』

「……何で？」

翔は少し苛立った感じで言った。一回も自分の考えが読まれてるのもあるが

翔「何でだよ！あいつ等がまた動き出したんだぞ。俺を狙ってやってくる可能性もある！その時俺がここにいると迷惑がかかるだろ！何で俺の問題にここの人達が関わらんなくちゃいけないんだよ！」

翔は普通の管理局員がドーパント事件に関わるのを嫌っている。初任務の時でたのは偶然だったから何とかこっちで処理できたが組織で襲撃してくると管理局の局員、もちろん機動六課のメンバーもドーパントと戦う事になるだろう。

マリナ『……どうしてもいなきゃいけないの。なぜなら今の高宮翔に必要な物をその人達が教えてくれるから。まあどうしても嫌だってゆうならあと2ヶ月位で帰ってきな』

そう言って一方的に電話を切られてしまい電話片手に立ち尽くす翔。

翔「……意味分かんねえ」

マリナの言葉の意味がまったく分からずとりあえず寝ることにした。

「ガイアメモリを司る者……ジョーカーの能力は」とある部屋にいる男が通信先の男に聞く。

『ええ、能力は最後に我々の前に現れた時よりも約10%能力が上がっています』

「……そうか」

『それと偵察に向かわせた際ジョーカー達にガイアメモリを破壊されましたが……』

「別に構わない、どうせそれほど価値の無いメモリだろ？」

『はい、それとジョーカーは今機動六課と呼ばれる場所にいるらしいんですが』

そうか、と返事を返し少し考えたあと男は

「彼……ジョーカーはまだあの力は使えないのか」

『ええ、あの時以来反応が出ていないので多分まで扱えないのでし
ょう』

「分かった。では研究員全員に伝えてくれ、ジョーカーがあの力を使えるようになったあとすぐに回収する。その為いつでも作戦に必要な物を使用できるようにしといてくれと」

『はい』

そう返事し通信を切る。男は通信を切った後、机の上にある書類を見つめた。

「早く使いこなせる様になれよ・・・ジョーカーいや高宮翔」

男がそう呟いた。机の上の書類には“ジョーカープロジェクト？”と書いてあった。

数日後、翔は任務に行くために準備していた。今回の任務はホテル・アグスタとゆう所の警備と人員保護らしい。

翔「必要な物は、これとこれとこれかな」

シエル「・・・翔、それは絶対に必要ないと思う」

翔の持ち物を見て言った。翔はお菓子を大量に持っていきこうとしていた。

翔「いや、これは冗談だから気にするな。さすがに任務にお菓子はダメだよな」

翔はお菓子を、持っていくのをやめた。

シエル「それで、今回の任務、僕はどうすればいい？」

翔「そうだな、お前は会場にリボルキャリアで行ってくれ」

シエル「別にいいけど・・・どうしてリボルキャリア？」

シエルは疑問に思い言ってみた。

翔「アレはまだ実戦で使った事が無いから使ってみたいんだ。それとこちら辺で出さないと出番が無くなる気がして可哀想だし」

シエル「・・・まあいいや。じゃあ準備ができ次第こつちも行くから」

翔「分かった、さてこつちも行きますか」

翔は部屋を出てヘリポートへ向かった。

翔（・・・あと二ヶ月ここにいるのか）

早く二ヶ月経たないかな、と思いながら翔は廊下を歩いていった。

第13話（後書き）

マリナ「・・・ねえ」

フォートレス「はい、なんでしょう」

マリナ「何か途中変なの出てきたね」

フォートレス「あれは・・・そのうち出てくる敵だ」

マリナ「そのうち！そのうち出てくるキャラ何で出したの！」

フォートレス「いやあ組織のキャラ出したらボスっぽい出したくなっただよ」

マリナ「まあいいや。で次回はいつごろ投稿できるのかな？」

フォートレス「それなんですけど。何か学校と言われる所でテストと呼ばれる事をやるらしいんですよ」

マリナ「じゃあ当分執筆できないかもしれないと？」

フォートレス「そうゆう事になるかもしれません」

マリナ「ま、頑張れ」

フォートレス「はい」

第14話(前書き)

灰村キヨタカさんの画集がすばらしかったと思いながら投稿しました。

翔「……………」

第14話

翔達は任務に行くためヘリに乗ってる。今ヘリの中ではやてが今回の任務の説明をしている。

はやて「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの製作者、およびリックの収集者は現状ではこの男」

はやてが画面を出すとそこに男の写真と情報が映し出された。

はやて「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

ジェイル・スカリエッティ、その名前は翔も聞いたことがある。マリナの話だと“変態研究者”らしい。そんな奴が相手とは大変だね」とか思いながら翔は画面を見ていた。

フェイト「こつちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」

フォワード「……はい!」「……」

フォワードの四人が返事をした。

リン「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

リンが前にでてきて言った。

なのは「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

リン「取引許可の出てるロストロギアが幾つも出品されるのでその反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、この事で私達が警備に呼ばれたです」

なるほど、と翔は納得した。とゆうかオークションなんて物をやんなきゃよくね？なんて事も翔は考えていたが、言っと説明が面倒なのであえて言わなかった。

フェイト「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑になりたりするし、色々油断は禁物だよ」

はやて「現場には昨夜からシグナム副隊長、ヴィータ副隊長、他数名の隊員が張ってくれてる」

なのは「私達は建物の中の警備にまわるから、前線は副隊長達の指示に従ってね」

フォワード「「「はい！」「」「」

キャロ「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って」

キャロが箱を指さして言った。

シャマル「ん？ああこれ、隊長達のお仕事着」

どうゆう事？翔はそれを聞いて首を傾げた。

翔「で、お仕事着とゆうのはこうゆう事か」

ホテルに到着して翔はさっきの箱を渡された。箱の中身はスーツだった。これを着て中の警備をすると翔はシャマルに言われた。自分も中の警備をするのに驚いたが素直に従わないと後で恐いので翔は言われた通りスーツを着てホテルの中にいる・・・階級が一番上なのは何を恐れてるのだろう、と翔はここに立っついていて思った。

翔「は、こうゆうのはあんまり着たくないんだけど」

なのは「でも、似合ってるよ翔君」

フェイト「うん」

はやて「もっと、自身持ってええで」

なのは、フェイト、はやてが言った。彼女達もドレスに着替えている。

翔「そうか？三人の方が似合ってる気がするけど」

なのは「え？そうかな」

フェイト「あ、ありがとう」

はやて「いやあく照れるな」

翔に似合っているとわれ顔を赤くする三人。

翔「じゃあ三人は中を頼む。俺はそれ以外の所を見てくるから」

そう言つて翔はホテルの廊下等を見て行つた。

翔「あ、そういえば」

一通り見ていった翔はスタッグフォンを取りだしシエルに電話を掛けた。

翔「シエル、今どうしてる」

シエル『リボルキャリアの中で待機してるよ』

翔「そうか」

シエル『・・・翔』

翔「どうした？」

シエル『マリナに言われた事だが』

翔「・・・」

翔は少し黙つて言つた。

翔「ああ、アイツの言ってる事の意味は分かつてる・・・みんな

は俺に無くて本当は俺に必要な物を持つてる。だからそれを教えてもらえって事を言いたいだろうな」

シエル『……………』

翔「でも、俺は今のままでいい。仲間がいなくて孤独な存在の高宮翔でいいんだ。俺は自分にとって必要な物を望んでいないだ」

シエル『……………そうか』

そう言っつてシエルは電話を切った。

翔「……………さて、監視の続きをするか」

スバル（でも今日は八神部隊長も守護騎士団、全員集合かあ）

スバルが念話でティアナに聞いてきた。

ティアナ（そうねえ、あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長達の事）

スバル（うーん、父さんやギン姉から聞いた事ぐらいだけど八神部隊長が使ってるデバイスが魔導書型でその名前が“夜天の書”ってこと。副隊長達とシャルル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力だつて事。で、それにリイン曹長合わせて六人

そろえば無敵の戦力って事。ま、八神部隊長達の詳しい出自と能力の詳細は特秘事項だから私も詳しくは知らないけど・・・)

ティアナ(レアスキル持ちの人はみんなそうよね・・・)

スバル(ティア、なんか気になるの?)

ティアナ(別に・・・)

スバル(そう。じゃあまた後でね)

ティアナ(ん・・・)

ティアナはスバルとの念話を切りある事を考えた。

六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ。八神部隊長がどんな裏ワザを使ったのか知らないけど隊長格全員がオーバース、副隊長でもニアSランク、他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり、あの歳でもうBランクを取ってるエリオとレアで強力な竜召喚士キャラは2人共フェイトさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもあるスバル。Wに変身し隊長達と互角の力持つ翔と相棒のシエル。

やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか。ティアナはそんな事を思ったがすぐその考えを振り払った。

けどそんなの関係無い。私は立ち止まる訳にはいかないんだ。ティアナはそう心の中で言い任務を続行した。

翔「さて、俺達も行くか。シエル！」

ホテルの外に出て翔はWドライバーを装着した。

シエル『ああ』

【サイクロン！】

シエルが転送されたWドライバーにサイクロンメモリを挿入する。

【ジョーカー！】

翔もWドライバーにジョーカーメモリを挿入しバツクルを展開しWになった。

【サイクロン・ジョーカー】

W（翔）「さて、シエル。ハードタービュラーは？」

W^{シエル}『もちろん、準備はできてる』

W（翔）「よし、じゃあ行くか！」

Wは走りだしリボルキャリーのある場所へ行った。直後リボルキャリーのボディが展開されハードタービュラーが姿を現した。Wはそれに乗りガジェットの出現した方向へ飛んでいった。

W（翔）「さて、何処ら辺かな？」

Wシエル「この先の森に魔力反応を感じる。多分そこだ」

W（翔）「りょーかい！」

Wは副隊長達が戦闘をおこなってるであろう場所に行った。

W（翔）「それじゃあ俺達も戦闘開始だ！」

Wはハードタービュラーから飛び降りると同時にサイクロンメモリを赤いガイアメモリに変えた。

【ヒート・ジョーカー】

赤いメモリはヒートメモリ。「熱き記憶」を宿したガイアメモリだ。

W（翔）「はああああー！」

Wはヒートメモリの力で右拳に炎を付加しガジェットを破壊した。

シグナム「ん、高宮か？」

ガジェットの破壊をしていたシグナムがWの方へ来て言った。

W（翔）「ああ、あまり必要無いと思うけど来たぜ」

シグナム「そうか、ではそっちに行った方を頼む」

W（翔）「了解！」

Wはシグナムに言われた方へ走りだし次々にガジェットを破壊していった。

W（翔）「つたく、どんだけいるんだよ」

W^{シエル}「確かに結構な数だね。翔、トリガーに変えよう」

W（翔）「ああ！」

Wはジョーカーメモリを取り出し、トリガーメモリを挿入した。

【ヒート・トリガー】

右半身が赤、左半身が青になりWヒートトリガーになった。

W（翔）「はあああ！」

トリガーマグナムから高熱の弾丸を連続で発射してガジェットの数を減らしていった。

W（翔）「このままいけばすぐ終わるな」

そう言ながらさらにガジェット達に弾丸を撃ち込むがガジェットの動きがいきなり変わり避けられた。

W（翔）「何!?!」

W^{シエル}「いきなり動きが変わった!?!」

シグナム「自動機械の動きじゃ無いな」

シャマル『有人操作に切りかわった』

シャーリー『それがさっきの召喚士の魔法・・・』

W（翔）「なるほど、随分厄介な事をやってくれてるな」

シグナム「ヴィータ、高宮。ラインまで下がれ向こうに召喚士がいるなら新人達のもとに回り込まれるかもしれん」

ヴィータ「分かった」

W（翔）「りょーかい」

そう言いWはハードタービュラーに乗りフォワード達のいる場所に向かった。

キヤロ「遠隔召喚、来ます」

キヤロが声を上げた瞬間、魔法陣が浮かび上がりガジェットがでてきた。

エリオ「あ、あれって召喚魔法陣!？」

スバル「召喚ってこんな事もできるの!？」

キャロ「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

ティアナ「何でもいいわ、迎撃行くわよ」

「」「」「」

フォワードの四人はガジエトの迎撃をするため行動を開始した。

W（翔）「さて、もう少しだな」

Wはハードタービュラーでフォワードの四人が戦闘している場所へ向かっている。

W^{シエル}「急いだ方がいいかもしれない、何か嫌な予感がする」

W（翔）「分かった」

Wはハードタービュラーの速度を上げた。

シヤマル「防衛ライン、もう少し持ちこたえてね。ヴィータ副隊長と翔君とシエル君がすぐに戻ってくるから」

ティアナ「守ってばっかじゃ行き詰まります。ちゃんと全機落とします！スバル！クロスシフトA行くわよ！」

スバル「おう！」

ティアナ（証明するんだ。特別な才能や凄い魔力が無くたって、一流の隊長達のいる部隊で、どんな危険な戦いだって・・・）

ティアナは魔力弾を作りながら

ティアナ「私は・・・ランスターの弾丸は・・・ちゃんと敵を打ち抜けるんだって」

そう言いカートリッジを四発使用した。

ティアナ「クロスファイヤー・・・シューート!!！」

ティアナの放った複数の魔力弾がガジェット達を破壊していったが、一発だけスバルの方へ向かっていった。

スバル「え!？」

スバルはいきなり魔力弾が飛んできて反応が遅れてしまった。しかし

【ヒート・メタル!】

W（翔）「はあああああ!!！」

ハードタビュラーで飛んできたWがメタルシャフトで魔力弾を弾い

た。

W（翔）「ふう、ギリギリだったな」

Wがそう言った直後ヴィータが駆けつけティアナに怒鳴った。

ヴィータ「ティアナ！この馬鹿！無茶やったうえに味方撃つてどうすんだ！」

ティアナ「っ……………」

ティアナは自分のミスに呆然していた。

スバル「あの、ヴィータ副隊長。今のもその、コンビネーションの内で……………」

ヴィータ「ふざけるタコ！直撃コースだよ今は！」

スバル「違ってます！今のは私がいけないんです！私が避けなかったから……………」

ヴィータ「うるせえ馬鹿共！もういい後はあたしがやる！二人まとめてすっこんでろ！」

それからしばらくして全部のガジェットの破壊に成功したがティアナはかなりの心の傷を負ってしまった。

第14話（後書き）

フォートレス「明日テストです！」

シエル「いきなり何言ってるんだい？」

フォートレス「明日、学校でテストがあると言ってるんだ」

シエル「そんな時に君は投稿したのかい？」

フォートレス「大丈夫！何とかなるよきつと」

シエル「はあ、困った人間だ」

フォートレス「まあそれは今置いといて、今回はホテル・アグスタの話でした。」

シエル「ハードタービュラーの出し方が本当に無理やりだね」

フォートレス「力不足なんだ。ごめんなさい」

シエル「確かに仕方無いか」

フォートレス「ところでシエルは何でここにいるの？」

シエル「今更だけどね。マリナに頼まれて来たんだ」

フォートレス「そうですか」

シエル「ところで次回は？」

フォートレス「模擬戦の所の最初の方までかもしれない」

シエル「ふん。で、次の投稿は？」

フォートレス「知らん！」

シエル「……」

フォートレス「では、また次回」

シエル「……」

第15話(前書き)

今回は少しシリアスぽかったりそうじゃなかったりな話です。

第15話

翔「うん」

シエル「どうしたんだい？翔」

ホテル・アグスタから帰ってきて翔は自分の部屋で考え事をしていた。

翔「いや、俺があまり首の突っ込む事じゃ無いと思うけど。ティアナは何故あそこで・・・いや普段から無茶ばい行為が多いのかなと思ったから」

シエル「そこまで多いかな？新人なら仕方無い気もするが・・・」

翔「あいつのは度を越えてる。だから気になるんだ」

シエル「・・・じゃあ久しぶりにアレを使うかい？」

翔「・・・その方法で人の事を知ろうとするのは駄目だと思う」

シエル「人に聞くのも同じようなものだろ？」

「どんだけ使いたいんだよ！と思ったが翔も人に聞くとして誰に聞くか？と悩んでいたのとおりあえず」

翔「はあ・・・分かった使ってくれ」

シエル「ああ」

そう言いシエルは自分の椅子から立ち上がり

シエル「さあ検索を始めよう」

そう言っって精神世界である世界の本棚に入った。

シエル「なるほど。そうゆう事か」

翔「どうした？」

シエル「ああ、翔、ティアナの事は過去の出来事が原因かもしれない」

翔「過去の・・・出来事？」

シエル「ああ。ティアナには兄がいたんだ。名前はティード・ランスター、階級は一等空尉」

翔「結構エリートだな」

シエル「ああ、でティアナが10歳の時逃走中の犯罪者を追跡している途中に・・・」

翔「・・・なるほど。でもそれとどう関係してるんだ？」

シエル「ティアナの兄は手傷は負わせたが捕まえられなかったんだ。そのせいで上司があまり良くない言葉を言ったんだ」

翔「なるほど、大体分かった」

翔はそう言っただけで立ち上がった。

シエル「何処に？」

翔「ちよつと散歩だ」

シエル「いつてらっしゃい」

翔は扉を開けて外へ出た。

翔が散歩と言っただけで来た場所には自主練をしているティアナがいた。

翔「よう、ティアナ」

ティアナ「翔さん」

翔「自主練も別に構わないけど、あんまり無茶すんなよ」

ティアナ「別に大丈夫です。私はこれぐらいやらないと強くなれないんで・・・凡人なもので」

ティアナは自主練を続けながら言った。

翔「凡人か・・・俺はそう思わないぜ幻術を使えるし作戦たてるのもうまいしさ・・・てゆうかお前が凡人だったら俺はどうなんだ？俺はシエルがいないと変身できないし魔法も飛ぶのとちよつとした魔力弾と砲撃しかできないぜ。ハッキリ言つて俺一人だとこのメンバーの中で一番役立たずだぜ」

ティアナ「・・・・・・・・」

しかしティアナは何も言わず自主練を続けた。

翔「・・・まあ別にお前がしたい事も分からなく無いけど、無茶して怪我とかしたら誰が悲しむのかよく考えとけよ？」

そう言つて翔はその場を立ち去つた。

本当に俺は弱い。

翔は歩きながらそう心の中で呟いた。

一人じゃ何もできない。

まともに戦う事も自分の中にある力を完全に扱う事もできない。

だから俺はあの日

全てを失った

あの日から全て壊れだしたんだ。

俺がこの力を持つてるから

俺が弱いから

翔「・・・はあ」

翔は一度ため息を吐き自分の部屋を目指して歩いた。

（数日後）

翔はスバルとティアナがなのはと模擬戦をしてるのを見ていた。

ヴィータ「お、クロスシフトだな」

翔の隣で見ているヴィータが言った。しかし

翔「キレが無い。どうゆう事だ」

翔は少し疑問に思った。いつもよりクロスシフトのキレが無いからだ
しかもさっき突っ込んで来たスバルは幻術では無く本人だった。

なのは「スバル！駄目だよそんな軌道！」

スバル「すみません！でもちゃんと避けますから！」

そう言ってスバルはなのはから離れる。その頃ティアナは別のビル
で砲撃を放とうとしていた。

フェイト「ティアナが砲撃!?!」

フェイトはティアナの行動に驚いていた。

スバル「でえりゃああああ！」

再びスバルがなのはに向かって攻撃するがなのはがそれを防いだ。
その時砲撃を放とうとしていたティアナの姿が消えた。

翔「何!?!」

翔はティアナが幻影だったのに驚いた。そして本物を見つけて思わず

翔「え!?!」

と言ってしまった。なぜならティアナはクロスミラージュから魔力
刃を出してなのはに向かって走りだしていたからだ。

ティアナ「一撃必殺！てええええい!!」

ティアナが突っ込んでいったその瞬間

なのは「レイジングハート・・・モードリリース」

【オーライ】

レイジングハートが待機状態になりその瞬間爆発がおきた。

翔「一体・・・何が？」

爆発で舞い上がった煙が晴れるとそこにはクロスミラージュの魔力刃とりボルバーナツクルを掴んでるのはがいた。

なのは「おかしいなあ・・・二人ともどうしちゃったのかな？頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

なのはの口調は平静だがかなり怒っている。そんな感じが翔はした。

なのは「練習の時だけ言うこと聞いてるふりで本番でこんな危険な無茶するんじゃ練習の意味・・・無いじゃない」

何も言えなくなってる二人に向かい更に言葉を続けていくなのは

なのは「ちゃんとさ・・・練習通りやろうよ・・・私の言ってること、私の訓練・・・そんなに間違ってる？」

その瞬間ティアナは魔力刃を解除し後方のウイングロードに降り立った。

ティアナ「私は！もう・・・誰も傷つけどく無いから！無くしたくないから！！」

誰も傷つけどく無い、誰も無くしたくない・・・か。

翔はティアナの言った言葉を聞いて少し右手を握りしめた。

俺もそんなこと思ってたな。その台詞を最後に言ったの何年前だったっけ？

ティアナ「だから強くなりたいんです！！」

なのは「少し、頭冷やそうか・・・」

翔が考えているとなのはが足下に魔法陣を展開しティアナに人差し指を向けた。

なのは「クロスファイアー・・・」

ティアナ「うわああああ！！フロントムブレイ・・・」

なのは「シュート」

なのはがティアナに向かってクロスファイアーを放ち直撃した。

スバル「ティアー！！バインド！？」

スバルがティアナの所に行こうとしたがバインドで縛られた。

なのは「じっとして・・・よく見てなさい」

煙が晴れるとフラフラな状態で立ってるティアナがいた。そのティアナに向かってなのはが二発目のクロスファイアーを放とうとした。スバル「なのはさん!!」

スバルが叫ぶがなのはには届かず二発目のクロスファイアーが放たれた。

誰もがティアナに直撃したと思ったが

翔「つく!!まったく容赦ねえな」

翔がティアナの前に出てなのはのクロスファイアーを代わりに喰らったのだった。

なのは「どうして・・・邪魔をしたの？」

翔「さすがにやりすぎだって判断したからだ。あれ以上やる意味は無い」

なのは「それを判断するのは私だよ・・・だからどいて」

翔「どかない!スバル、ティアナのこと頼む」

スバル「は、はい!!」

スバルはティアナを抱えてその場を離れた。

なのは「翔君。そこまで私の邪魔をするなら・・・翔君も頭冷やそうか」

翔「……」

二人は……いやここにいる人間はまだ知らなかった。この衝突が高宮翔の全てが機動六課全員に明かされるきつかけになるとは

第15話（後書き）

フォートレス「さあてついにこの話だよ」

マリナ「早かったような、遅かったような・・・」

フォートレス「今回は翔がとんでもないことになっちゃいますよ」

マリナ「へえ」

フォートレス「マリナも出るかもよ？」

マリナ「え、！？」

フォートレス「ではまた次回」

マリナ「ねえ最後言ったのって本当！！」

第16話(前書き)

今回かなり滅茶苦茶です。

第16話

翔はなのはを真っ直ぐ見ていた。そしてこう言った。

翔「お前・・・何やってんだよ」

なのは「・・・？」

なのははいきなりそんなことを言われ疑問に思ったが翔は構わず続けて言った。

翔「お前がしたかったのはこんな事だったのかよ!!」

なのは「うるさいよ。私の訓練の意味も知らないのに・・・」

なのはがそう言うと翔は

翔「知らねえよ。お前が考えてる事なんて・・・」

なのは「じゃあ私の前に」どかねえよ!」・・・どうして?」

翔「確かに俺はなのはの考えてる事なんてわからねえよ!でもこんなやり方間違ってるって言うのは断言できる!」

そう言った瞬間、翔の顔を桜色の魔力弾が掠めた。

翔はその行動に表情を変えずただ目の前の魔力弾を放った人物を見つめていた。

なのは「これが最後の忠告だよ。翔君、私の気持ちも知らないで私

の前に立たないで・・・じゃないとただじゃすまないよ?」

そう言っつてレイジングハートを構えるなのは。翔は・・・

翔「・・・・・・・・」

ただ両手を広げてるだけだった。メモリもドライバーも出さずただ立っつるだけだった。

なのは「・・・・・・・・どうゆう事?」

なのはも翔の行動を疑問に思った。翔は

翔「誰がお前と戦っつて言っつたよ。俺はお前と戦わない」

なのはの目を見て翔が言っつた。そんな翔になのは・・・

なのは「ふざけないで!!戦っつ気も無いのに私の前に立ちふさがらないで!!」

なのはが叫ぶが翔はまっつたく動こうとしんない。

なのは「っ!レイジングハート!!」

【アクセルシューター】

なのは「立ちふさがるなら・・・戦えー!」

なのはが翔に向かつて10発のアクセルシューターを放っつた。

そしてそれは・・・

全て翔に直撃した。

翔「がはあ・・・」

翔はアクセルシューターを全発喰らったせいで倒れそうになるが、何とか二本の足で立っていた。

なのは「これで分かったでしょ。私は翔君が無抵抗でも容赦なく攻撃するよ」

なのはが冷たく言い放ったがこの時なのはは、少し動揺していた。

何故翔がさっきのアクセルシューターを避けなかったのか？

さっきなのはの放ったアクセルシューターは確かに威力は高いが決して避けられないものじゃなかった。

なのはが考えてると今にも倒れそうな翔が再び両手を広げた。

なのは「な、何で？」

無表情だったなのはが驚いた。普通あんな事をされればもう戦う以外選択肢は無いと思うはず。なのに目の前の少年はさっきと同じように立ったままだった。

翔「言っただろ。俺は・・・戦わないって」

なのは「っ！」

翔「何でお前を止める為に戦わなくちゃいけないんだよ。何で人の

間違いを正す為に力をふるわなくちゃいけないんだよ」

翔は真つ直ぐなのはを見て言った。

翔「今の方法で本当に強くなれると思ってるのか。肝心な事を何も話さないで、ただ力をつけさせるだけで、本当の強さをアイツらが手に入れられると思ってるのかよ！」

なのは「・・・さい」

翔「確かになこの方法は力は延びるよ。でも本当にそれだけでいいのかよ！それ以外に教えなきゃいけないものがたくさんあるだろ！」

なのは「・・・うるさい」

翔「このままのやり方で分かってくれとか思ってるのかよ！分かるわけないだろ！自分の思いとか気持ちは何もしないで他人に伝わるとか思ってるのかよ！訓練してれば伝わると思ってるのかよ！伝わるわけねえだろ！！何も言わないで伝わるなら言葉はいらないんだよ！！言葉にするから伝わるんだよ言葉があるから分かり合えるんだよ！！ガキじゃねえんだからよおそれぐらい分かるだろ！！」

なのは「うるさいーい！！」

【デバインバスター】

なのはの叫び声と共に桜色の砲撃が翔の体を飲み込み爆発が起きた。ここにいる全員、翔は今の砲撃を喰らい倒れてると思ったが・・・

なのは「・・・嘘・・・」

なのははその光景を見て思わずそう言った。なのはが見ている場所、そこにはデバインバスターで吹っ飛ばされた翔が立っていた。

なのは「何で！何で立っていられるの!？」

なのはのデバインバスターは強力な砲撃だ。直撃すれば強い魔導士でも相当のダメージを喰らう。バリアジャケットさえ無いただの間が喰らって無事で済むはず無い。しかし翔は立っていた。着ていた服はボロボロになり体も今にも倒れそう

だ。
翔「・・・選べよ」

しかし翔はそんなことを気にせずなのはに向かって言った。

翔「このまま今まで通り力を延ばすだけしかないのか、力だけじゃ無く一人一人の心と向き合って導いていくのか・・・」

翔はなのはをしっかりと見て

翔「自分が胸を張ってアイツらの先生でいられる方を選べよ!！」

なのは「うわあああああ!！」

叫び声と共になのはが再びデバインバスターを放った。

ドゴオー!!--とゆう爆発音と共に翔は砲撃に飲まれ吹っ飛ばされた。

終わった。

なのは2発目のデバインバスターを放ったあとそう思った。

生身の人間が立っていられる分けない。いや最初の喰らった時立っていたのが奇跡だったのだ。煙が晴れるとデバインバスターを喰らい倒れてる翔がいた。

そんな翔を見てなのはさっき翔が言っていた言葉を思い出した。

よく考えればその通りかもしれない。ちゃんと言葉にしてれば自分の訓練の意味を教えてティアナにもしっかりと向き合えばこんな事にはなんなかったのかなと。

そんな考え事をしてると・・・

ピクリと翔の指が動いた。

なのは「・・・え」

何かの見間違えかと思った。しかし指の次に腕が動いた。今度は足が動いた。

なのは「あ、ああ・・・」

そして翔は起きあがった。関係無いはずだ。彼はなのはの訓練の意味を知らないはずだしなのはの為にここまでなる必要だってそもそも無いはずだ。でも

それでも翔は立ち上がった。身体をボロボロにしてもなのはと向き合う為に

なのは「ああ……」

なのは再びレイジングハートを翔に向けた。立ってるのもやっとの翔にしかし

何もできなかった。かわりに翔に向かって言った。

なのは「何で……何でそこまでするの！？私、そこまで間違っていたの？私をしていた事ってそんなに間違ってたの！？」

なのはは叫んだ。答えは返ってこないかもしれない、意識がはつきりしてなくて聞いてないかもしれない。それでもなのはは聞いた。すると

翔「間違っちゃ……いねえよ……」

翔から言葉が返ってきたのだ。なのははその事に驚いた。構わず翔は続けた。

翔「お前の……訓練は全部間違ってる……訳じゃねえよ……ただだよ……お前は自分が昔失敗して……悲しい思いして……苦しい思いした……だからもう自分と同じ思いをして欲しくないと思っただけで指導官になっただけだろ？」

なのは「っ！！」

翔はしつかりなのはを見て笑いながら

翔「なら、それをしつかり伝えてやれよ・・・アイツ等まだ戦う意味とか強くなるのに大切な事とか全然分かんないと思うんだ・・・だからちゃんと伝えてやれよお前の気持ち・・・」

そう言つて翔はバタリと倒れた。

シエル「はあ、気になって来てみれば大変な事になつてるね」

シエルがその光景を見て呟いた。

最初は模擬戦など興味なかったが、途中何か起きそうな気がしたので来たのだ。そしたら翔がなのはにふっ飛ばされながら説教みたいなことをしていた。

シエル「それにしてもよくあそこまでやるね。どちらとも」

ヴィータ「お前居たのか」

そして初めてシエルの存在に気づいたヴィータ。今までシエルの存在には誰も気付いてなかった。フェイト達もシエルに気づき向かってきた。

フェイト「シエル。あのさ・・・」

シエル「僕にも翔が何をしたかったのかは全部分からないさ。とりあえず翔を医務室にでも連れて・・・」

シエルがそう言いかけた途端

正体不明の気配が出現した。

シエル「・・・まさか」

シエルは知っている、この気配の正体を。そして気配のする方を見た。なのはやフェイト達は気付いてないらしい。なのでシエルは

シエル「なのは！早くそこから離れる！」

と叫んだ。しかしなのははシエルの言っている意味を理解できず少し困惑していた。

フェイト「シエル。どうゆう事？」

シエル「駄目なんだ。今の翔に近づいたら・・・」

シグナム「何故今の高宮に近づいてはいけないんだ？」

シグナムがシエルに聞こうとしたその時

翔がいきなり立ち上がった。

キャロ「え!？」

エリオ「翔さん!?!」

エリオとキャラロが驚きの声を上げる。シエルを除くメンバーも驚いていた。

しかしすぐに翔の異変に気付いた。

今立ってる翔はさっきまでとは違った。今にも倒れそうだった足はしっかりと立っていて

その瞳はいつもと違う紅くなっていた。まるで別人のように

ヴィータ「何だ、あれ!?!」

翔の異変に驚くヴィータ達。シエルは翔が起きあがった事に焦る。

シエル「早くしろ、なのは!早くしないと……」

シエルが叫んでる途中

翔? 「ウオオオオオオ!!」

翔が叫びながらなのはに突っ込んでいった。

なのは「え!?!」

なのはは少し困惑していたがとっさにシールドを張った。しかし

シエル「駄目だ!?!」

シエルが言ったの同時に突撃してきた翔が拳を放ちシールドとぶつ

かった。

そして翔の拳がシールドを破壊し衝撃でなのは少し吹き飛ばされた。

ヴィータ「な!?!」

フェイト「嘘!?!」

フェイト達は驚いていた。腕の力だけでシールドを破るなんてまずあり得ない。

シグナム「一体どうゆう事だ?」

シエル「……今の翔は見ての通り普通の状態じゃない。身体能力があり得ないほど上がっている……あの翔を止めるにはSランク以上の魔導士がいないと……」

エリオ「Sランク!」

ヴィータ「マジかよ」

フェイト「とにかく、止めないと!」

そう言った直後

翔「ガアアアア!」

翔が叫び再びなのは元へ向かっていった。フェイト達も向かおうとしたが

翔の速度が速く間に合わないと思ったしかし

いきなり翔の体が吹っ飛ばされた。

フェイト「え？」

突然の事にフェイト達は驚いた。なのはも驚いた表情をしていた。

シグナム「何だ？」

キャロ「あ！あそこに人が立っています」

キャロが指を差した方向。翔となのはの間に一人の女性が立っていた。

腰の辺りまである青い髪、服装はTシャツと長ズボンの女性が立っていた。

そして翔を見てため息を吐いた。

エリオ「・・・誰、なんですかね？」

エリオは突如現れた女性に少し驚きながら疑問の声を上げた。シエルはその女性を見ながら言った。

シエル「マリナ・アークライト。僕と翔の上司で管理局最強の裏工―スだ」

マリナ「まったく、面倒ね〜本当」

マリナは翔を見て面倒そうに呟いた。なのはは自分の目の前にいきなり女性が現れた事に驚いている。

なのは「あの、あなたは・・・」

マリナ「うん？私は・・・」

直後、翔が一瞬で距離を縮めマリナに殴りかかった。しかし吹っ飛ばされたのはマリナではなかった。

翔「ガアアアア！」

マリナが突っ込んできた翔の腹を殴った。

マリナ「正義のヒーローさま・・・かな？」

なのはの方へ振り向きウィンクしながら言った。

マリナ「さ〜て、面倒だしそろそろフィニッシュにしますか」

マリナはそう言うと拳を構えると、一瞬で翔の元へたどり着きおもいきり殴り地面に叩き付けた。

翔「ガア！」

翔は叩き付けられ地面に減りこみ気を失った。

マリナ「ふう、終わった、終わった」

そう言ってマリナは翔を回収してなのは元へやってきた。

なのは「あ……」

マリナ「分かってるわ。とりあえずコイツを医務室へ運びましょ」

マリナはそう言って歩き出した。

そしてこのあと翔の過去が明かされることになる

第17話（前書き）

お久しぶりです。第17話どうぞ

第17話

（約10年前）

とある研究所に少年がいた。

そして少年はそこで毎日されている事があった。

それは

殺し合いだ。

時には兵器

時には凶暴な動物

時には武装した人間

時には化け物

毎日、毎日殺した。毎日破壊した。一日一回では無い、一日にともなもない数の命を奪っていった。

しかし彼はどうでもよかった。何十人死のうが殺そうが自分の為にならない

じゃあ何故戦うのか

分からない。何で戦ってるんだ。

死にたくないから？それは違うだろう、少年は思った。だって自分はもうこんな命どうでもいいと思ってる、死にたく無いと思ってるのは嘘だ。じゃあ何で？分からない、何でだろう？少年が疑問に思っていた。

疑問に思っていると新しい敵が目の前にいた。とりあえずこいつを潰してから考えよう。そう考え敵を潰すために少年が動き出した。

機動六課の医務室。そのベッドで翔は眠っていた。先程の模擬戦でなのは魔導弾や砲撃を何発も喰い（ただの制服で）倒れてしまった。ちなみに隣のベットにはティアナが寝ている。

それをマリナは見て部屋を出た。別に来た理由もないが一応見に来た方がいいかな〜と思っ来たのだ。

医務室を出るとシエルがいた。シエルはマリナの顔を見ながら言った。

シエル「・・・マリナ、はやて達が呼んでる」

マリナ「そう。じゃあちよこつと顔出しますか」

そう言ってみんながいる方へ向かった。

シエル「で、君はどうするつもりだい？」

マリナ「どうするって言われても、もう言うしかないんじゃない？」

シエル「何故、君はそんなに気楽なんだい？」

シエルはため息をつきながら言った。本当なら怒りたい所なのだが怒ってもどうにもならないのは分かっているからだ

シエル「とゆうか本当に話すのかい？話したら翔はどうなるのかな？」

マリナ「さあ？まあ大丈夫よ」

マリナはそう言い自分の後ろを歩いているシエルの方をふり返り

マリナ「あの子の人生にもそろそろ幸せな事がおきるから」

シエル「・・・笑顔でそんな事言われても翔がそれを・・・」

マリナ「アイツの意見とか考えてる事とかどうでもいいわよ！

この先強制イベントじゃあー！」

そうですね、とシエルがため息をまたついた。そんな会話をしていると六課のメンバーがいる場所に来ていた。

マリナ「こんにちは、機動六課の皆さん。マリナ・アークライトです。よろしく」

マリナが自己紹介をした。

マリナ「で、何か質問でもあるのかしら？」

はやて「はい。高宮翔君の事なんですけど・・・」

マリナ「あの子が最後に使った人間離れした能力は何ですか。とか？」

はやて「・・・はい」

ふーん、と頷きマリナは全員の顔を見た。その後こう言った

マリナ「その事は翔の過去と関係してるの」

フェイト「過去？」

マリナ「そう。でねまずはそれを知ってもらわなきゃいけないの。でもはつきり言ってあの子の過去はとんでもないのよ」

一言じゃあ言い表せないぐらいね、と付け加えた。

マリナ「で、ここにいるみんなはそんな過去を知りたいと思う？あれはまず大抵の人は5分ぐらいで泣き出したりして10分ぐらいで完全ギブアップする。これから私が見せようとしてるものはそんなにやばい物なの。だから別に見たくない人は見なくていい。別に見なくたって誰も責めないしこの世界には知らない方がいいこともたくさんある。引き返すなら今のうちよ」

マリナが言った。が最初から覚悟していたのか全員が聞く意志をみ

せた。

マリナ「そう、じゃあティアナちゃんが起きたら全部話すから・・・

」

スバル「ティアが起きたら・・・ですか」

スバルが少し心配そうに聞いてきた

マリナ「うん。別に今話してもいいけどさ、あの子だけ教ええないのもね・・・あとの事の前に言わなきゃいけない事があるしね」

そう言ってなのはの方を見てウィンクした。

なのは「・・・はい」

はやて「それじゃあ、ティアナが目を覚ましたらまたここに集合することにしてひとまず解散や」

はやてがそう言ってひとまず解散した。

全員がいなくなってからマリナは

マリナ「さて、これからどうなるのかな？」

そついいながら自分も部屋を出た。

翔「・・・ん」

夕方、翔は目を覚ました。

翔「・・・今、何時だよ」

ベットの横にあつたスタックフォンを開き現在の時刻を確認した。

翔「5時36分か・・・結構寝てたな」

翔はため息つきながら言った。自分が何でこんな事になつてるのかは分かつてる。なのはの砲撃を喰らいまくつたのが原因だろう。さて、これからどうするか、と思つてると翔は少し体に違和感を感じた。

翔「・・・?」

最初はなんだろう、と思つていたがこの違和感の正体に目を見開いた。

翔「・・・まじかよ」

そう言つて翔は少し悲しそうな顔をしたが

翔「まあなっちまったものは仕方ないか」

そう言っつて立ち上がろうとした時、部屋に誰かが入ってきた。

翔「・・・来てたのか」

マリナ「うん、色々あってね」

翔「色々って、どうせ俺のアレの事だろ」

マリナ「まあ、そうだけど」

翔「・・・そうか」

翔はそう答え医務室を出ていった。

マリナ「・・・」

マリナはそれをただ見ていることしかしなかった。

マリナ（今更、何も言うこと無いしね）

そう思いながらマリナも医務室をでていった。

夜、前線メンバー全員がヘリポートに集合していた。理由は海上に

ガジェットが出現したとゆうことだ。レリックの反応がない事から目的は不明。隊長陣は普段通りの対応を取ることにしたらしい。

なのは「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長とヴィータ副隊長」

フェイト「フォワード陣のみんなはロビーで待機ね」

ヴィータ「そっちの指揮はシグナムだ。留守任せたぞ」

FW三人「っっはい！」

ティアナ「・・・はい」

他の三人に遅れて返事するティアナ。そんなティアナになのは告げた。

なのは「それからティアナは出動待機から外れておこうか」

ティアナ「っ！」

FW「っっえっ!?!」「っ」

四人はなのはの言葉に耳を疑った。その状況を見て全員よりも後ろにいる翔は隣にいるシエルとマリナに話を掛けた。

翔「シエル、マリナ」

マリナ「はいはい」

シエル「分かってるよ」

翔「・・・ありがとう」

シエル「別に礼はいらないよ」

マリナ「そうそう。アンタのやる事なんて予想つくしね」

そんなやりとりを三人がしている中ティアナ達は

ヴィータ「その方がいいな、そうしとけ」

なのは「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし」

ティアナ「・・・言うこと聞かない奴は・・・使えないって事ですか」

ティアナがそう呟いたそれに対してなのは

なのは「自分で言ってる分からない？当たり前的事だよ、それ」

それを聞いたティアナは

ティアナ「現場での命令や指示は聞いています！教導だって毎日サボらずやっています！それ以外の場所での努力まで教えた通りじゃないとダメなんですか」

と叫ぶ。ヴィータがそんなティアナを黙らせようとするがなのはが手で制する

ティアナ「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないしスバルやエリオみたいに才能も！キャラみたいいなレスキルも！何もないから少しぐらい死ぬ気でやらなきゃ強くなるとなれないじゃないですか」

ティアナが言い終わったのと同時にシグナムがティアナの頬を殴りつけようとしたが

翔がシグナムの拳を受け止めた。

シグナム「高宮、何故止めた」

翔「さすがに殴るのは良くないかな、と思って」

そう言いながら翔は手を離してティアナの方を見た

翔「ティアナ、お前は自分の評価下げすぎだ。お前は自分で思ってるよりも十分強いぜ。だからもうちょい自身持てよ」

なっ、と言つてティアナに話掛けた。続けて翔はこう言った

翔「大丈夫だよ、ティアナは強くなる。ティアナやみんなには大切な仲間がたくさんいるから」

翔はそう言つてへりに向かつて歩き出した。

ヴィータ「おい、何やってんだ」

翔は出撃しないし出勤待機からも外れている。へりにはまったく用がないはずだ。

翔「うん？何って、出撃は俺一人で十分だから一回みんなで話し合ったら？って事だけど」

フェイト「出撃って翔はそんな体なんだし一人じゃ無理だよ」

フェイトは心配そうな顔をした。他のみんなも心配そうな顔していた。

翔「大丈夫。シエルもいる」

フェイト「でも・・・」

そこでマリナが口を開いて言った。

マリナ「・・・行ってらっしゃい」

なのは「!?!」

フェイト「え!?!」

なのはやフェイト、他のみんなも驚いていた。今の状態の翔をいくらシエルと一緒にはいえ行かせるのは危険だろうなのにマリナはそれを認めた

翔「・・・ありがとう」

なのは「で、でも」

なのはが心配そうな表情で翔を見る。翔は

翔「大丈夫だよ。俺にとってこんななんの問題もない。だから・
・みんなは
笑って待ってればそれでいいよ」

そう言っつて翔はシエルと共にへりに乗り込みへりは飛び立った。飛び立っつていったへりを見ながらマリナは

マリナ「さて、それじゃあ翔もないし今がチャンスね。みんな、ロビーに来てくれる、翔の過去、全部話すから」

あとなのはちゃんもね。と言いまリナは去っつていった。

このときまだ翔の過去が想像を絶するものだとはいマリナ以外まだ誰も知らなかつた。

第17話（後書き）

次回は翔の過去です。次回もよろしくお願いします

第18話(前書き)

今回のお話は少しだけ暗くなるお話ですが最後まで見て下さい。

第18話

翔「……はあ」

へりの中で翔はため息を吐いた。

シエル「どうしたんだい？」

翔「……いや、何でもない」

シエル「アレの……自分せいでみんなに迷惑掛けたと思ってるんだろう」

翔「……」

シエル「……まあ、あまり気にしない方がいいよ。アレは君のせいじゃない事故みたいな物なんだから」

翔「ああ……」

翔はそう答えてWドライバーを装着した。あと数分で現場に着くからだ。翔は立ち上がり

翔「行くぜ、シエル」

シエル「ああ」

翔とシエルがヘリで飛び立ったあとなのは自分の過去を話した。自分が関わった事件の事、無茶な行為をしすぎて任務中に撃墜され瀕死の重傷を負った事、そして自分の教導の意味を教えた。ティアナはなのはの意味を知り涙を流しながらなのはに謝り二人の問題は一応解決した。

マリナ「さて、じゃあ次はこっちの話を聞いてもらいますか」

そう言って立ち上がりマリナがみんなの前にでてきた。

マリナ「で、ティアナも聞くの？他のみんなは聞くって言ったけど・・・ハッキリ言ってあまりオススメできるものじゃないから聞かなくてもいいのよ」

と言われたがティアナは

ティアナ「・・・聞きます。どんな内容であろうと私も翔さんの昔の話、知りたいので・・・」

マリナ「・・・そう、じゃあ話します・・・ちなみに結構残酷な表現がでてくる可能性があるので一部表現を柔らかくしています」

そう言ってマリナは画面を出した。画面には翔の写真がたくさん写し出された。

マリナ「高宮翔。第97管理外世界地球の日本出身。0歳から8歳の時まで海鳴市に住んでいて、その時在学していた小学校は私立聖祥大付属小学校。その後小学2年生の2学期の最後、家庭の事業で転校。違う町に引っ越した・・・」

マリナは一度言葉を区切り画面を閉じた。

マリナ「そして、これが悲しい物語の始まり」

約11年前

翔「ここが・・・新しい部屋かあ」

翔は2階の自分の部屋にいた。今、引っ越しの荷物の整理が終わり自分の部屋を見に来たところだ。

翔「それにしても本当に引っ越ししちゃったな」

翔はそんな事を言った。最初は転校して友達と離れるのがいやだったが仕方ない事だと思い親にも文句等何も言わなかった。

翔「さて、とりあえず下に行って・・・」

そう言った途端

ドーン！とゆう爆発音のようなものが聞こえてきた。

翔「何？」

翔はイキナリの事に驚いた。しかも音は自分の家の1階から聞こえてきた

翔「……………」

翔は迷った。下に降りてどうなってるか確認しようか、ここにいようか。

嫌な予感がする。でもここにいても仕方がないと思い翔は階段を下りて一階に行くするとそこには……………

血まみれで倒れている翔の両親がいた。

翔「……………え？」

翔は何が起こってるのか理解ができなかった。

翔「どうゆう事だよ……………」

翔はただ呆然とする事しかできなかった。そこに

????「おや、もつやってきましたんですか」

翔「え!?!」

翔が振り返るとそこには白い怪物のようなものがいた。

翔「化け・・・物」

???「やはりそう見えますか」

そう言ってこっちに少し近づくと怪物

???「それにしても、こんなに速くやってくるとは思ってもいませんでしたよ」

翔は目の前の怪物が何を言ってるのか分からなかった。しかし一言質問した。

翔「お前が・・・父さんと母さんをこんな風にしたのか・・・」

怪物は少し黙って

???「ええ、そうですよ。ちなみにどちら共死んでます」

それを聞いた翔は

翔「テメエエエエエエエ!!」

そう叫びながら怪物に殴りかかった。しかし怪物は翔の拳がとどく前に翔を蹴り飛ばした。

翔「があ・・・」

翔は倒れてそこで意識を失った。

翔「……ん」

翔が目を覚ますとそこは見覚えの無い場所だった。

色々な機械があり、床にはたくさんの配線がむきだしになっていた。

翔「ここは……何処？」

「おや？もう気がついたんですか」

翔「っ!？」

翔が声のした方を見るとそこには30代位の男が立っていた。

「いやあ、こんにちは。運命の子、高宮翔君」

翔「運命の……子？」

「ええ、あなたは我々の希望で世界を変えるすばらしい力を持っている」

翔は目の前の男が何を言ってるのか分からなかった。

自分が世界を変える力を持つてる？そんなわけがない

自分はまだ8歳で子供だ。そんな力何処にもない。親がいないと生きていくこともできない。

「あなたは確かにまだ子供です、権力等何もありません。しかし、あなたが秘めている力は、世界で一番素晴らしいものです」

そして男は自分のポケットからUSBメモリのようなものを出した。

「これはガイアメモリ、まだ数は少ないですが。これは我々に大いなる力を与えるものです」

翔「……」

「しかし、これは誰もが全部のガイアメモリを完全に使えるとゆう訳じゃないんですよ……」

相性とゆうものがあって適合率が低いとどんなに強力なメモリでも力がでないんです。しかし君は違う」

そう言いながら目の前にあった画面にいろんなグラフやデータのようなものをだした。

「しかし、君は違う。通常の間人が適合率が高いメモリが一本、多くて二本のところを君は全ガイアメモリとの相性が90%以上とゆう素晴らしい力を持っている」

男はそんな事を言ったが

翔「……意味分かんねえよ。大体そんなの本当か分からないだろ」

翔がそんな事を言ったが男は

「いえ、もう調べてあるんです。あるルートを使ってあなたの身体をね・・・それにあなたが眠っている時にも調べたので」

そう言いながら男は画面を閉じて

「そしてこれからあなたの力を最大限に引き出す事をしますので」

翔「・・・？」

その瞬間

翔の身体に謎の痛みが走った。

翔「あああああ！」

それから地獄が始まった。

数々のガイアメモリを使つての戦闘。そのたびに調整と言われ謎の薬品を与えられた。

しかも戦闘はいつもドーパントや質量兵器で武装した人間など子供が絶対に相手しないような物と戦った。もちろん翔の身体もただでは済まず日に日にボロボロになっていった。

一回の戦闘で出血するのは当たり前。捻挫、打撲も日常茶飯事。骨折するのもまだ運が言いレベル。ヒドイ時は体の大半の骨が折れたり、刃物で何度も刺されたり大量の銃弾や爆弾を浴びて出血多量で

死にかける時もあった。

そしてある日翔の体にガイアメモリが埋め込まれた。

その名は【バースト】

その名の通り爆発の記憶を宿したメモリだ。

このメモリは容姿の変化はせずただ攻撃力や防御力、瞬発力、持久力等の力を爆発的に増大させるものでこれは翔体内にある1つしかない。翔以外の人間が使えば一瞬で身体が崩壊すると言われている。

そしてそのメモリに耐えられるようにさらに肉体改造を施されメモリの力を使った戦闘を何度もされた

そして実験が始まって2年ぐらい経った頃

翔は・・・

悪魔の様になっていた。

翔「・・・・・・・・」

無言で全て破壊していった。

質量兵器も

ドーパントも

獰猛な獣も

時には人間も容赦なく殺し

原型を留めない程にした事も有った。

そして多分あと数日こんな生活を続けていたら翔の心は崩壊し本当の戦闘マシンになっていただろう。

そこに銀色の砲撃と共に現れたのは

???。「全く、本当に馬鹿げた事してるわよね。アンタらも」

マリナ・アークライト。

最強の魔導師でありながらその存在を隠し知っている者が少ない。管理局の裏エースと呼ばれている。

そしてマリナ・アークライトが実験施設を破壊。幹部は逃走、逮捕したのは研究員のみだった。翔は精神的に危ない状態だったがある程度回復した。

マリナ「……とゆう事があったわけ」

それを聞いて機動六課のみんなはただ呆然とするだけだった。

マリナ「それで翔は管理局員になるんだけど・・・そこから問題なのよ」

フエイト「・・・え？」

全員が耳を疑った。がマリナは続けて言った。

マリナ「翔は管理局員になったけど、そこから問題だったの」

マリナは新しい画面を出しながら言った。

マリナ「翔はそれから普通に任務をしていた。でもそこに何度も組織のドーパントが出現し翔を回収しようとしてきた」

画面には翔が管理局の任務中にドーパントの襲撃を受けてる映像が映った。

マリナ「そこに普通の魔導師達も巻き込まれ重傷を負ったりする人間がでたりする事が何度かあった」

ドーパント自体は翔が自分の能力を使って倒したんだけどね。そう言いながらマリナが見せたのは

何人もの魔導師が倒れていてその中で翔が血だらけになりながらドーパントを殴っている映像だった。

マリナ「そして、翔が管理局に入って2年・・・13の時かな？言ったの」

6年前

マリナ「どうしたの？こんなところに呼び出して」

時空管理局の本局。その一室に翔がいた。

翔「なあ、なんでなんだ？」

マリナ「・・・何が？」

翔「なんで・・・俺の力を狙ってアイツらは来るんだ！？そしてなんで俺の周りの人間を巻き込むんだ！？なんで俺の力の所為で誰かが傷つかなきゃいけないんだ！？」

マリナ「・・・」

翔の言う言葉をマリナは黙って聞いていた。

翔「俺は誰かを救いたかった！こんな力で誰かを守りたかった！俺と同じ思いを他の人にして欲しくなかったから」

涙を流しながら翔は言い続けた。

翔「でも、この力じゃ守るところか、傷つける事しかできない。何
度努力しても何回

頑張っても俺がいる所為でみんなが傷ついていく!」

そして翔は床に倒れ込みながらマリナに言った。

翔「マリナ、お願いがあるんだけど」

マリナ「……何？」

翔「みんなから俺の記憶を無くして」

マリナ「……なんで？」

翔「俺は一人である。俺の周りに誰もいない、みんなに俺の事を忘れて欲しい。俺の事を知ってたらみんなが巻き込まれる。俺に関わったらみんなが傷つく。だから……」

そして翔は全てを失う道を望んだ。

自分がこれ以上傷つかない為に

みんながこれ以上傷つかない為に

もう誰にも関わらず生きていく道を

誰も自分の存在を知らない世界で生きること

第18話（後書き）

本文には載ってませんが翔も実験の影響で一部記憶を失っていました。

第19話(前書き)

いつも以上に無茶苦茶です。おかしい所等がありましたら報告お願いします。

第19話

マリナが翔の過去を話してる頃

【ルナ・メタル】

W（翔）「はああああ！」

Wはメタルシャフトを鞭のようにふり回してガジェットを破壊して
いつてる。

W（翔）「残りは……」

W^{シエル}「あと、3機だね」

W（翔）「そうか」

そう言ってWはもう一度メタルシャフトをふるい3機を一気に破壊
した。

W（翔）「……終わったな」

W^{シエル}「ああ……」

そう言いWは変身を解除しへりに戻った。

そしてマリナが全てを話し終えた数秒後。

その場は沈黙し重い空気が漂っていた。

そこでマリナが思った一言は

マリナ（あゝあ、やっぱりこうゆう空気になっちゃったよ）

マリナは席に座りながらどうしようかと悩んだ。

マリナ（確かにこうゆう空気になるとは思ってたけどさあゝ仕方ないじゃん）

と、その時マリナのズボンから着信音が鳴った。

マリナはすぐにズボンから自分の携帯電話、ビートルフォンを取り出しすぐさま通話ボタンを押した。

マリナ「もしもし、こちらマリナです」

なぜか敬語になっているがここはあえてスルーしよう。

シエル『もしもし、マリナ・・・なんで敬語？』

マリナ「だってこっちの空気重いんだもん」

ヒソヒソと小声で話し掛けるマリナ

マリナ「で、アイツは何処に？」

シエル『そうそう、翔なんだけど・・・バイクでどこかに行っちゃったんだけど』

マリナ「あゝそうなんだ。」

マリナは大体解ったと言つて電話を切つた。

マリナ「さて・・・」

シエル「どうしますか」

背後からシエルが現れた。

マリナ「・・・今そうゆうのいらないんだけど」

シエル「そう・・・」

ふーっとマリナはため息を吐いて

マリナ「で？私の予想なんだけど翔は・・・」

シエル「うん、あそこだろうね」

二人がそんな話しをしてると

はやて「あの・・・翔君、どこかいったんですか？」

代表してなのかはやてが聞いてきた。

マリナ「えっとね、お気に入りの場所・・・かな」

ミッドチルダにある草原、そこに翔はいた。

ここは翔のお気に入りの場所によくここに来る。

翔「全く、予想よりも斜め上の展開になっちゃったな」

翔が星を見ながら言った。ここは夜になるとすごく綺麗な星がみれる場所で翔以外に知ってる人間はシエルやマリナぐらいだろう。

翔「どうするよ・・・これから」

別に何も無かったように戻ってもいいかもしれないでも翔は

翔「アレが出ちゃったし、もうあそこにいるのは気が退けるんだよ」

そんな事を星を見ながらつぶやいていたら

背後に人の気配がした。

翔「ん・・・」

翔がふり返るとそこには高町なのはがいた。

翔「・・・どうしてここが分かったんだ」

翔がなのはに訪ねた。

なのは「マリナさんが教えてくれた」

アノ野郎と呟く翔。

翔「で、何をしにきたんだ？」

翔がなのはに背を向けながら訪ねると

なのは「決まってるよ。迎えにきたの」

そうなのが答えた。マリナは「明日の朝でも迎えに行きますか」

と言ったがなのはが

一人で今行くと言ったのだ。

この時マリナは「マジで？」と思わず言ってしまったがそれは置いて

翔はなのはが言ったその言葉を聞いて少し微笑み

翔「残念だったな、なのは。俺は違う部隊に転属する事になったんだ。だからあそこにはもどらねえ」

もちろんそれは翔の作った話でなのはもそれは分かっている。翔がなぜそんな嘘をつくのかも、だから率直に言った。

なのは「全部教えてもらったよ。翔君の過去」

翔は一瞬驚いた表情をしたが、すぐにさっきの表情に戻り空を見上げた。

翔「そっか、知っちゃったのか」

翔は少しだけ悲しそうな顔をして呟いた。

翔「じゃあ分かっただろ。俺はバケモノで俺の近くにいる人はみんな傷つく・・・最悪死ぬかもしれない」

翔はなのはに静かに言った。なのははそれを黙って聞いていた。

翔「俺はさ、ずっと自分の所為でたくさんの人が傷つくのをみてきた。だから全部捨てた、もう誰も俺の所為で傷ついて欲しくないから」

なのは「そんな事ないよ、翔君の所為なんかじゃない」

翔「確かに全てが俺の所為って訳じゃないだろうな。でも俺がいたからそこにいた人達も巻き込まれた。俺がまったく悪いって訳じゃない」

翔はそう言いながら上を見上げた。

翔「まあ、誰かを傷つけないとか言ってるけど本当は自分が誰かが傷つくのを見たくないから・・・自分が傷つくのが嫌だからかな・・・別に逃げてるのは分かってるさ、ただ何度も何度も続くとさ、もう嫌になってくるんだよ・・・」

ふっつと息を吐きながら翔は呟いた。

翔「だからさ、俺の事はもう気にしないでくれ俺は孤独でいい。それで別に悲しい訳じゃないら・・・」

そう言ったがなのは・・・

なのは「違うよ」

翔「え!？」

なのはが発した言葉に疑問を抱いた翔。そんな翔になのはが

なのは「翔君は孤独が悲しくないとか思ってないよ」

翔「・・・何でそう思うんだ？」

翔が訪ねた。なのははただ真っ直ぐ翔の方を向いて

なのは「だって翔君、すごく寂しそうで悲しそうな顔してるもん」

翔は少し黙った後なのはの方を向いた

翔「確かに、俺は孤独になるのが本当に寂しくないのか?と聞かれると嘘になる。でも俺は別に大丈夫だよ、一人になるのは慣れたるから。俺が一人孤独でいるだけでたくさんの方が救われるなら。俺は悲しくないよ」

しかしなのはは・・・

なのは「違う・・・違うよ。そんなのダメだよ。そんな方法じゃ翔

君が救われないよ！」

なのはが少し強めの口調で言った。

その言葉を聞いて翔は少し微笑んだ。自分に幸せになつて欲しいと思つてる人間がいてくれたそれだけで翔は嬉しかった。でも

翔「救われないかもな・・・でもそれでもいいんだ。俺は人を倒す力・・・殺す力は持つてる、でも人を救う力は持ってない。そんな俺がやっと見つけた誰かを救う方法なんだよ。俺はみんなが幸せならそれでいいだ・・・救われるんだ」

ここであつちに行けばまた同じ事が起きる、それは嫌だ。だから翔は絶対なのはの方に行かないと思つていた

なのは「ダメだって。そんな方法で人を救つても誰も感謝しないよ。翔君はそんな方法じゃなくてもちゃんど人を救えるよ・・・だから」

そう言つとなのはは・・・

翔を抱きしめた

翔「えっ・・・？」

なのは「大丈夫だよ。もう翔君の所為じゃ誰も傷つかないから、そんな方法で救わなくてもいいんだよ」

なのはは、翔を抱きしめながら目を閉じた。

なのは「私がつつと一緒にいる。だからもう一人で全部抱え込まな

くていいんだよ私も一緒に背負うから」

翔「なの・・・は」

なのは「翔君はもう一人じゃないよ。私や六課のみんながどんな事があっても一緒にいる」

それを聞いて翔は涙を流した。

翔「なの・・・」

なのは「何？」

翔「本当にずっと一緒にいてくれる？」

そう聞かれなのは翔を抱きしめている手をはなして翔の前にきた。

なのは「うん、私もみんなもずっと一緒にいるよ！」

翔「・・・ありがとう」

そう言い翔はなのはを抱きしめた。

なのは「・・・／／／」

抱きしめられてる間なのははずっと顔を朱くしていた。

そして数分間そのままの状態でした後、翔はなのはを離し言った。

翔「なの・・・」

なのは「うん？」

翔「俺、なのはの事好きみたい・・・」

なのは「ふえ！？」

なのはは翔の言葉に顔を朱くする。

なのは「え・・・それって・・・」

なのはが何かを言おうとしたがふたたび翔に抱きしめられる。

そして抱きしめた翔はこう言った。

翔「大好きです・・・付き合ってください」

なのははその言葉に

なのは「・・・はい／＼／」

そう答えた。そしてなのはを抱きしめながら翔は思った。

翔（確かに俺は全てを失ったけど、もう一回みんなと、なのはと一緒にやり直して行こう）

そう決意した。そしてこれが本当の高宮翔の物語の始まりでもあった。

第19話（後書き）

マリナ「やっちまったなー」

フォ「やっちまったよーてか久しぶりだねー」

マリナ「しかも結構無理があるよねーあと自分の名前省略すんなー」

フォ「自分の名前書くの面倒だしいいじゃんあとちょっとぐらいの無理は許してよ」

マリナ「まあいいや（ちょっとで済むのかな？）」

フォ「それと次話も今日投稿します」

マリナ「まーじーでー」

フォ「では次回また会いましょう」

マリナ「ここの終わり方、締まりが悪いよね」

第19・5話(前書き)

おまけみたいな話です

第19・5話

数日後

ミッドチルダの町にエビのような怪物とゴキブリの姿をした怪物が現れ町をおそっていた。

「はっはっは！スゴイ力だな。おい！」

エビのような怪物が歯を弾丸のようにして発射し町を破壊しながら言った。

「ああ、この力があれば管理局なんてチヨロいぜ」

ゴキブリの姿をした怪物も町の色々な物を破壊していったがそこに

一台のバイクが現れゴキブリの姿をした怪物をふっ飛ばした。

「グワア！」

ゴキブリの姿をした怪物はふっ飛ばされ叫び声をあげた。バイクに乗っていたのは二人組の青年だった。

「シエル、あのドーパントはなんだ？」

「ああ、翔。あいつらはアノマロカリスとコックローチだ」

二人はそんな会話をしながら怪物達の方を向いた。

アノマロカリス「なんだお前ら、管理局か？」

コックローチ「だったら、容赦しないぜ！」

そう言ってきた、しかし翔達は余裕の表情を見せながら

翔「アレで行くぜシエル！」

シエル「ああ、分かった」

翔・シエル「ユニゾン・イン！」

そう言つてシエルが翔にユニゾンした。そして翔はWドライバーを腰に装着し2つのガイアメモリを取り出した。

右手には緑色の左手には黒色のメモリを持っていた。

【サイクロン】 【ジョーカー】

翔・シエル「『変身』」

翔はドライバーに緑色のサイクロンメモリと黒色のジョーカーメモリを挿入しバツクルを展開した。

【サイクロン・ジョーカー】

そして翔はW、サイクロンジョーカーになった。

W「さあ、お前達の罪を数えろ！」

そう言ってドーパント達に突っ込んでいった。

W（翔）「はあああ！」

Wはまずコックローチに風を纏った蹴りを放った。

コックローチ「ウワァ」

コックローチは避けきれず体勢を崩した。そこにWは拳を打ち込みコックローチを吹き飛ばした。

コックローチ「グワァァ！」

アノマロカリス「貴様！これでも喰らえ！」

アノマロカリスは歯を弾丸ようにしてWに飛ばしてきた。それをWは避け、全弾避けた後Wドライバーの左スロットに入ってるジョーカーメモリを抜いて青色のトリガーメモリを挿入した。

【サイクロン・トリガー】

Wはサイクロントリガーになりトリガーマグナムから風の弾丸を複数発射した。

アノマロカリス「グワァ！」

その弾丸は全て命中しアノマロカリスは後ろに倒れた。

W（翔）「やっぱり威力が上がってるな」

W^{シエル}「まあ、上がってなきゃおかしいけどね」

翔がシエルとユニゾンした状態だとWの攻撃力や能力がアップする。なのでサイクロントリガーの状態でも威力の高い弾丸を発射できる。

コックローチ「ハアアア！」

コックローチが超越したスピードでWに襲ってきたがWはそれを避けすぐに両スロットのメモリを変えた

【ヒート・メタル】

W（翔）「オラアアア！」

コックローチ「ギヤアアア！」

メタルファフトでWはコックローチを地面におもいつきり叩き付けた。

W（翔）「行くぜ」

そしてメタルシャフトにメタルメモリを挿入した。

【メタル！マキシマムドライブ！】

するとメタルシャフトの先端が高熱を纏いその炎の推進力で起きあがったコックローチに叩き込んだ。

W「メタルブランディング！」

コックローチ「ギヤアアア！」

コックローチは叫び声を上げながら爆発し煙が晴れると男と壊れたメモリがあった。

アノマロカリス「ク、クソオオオ！」

アノマロカリスが自棄になって突っ込んできた。対してWはまたメモリを変えた。

【サイクロン・ジョーカー】

そしてマキシマムスロットにジョーカーメモリを挿入した

【ジョーカー！マキシマムドライブ！】

W「ジョーカーエクストリーム」

竜巻が発生しWが浮き上がると正中から分割され両半身が連続して飛び蹴りを放ちアノマロカリスに直撃した。

アノカリス「グワアアア！」

アノマロカリスは飛び蹴りを喰らい爆発した。

W（翔）「終わったな・・・」

そう言って変身を解除しシエルとのユニゾンを解除してバイクに乗った。

翔「それじゃあ帰るか・・・俺達の居場所

第19・5話（後書き）

フォ「一日に二話投稿したね」

マリナ「あのさあ今回最終回？」

フォ「なぜそんな事を聞く!？」

マリナ「いや、打ち切りっぽい終わり方だったから」

フォ「まだまだやるから。やること多いから」

マリナ「私の出番は？」

フォ「ネタが尽きた時」

フォ「ファイア！」

ポオオオン！

フォ「・・・事実を言ったのになんで燃やされるんだ」

マリナ「出番を増やすのを約束するなら砲撃はやめてあげる」

フォ「考えときます」

マリナ「そう。そういえば一つ質問だけど翔とシエルがユニゾンした時って外見なんか変わるの？」

フォ「碧眼になりなす」

マリナ「・・・それだけ？」

フォ「それだけ・・・」

マリナ「手抜き」

フォ「いーじゃん。だって翔バリアジャケット着ないんだから」

マリナ「髪の色とかは？」

フォ「・・・」

マリナ「髪の色とか・・・」

フォ「次回をお楽しみに！」

マリナ「答えるー！」

第20話(前書き)

「オーズ・電王・オールライダーレッツゴー仮面ライダー」本日公開！

翔「だね・・・」

第20話

クラナガンの喫茶店

マリナはそこでとある人物と話していた。相手は男で髪の色はマリナと同じ青髪、服装は黒いスーツだ

マリナ「やつほう、久しぶり！元気だった？」

????「ああ、こちらも忙しかったが元気だった」

男は頼んだコーヒーを一口飲みマリナの質問に答えた。

マリナ「まあ優秀だからよく使われるのよねー誰かに言われない？」

????「ああ、ただ敵にぶっ放す事しかせずデスクワークも部下や後輩に任せる誰かさんとは大違いだと数少ない知人や上司に言われる」

マリナ「あははー誰の事かしら」

笑ってるマリナに心の中でお前だよ、とツツコム男だったがすぐに真面目な顔をして

????「で、今日はどうしたんだ？」

マリナ「いや、ちょっとした事なんだけど。機動六課に行ってきたくれる？」

男は少し考えた顔をしながらマリナに向かって言った。

「???」「別に良いが何故だ？あそこには管理局でもかなり優秀な人物がたくさんいる。それに翔とシエルだっている。それだけいれば十分だろ？」

マリナ「そうなんだけどねー」

「???」「まあ理由は聞かなくてもいいや。どうせ理由は特に無いからおもしろそうだろ」

はあとため息を吐く男。マリナはあははーと笑っている。

「???」「まあ何を言ったって行かされるんだしおとなしく行かせ」

マリナ「さすが、分かってるねー」

「???」「まあ俺は・・・」

マリナ「私の弟だから？リュウヤ」

リュウヤ「・・・ああ」

そう言ってリュウヤは席を立ち上がり

リュウヤ「それじゃあ、明日向かう」

マリナ「はーい、そう言えばアレはどう？」

リュウヤ「別に問題は無いさ」

そう言いリュウヤはズボンのポケットから赤いガイアメモリを取り出した。

マリナ「そんならいいや。いつてらっしやい」

リュウヤは出口に歩き出しそれをマリナは手を振って見送った。そしてリュウヤが店から出た数分後、マリナは重大な事に気がついた。

マリナ「アイツ、自分のコーヒー代払ってねー」

机の上にはコーヒーのカップと伝票が置いてあった。

その日の夜

翔「……ん」

翔がベットで寝てる時、違和感を感じ起きてしまった

翔「なんだ……？」

翔が半分寝た状態で布団の中を見る。そこには……

翔「なの……は？」

パジャマ姿のなのがいた。翔は驚きのあまり目が完全に覚めてしまった。

翔（初めてじゃないけど……慣れないなコレ）

なのはが翔のベットにもぐりこんでくる事は何度かあった。女子寮からどうやって来てんだ？と疑問に思う翔だが考える事に諦めてる。翔は布団をかけ直してなのはの頭を撫でた。

翔「つたく、可愛い奴だな・・・」

翌日

シエル「昨日は大変だったらしいね？」

翔「ああ、まあな・・・」

翔は通路を歩きながらシエルと話していた。

翔「それでシエル、スカリエッティの情報は？」

シエル「閲覧できる情報は全部見たよ。でも鍵が掛かってるものもあってあまり良い情報は得られなかった」

翔「・・・そうか」

そう言っ後無言になる二人だったがシエルが何かを思いだしたように翔に話し掛けた。

シエル「そう言えば翔」

翔「ん？」

シエル「今日はなんか休みらしいね」

翔「ああ、そう言った」

シエル「なのはを連れて何処かに行けば？」

翔「ウエイ!？」

どんな声挙げてんだよ。と思ったシエルだった。

食堂に着いて食事をしてる翔とシエルの所になのはがきた。

なのは「翔君、隣いい？」

翔「ああ、いいぜ」

なのは「それじゃあ、失礼しまーす」

そう言って翔の右隣に座るなのは。左隣に座っていたシエルはどこかに消えていた。

翔（ア、アノヤロウ）

まあ別に良いけどとシエルが消えたのにあまり気にせず食事の続きをしようとしたが…

翔「あの、なのはさん。食べづらいので少し離れてくれませんか」

なのはが凄く密着してきたのだった。

なのは「ええ〜じゃあ、ハイ」

そう言ってなのはが翔の茶碗のご飯を箸で取り翔の口元に持ってきた。

翔「あの、その・・・これは・・・」

翔はいきなりこんな恥ずかしい事になってどうすればいいか分からなくなっていた。

なのは「はい、あ〜ん／＼／」

翔「あ、あ〜ん／＼／」

とりあえず翔は恥ずかしいけど素直に食べた。

なのは「どう？おいしい」

翔「あ、ああ。美味しい」

そんなやりとりをしてると・・・

ヴィータ「・・・何やってんだ、お前ら」

ヴィータが現れたので翔となのはのお恥ずかしいやり取りは強制終了したのだった。

翔「さてと、俺もどこかに行くかな・・・」

なのは「翔君、何処かに行くの？」

翔「ああ、なのはも来るか？」

なのは「ふえ!？」

いきなり誘われてビックリしたのか声をあげるなのは。

なのは「え、一緒に行っても・・・いいの？」

翔「いいぜ、じゃあ一時間後ぐらいに隊舎の前に集合でいいか？」

なのは「うん」

んで1時間後

翔「早いなオイ。省略すんな」

そんな文句を言ってる翔は今隊舎の前でなのはを待っていた。翔の前にはハードボイル

ダーがある。

翔「さて、なのはが来るまで簡単に点検しとくか」

そう言いながらハードボイルダーを点検していると

なのは「ごめん、遅くなっちゃった!」

なのはが慌てて走ってきた。

翔「ああ、そんなに待ってないから大丈夫だぜ」

そう言っつてハードボイルダーにまたがって

翔「それじゃあ、出発するから後ろ乗れよ」

なのは「う、うん」

翔「どうした?」

なのは「いや、ちょっと恥ずかしくてノノノ」

そう言っつて顔を少し紅くした。

翔「……こっちまで恥ずかしくなってくるから早く乗って欲しいんだけど」

なのは「うん、分かった」

そう言っつて翔の後ろに跨るなのは

翔「それじゃあ行くか」

なのは「うん」

翔はハードボイルダーのスロットルを捻り発進していった。

シエル「やっと行ったか」

翔となのはのやり取りを陰で見ていたシエルはそう呟いた。

シエル「あとをつけるのもおもしろそうだけど翔にバレると後が怖いからな」

そう言い隊舎に戻ろうとしたとき・・・

鳴き声のようなものが聞こえてきた。

シエル「うん？」

シエルは鳴き声のした方へ行くと

機械の恐竜がいた。それを見てシエルは少し驚いた表情をしていたが笑みを浮かべた

シエル「久しぶりだね・・・“ファング”」

クラナガンにいるリュウヤはマリナからもらった機動六課までの地図を見て唾然としていた。なぜならそれは

リュウヤ「・・・読めない」

地図はマリナの手書きでしかかなりアバウト、意味が分からないものだった。

リュウヤ「・・・どうするか」

リュウヤはただちやんとつけるか不安になった。

第20話（後書き）

そろそろいっぱい出てくるけど頑張ります

第21話(前書き)

フォ「仮面ライダー1000回おめでとう！」

翔「前回同様のテンションですみません」

フォ「第21話どうぞー！」

翔「・・・はあ」

第21話

ハードボイルダーでクラナガンに来た翔となのはの二人は服屋に来ていた。

理由はここに来る前の会話で・・・

なのは「翔君はどこか行きたい所ある？」

翔は少し悩んで答えた。

翔「うん、行きたいところは・・・服屋かな」

なのは「服屋？」

翔「ああ、俺持ってる私服これだけだし」

翔は持つてる服が少ない、制服とスーツと私服があるぐらいである。
ハッキリ言っって少ない

翔「もーちよい欲しいかなっと思って」

なのは「それじゃあ行こう」

翔「ああ」

そんな感じで現在に至る

翔「どれが良いかね」

なのは「うん、コレとか似合うと思うよ」

翔「んじゃこれ買うか。なのは何か欲しいのがあるか？」

なのは「え〜っと、じゃあコレにしようかな」

そう言つて服を手に持つなのは。

翔「それじゃあそれも一緒に買うから」

なのは「え、でも・・・」

翔「いいから、ほら」

そう言いなのはの持つてる服を少し強引に取りレジに持っていく翔。翔はそんなに金を使わない。使うとしたら自分の趣味ぐらいだろう、しかも月に何十万と使う訳でもないので貯金は結構ある。

会計が終わりなのはの所へ戻りなのはの服が入ってるほうの袋を差し出す。

翔「ほい」

なのは「あ、ありがとう」

翔「気にすんな」

そう言いながらなのはの頭を撫でる翔

なのは「・・・／／／」

翔「それじゃあ行くか」

なのは「あ、うん」

翔とまだちょっと顔の紅いなのはは次の店に向かった。

翔「……いっぱい買ったな」

なのは「うん、そうだね」

そんな会話をしながら歩く二人。

翔「……にしても、こんな風にしてんのも久しぶりだな」

なのは「そうなんだ……」

翔「ああ、いつつも誰にも会わないような所にいたから、こうやって誰かと一緒に町を歩くのもかなり久しぶりだ」

そう言った途端なのはが翔の腕を組んで体を密着させてきた。

翔「な、なのは！？／＼／＼」

なのは「……こうやって過ごすの久しぶりならいっぱい楽しもうね」

翔「・・・だな」

そう言っただけで歩いてるとなのはデバイスは通信を捉えた

翔「通信か？」

なのは「そうみたい」

そう言いつつ通信を開くと

キャロ「こちらライトニング4。緊急事態につき現場状況を報告します。サードアベ

ニューF-23の路地裏にてリックと思わしきケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人」

キャロ慌てずに的確に報告していく。キャロの横でエリオが

エリオ「女の子は意識不明です。」

と少女の状態を報告する。

キャロ「指示をお願いします」

通信を聞いていたなのはが指示を出す。

なのは「スバル、ティアナ。ごめん、お休みは一旦中断」

スバル「はい」

ティアナ『大丈夫です』

2人が返事した後、なのはが翔の方を振り向き

なのは「じゃあ翔君」

翔「ああ、行くか」

そう言い2人は報告のあった場所へ向かった。

翔となのはが現場に来るとフォワードの四人とヘリが既に到着していた。

なのは「みんな！」

翔「保護した子は？」

翔がシャマルに訪ねると

シエル「別に問題はないらしいよ」

何故かシエルがそう答えた。

翔「…………お前来たのか」

シエル「もしもの為にね」

シエルがそう言うと恐竜の鳴き声のようなものが聞こえてきた。

なのは「今の鳴き声って何？」

なのはがいきなり恐竜の鳴き声が聞こえてきたので疑問に思った。

翔「まさか・・・」

シエル「ああ、コイツだ」

そうやってシエルの手の平に機械の恐竜がのった。

ファング「クアー！」

シエル「コイツはファングメモリ。ダブル第7のメモリだ」

スバル「それ、ガイアメモリだったんですか!？」

スバルはファングがガイアメモリだというのに驚いていた。

シエル「ああ、このメモリは自由に活動できるライブモードとメモリ状態のメモリモードの2つがある珍しいガイアメモリなんだ」

それを聞き納得してる翔とシエル以外の人達。

翔「まあファングの事はこれぐらいにして・・・とりあえずこの子
を運ぶか、シエル!」

翔はシエルを呼んだ。シエルは少し不満そうな顔で

シエル「君が運べばいいだろ」

翔「いや、お前もへり乗るんだからいいだろ」

そう言われシエルはしぶしぶ女の子をへりに運んでいった。（後ろからファンゲもついていった）

翔「んじゃあ確認するけど、フォワードの四人は地下水路でレリック探索。俺や隊長達が空のガジェット殲滅だな」

フェイト「うん」

なのは「それじゃあみんな。ちょっとだけ厳しい戦いになるかもしれないけど、頑張っていこう！」

フォワード「……はい！」「……」

翔「それじゃあいきますか」

翔はWドライバーを装着しジョーカーメモリを取り出した。

【ジョーカー】

その頃へりのシエルもサイクロンメモリを取り出した。

【サイクロン】

翔・シエル「『変身！』」

まずシエルがメモリを入れ精神と共にメモリを転送した。そしてシエルが転送したメモリを翔がドライバーの右スロットに挿入し翔も自身のジョーカーメモリを挿入しバツクルを展開した。

【サイクロン・ジョーカー】

そして翔とシエルはWサイクロンジョーカーになった。

W（翔）「さあ、行くぜ！」

こうして戦いが始まった。

第21話(後書き)

フォ「タマシー！」

翔「だまれ！」

バキ！

フォ「ゲフウ」

翔「全く、何でこんなテンション高いんだ」

フォ「楽しい事、嬉しい事がいっぱいあったからかな」

翔「・・・もうすぐ学校始まるな」

フォ「・・・」

翔「・・・おい」

フォ「DOG DAYS!!」

翔「いきなり何を言ってんだー!?!」

フォ「次回もお楽しみにしてください」

翔(こいつどんな締め方してんだよ)

第22話(前書き)

第22話です。

ついにアレが登場します。

第22話

ガジェットを掃討するためになのはとフェイト、そしてWは海上で戦闘をしてるが・・・

W（翔）「幻影と実機の混成編隊・・・か」

W ヒートトリガーはそう眩きながらハードタービュラーの上からトリガーマグナムで

一機ずつ破壊していった。

なのはとフェイトは全方位のシールドを使い背中合わせになってガジェットの攻撃を防いでいる。Wが入ってないがハードターピュラーのビーム砲「エナジーバルカン」と振動刃「スクランブルカッター」で周囲のガジェットを攻撃される前に破壊してるが・・・

W（翔）「キリがない」

W^{シエル}「ああ、こんな事をするとう事は地下かへりの方に主力が向かってるだろうね」

シエルがそう推測した。

W（翔）「・・・幻術使ってる奴を見つけれれば状況は変わるかもしれないけど・・・」

W^{シエル}「無理だろうね。そこまで回す手が無い」

二人がそんな会話をしているとなのはとフェイトの会話が聞こえてきた

フェイト「なのは。私が残ってここを押さえるから、ヴィータと一緒に……」

なのは「フェイトちゃん!？」

フェイトの突然の提案になのはは驚いた。

フェイト「コンビでも普通に空戦してたんじゃ時間がかかり過ぎる」

と言ってる間にもガジェットの攻撃がシールドにあたる……ちなみそれを遠くで聞いていたWの二人はいないと思われると思えば少し悲しくなった。そんな二人の思いを知らないフェイトは話を続けた。

フェイト「限定解除すれば広域殲滅で纏めて落とせる」

なのは「それは、そうだけど」

なのははこの空域をフェイト達だけに任せるのはまだ抵抗があるらしい。

フェイト「なんだか嫌な予感がするんだ」

なのは「でも、フェイトちゃん……」

W（翔）「おいおい、二人で勝手に話しを進めんなよ」

なのはが何か言おうとした瞬間Wがシールドの近くにハードタービュラーに乗ってやってきた。

W（翔）「二人共へりの方へ行つてくれ。ここは俺とシエルで押さえる」

W^{シエル}『ああ、任せたまえ』

なのは・フェイト「え！？」

二人はWの言つた事に驚いた。

W（翔）「心配すんな。俺達はこんな事でやられるほど弱く無い。だろ、シエル」

W^{シエル}『ああ、もちろんだ』

二人は少し考えた後Wの方を向き

なのは「じゃあ翔君、シエル君」

フェイト「任せて・・・いいかな」

W（翔）「ああ！」

その返事を聞きなのはとフェイトはへりの方へ向かつたといった。

W（翔）「・・・さて」

二人が離れていくのを確認しWはガジェットの方を向いた。それと同時にはやてが通信を繋いできた。

はやて『翔君、シエル君』

W（翔）「何だ？これから空のお掃除を始めるんだが」

はやて『うん、でもこの数本当に一人で大丈夫なんか？』

はやてが少し心配そうに聞いてきた。

W（翔）「大丈夫だって。幻術に対抗する力がこつちには幾つかある。それを使って一気に殲滅する」

はやて『分かった。だけど無茶だけはせんといっていてな』

W（翔）「了解！」

そう言い通信を切った。

W（翔）「んじゃあお掃除開始だ」

Wはオレンジ色のゴーグルを取り出した。

デندنセンサー。光の波長や変動をキャッチできるメモリガジェットでこれを使い本物のガジェットがどれかを見抜く事が出来る。

【デندن】

デندنセンサーにギジメモリを挿入するとカタツムリ型のライブモードに変形した。それをハードタービュラーの上に乗せると、触觉部分からセンサーを発し幻影と実機の区別がつくようになった。

W（翔）「よし、成功！」

W^{シエル}「じゃあ決めようか」

Wはヒートメモリを抜きサイクロンメモリを挿入した。

【サイクロン・トリガー】

更にバットショットをトリガーマグナムに装着しトリガーマemoryを挿入する。

【トリガー！マキシマムドライブ！】

W「トリガーバットシューティング！」

バットショットをスコープにし標準を絞り実機のカジエツトだけを正確に高威力の風の弾丸で次々破壊していった。

W「はあー！ー！」

そして全ガジェットを破壊した。

そのころあるビルの屋上、そこに眼鏡をかけた女クアットロと包帯に包まれた何かを持つてる女、ディエチがいた。

クアットロ「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

デイエチ「ああ、遮蔽物も無いし空気も澄んでる……良く見える」

二人はへりの方を見て言った。

デイエチ「でもいいのかクアットロ。撃っちゃって、ケースは残せるだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

クアットロ「ウッフ ドクターとウーノお姉様曰くあのマテリアルが当たりなら……『聖王』の器なら砲撃ぐらいでは死なないから大丈夫だそうよ」

クアットロがそう言うがデイエチは興味が無いらしく無言で持っている物の包帯を取っていく包帯で包まれたものの正体はライフルの様なものだった。

そしてそれをへりに向けるとエネルギーをチャージし始めた。

W（翔）「終わったな」

W^{シエル}「ああ……ん？」

W（翔）「どうした、シエル？」

W^{シエル}『どうやら、敵がへりに攻撃するらしい』

W（翔）「何！？なのは達は」

W^{シエル}『いや、間に合わない』

どうするか、Wは少しの間悩んだ。今から自分が行っても間に合わないしなのは達が無理なら誰かに頼むのだが他に動ける奴もいない。

W（翔）「あゝどうすればー！」

そう言いながら頭を抱えてると。

W^{シエル}『翔、良い案がある』

W（翔）「何！」

W^{シエル}『僕を使え』

翔はどうゆう事なのか少し考えた。

W（翔）「……………あ！そうゆう事が」

・
・
Wは変身を解除し翔に戻りシエルが考えた案を実行しようとしたが・

翔「あれ、シエル。ここでそれを実行すると俺の体ってどうなるんだ？」

シエル（もちろん、空中でハードタービュラーの上に乗って事件が解決するまで……）

翔「おい、俺大丈夫なのかよ。これから魂だけの生活とか絶対嫌だぞ！」

シエル（問題は無い。もうガジェットは来ないし、すぐに終わらせる。あと、肉体が無くなったら死ぬと思う）

翔「今そんな事言うな！」

そして翔は空の上で意識を失った。

翔が意識を失う数分前、シエルは起きあがりヴァイスにハッチを開けるように言った。

シエル「さて、行くつか」

シャマル「待ってシエル君、何をするの？」

シャマルが尋ねてきたのでシエルは正直に答えた。ちなみに今頭の中では翔と会話をしている

シエル「敵がこのへりを狙っているらしいので止めてきます」

シャマル「できるの？」

シエル「はい、僕はできない事は言いませんよ・・・来い、ファング！」

シエルが叫ぶとファングがシエルの手にのった。シエルはファングをライブモードからメモリモードに変形させた。

【ファング】

シエル「変身！」

シエルはファングメモリを挿入しバツクルを展開した。

【ファング・ジョーカー】

そしてシエルは右半身が白、左半身が黒の戦士に姿を変えた。

シャマル「シエル・・・君？」

シャマル達は驚いた表情をしていた。まさかシエルが変身するとは予想もしてなかったからだ

W^{シエル}「はい、では行つてきます」

W（翔）『……………』（泣）『

Wはハッチを飛び出していった。翔が泣いてる気がしたがシエルは

翔の状態について触れない事にした。

ビルの屋上でデイエチはエネルギーをチャージして

デイエチ「IS『ヘビーバレル』・・・発射」

強力な砲撃を発射した。

その瞬間、全員が直撃すると思っていたが・・・

W（翔）『そう簡単にやらせるかよー！』

【ファンゲ！マキシマムドライブ！】

聞いたことある青年の声と機械音が響き

W『ファンゲストライザーー！』

その叫び声と共に砲撃がへりに当たる直前に消し飛んだ。

デイエチ「え？」

クアットロ「嘘お！？」

ディエチとクアットロは信じられないとゆう顔をしていた、あそこ
でヘリを守る人間はいない。一番近いのはとフェイトもヘリに
は着いてはいなかった。

じゃあ誰が？答えは目の前・・・ヘリの前に立っていた。

右半身が白、左半身が黒。Wフアングジョーカーが立っていた。

そして一言こう言った。

W^{シエル}「さあ反撃開始だ」

第22話（後書き）

翔「・・・なあ」

フォ「うん？」

翔「デンドンセンサーって使い方あれでいいの」

フォ「細かい事は気にすんな」

翔「細かい事じゃねえだろ」

フォ「ああ、あと主人公さん。次回壊れる予定だから」

翔「はい？」

フォ「では次回、アイツ登場！」

翔「何で壊れるんだ、オイ！」

第23話(前書き)

学校が始まりました。

更新速度が遅くなります。確実に

第23話

W ファンゲジョーカーはへりを砲撃から守り、今は砲撃を放った人物ダイエチとクアットロの方へ向かっていた。

W（翔） 「オラアアア！いくぜ！」

W はタクティカルホーンを二回弾いた。

【シヨルダーファンゲ】

その音声と共に肩にシヨルダーセイバーが出現しそれを手に持ちブーメランの用に二人に向かって投げた。

W 「はあああ！」

シヨルダーセイバーが二人に向かって飛んでいくが二人はそれを避ける。

W（翔） 「避けんじゃねえええ！この野郎おお！」

翔が変なテンションになってるがシエルは無視して二人を追っていき途中でなのはとフェイトも到着しダイエチとクアットロを追っていく。

W はタクティカルホーンを一回弾いた。

【アームファンゲ】

すると右上腕にアームセイバーに出現しWはそれを構えて二人を追跡していった。

フェイト「止まりなさい。市街地での危険魔法使用及び殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

クアットロ「今日は遠慮しときます〜」

W（翔）『じゃあくたばれこの野郎！』

そう言いながらフェイト以上の速さで追っていくW。フェイトはWが自分より速く飛んでいるのになのは翔の言動にビックリしていた。クアットロはIS『シルバーカーテン』を発動して姿を消した。

フェイト「はやて『そんなもん通用するか！』・・・え？」

フェイトがはやての名前を叫ぼうとしたとき翔の声で遮られた。Wはバットショットにルナメモリを挿入した。

【ルナ！マキシマムドライブ！】

そしてバットショットが発光した。すると消えたはずのディエチとクアットロが現れた。

ディエチ「あれ？」

クアットロ「嘘！？どうゆう事？」

二人は驚いている所にアームセイバーを構えたWが突撃してきた。

W（翔） 『喰らえやこんにやるおおお！』

Wはアームセイバーを振るって二人に攻撃を繰り返すがギリギリのところまで避けられてしまう

W（翔） 『あー！なんで当たらないんだ！』

シエル
W「しょうがないよ、僕達は飛ぶの苦手なんだから。この速度で飛んでるのが奇跡みたいなものだからね」

W（翔） 『だったら気合いと根性でどうにかするぞ！』

シエル
W「そんなキャラだったけ！？」

シエルがそうツッコミを入れてるとなのはとフェイトがデイイチとクアットロにデバイスを向けて砲撃の準備をしている。

シエル
W「これでチエックメイトだね」

W（翔） 『何言ってるシエル。こっちもトリガーでぶっ飛ばすぞ』

シエル
W「・・・もう今の君とは喋らない」

フアングジョーカーは普通のWと違う為メモリの交換ができない。それは翔も十分知ってるはずなのだが・・・何故あんな発言をしたかは不明だ。そんな会話をしてると

フェイト「トライデントスマッシュャー！」

なのは「エクセリオンバスター！」

二人は砲撃を放ちデイエチとクアット口に直撃した。

W「^{シエル}当たった？」

W（翔）『粉碎成功！・・・とても言うと思ったか！！』

Wは左手で自分の顔を殴った

W（翔）『見て分からのか君は！明らかに直前で逃げられたでしょ！ボケエ！』

W「^{シエル}・・・」

Wはファングメモリを抜いて変身を解除した。今の翔の精神状態は一緒にいる方がつらい。

シエルがため息吐いてるとなのはとフェイトがやってきた。

なのは「あれ？なんでシエル君が」

なのはとフェイトは翔のからだをベースに変身したと思ってるのでシエルがいるのに驚いている。

シエル「ファングジョーカーは僕の体をベースにして変身するWで総合的身体能力はWの中で一番強い。だけどメモリが変えられないのとWドライバーを持つてるのが翔だから変身するにはいちいち連絡を取らないといけないんだ」

それを聞いて納得する二人。そしてシエルが説明を終えると同時に電話が鳴った。電話の相手は今、一番話したくない人だったが一応

電話にでた。

シエル「もしもし翔。どうしたんだい？」

そう尋ねると

翔「シ〜エ〜ル〜大変だよ〜」

声が翔なのだがいつもと口調が変だった。

シエル「で、何だい？」

翔「うん。あのね〜ドーパントが出たんだよ〜」

シエル「本当かい！？じゃあ今すぐ現場に」

シエルがそう言ったあと翔から帰ってきた言葉は

翔「う〜ん。でも〜僕、眠くなってきた〜」

はあ！？とシエルが声を上げると電話が切れてしまった。どうやら本当に眠ってしまったらしい。シエルはなのはとフェイトの方を見て

シエル「あの〜翔を起こして現場に向かわせるのを手伝ってください
い」

二人にそう頭を下げた。

一方地上のヴィータとリイン、FW達

今の状況は地下水路でドンパチして敵捕まえたと思っただら逃げられてリックのケース奪われたと思っただら本体はキャロの帽子の中でした。って感じである。
そしてそこに

???「管理局の人間・・・倒す！」

そう言って近づいて来る白い怪物がいた。

スバル「あれってドーパント？」

ギンガ「スバル！あれ知ってるの!？」

スバルの姉、ギンガがスバルに尋ねた。

スバル「一応ね」

スバルもマリナの話で聞いた事があるだけで本物を見るのは初めてである

ティアナ「どうします？ヴィータ副隊長」

ティアナがヴィータにドーパントをどうするか尋ねる

ヴィータ「本当だったら翔が来るまで待ちてえんだがアイツが来るまで時間が掛かるし・・・アタシ達でやるしかねえな」

その言葉に全員が頷き戦闘体勢になる。そこに

「まさか、こんな所でドーパントと遭遇するとわな」

後ろから青髪の青年が現れた。

ギンガ「あなたは？」

ギンガが青年に尋ねると青年は

「話しはあとだ。アイツは俺が倒す」

その言葉に全員驚いた。相手は魔導師でも対処するのが難しい相手だ。

ヴィータ「ふざけんな！お前一人で何ができるんだ！」

ヴィータが青年にむかって言ったが青年は余裕そうな表情でバイクのロットの様なものを取り出し腰に装着した。

「大丈夫だ。俺はアイツを倒すのが専門みたいなものだからな」

そう言って青年は「A」と書いてある赤いガイアメモリを取り出した。

【アクセル】

キャロ「あれって!」

エリオ「ガイアメモリ!？」

青年が取り出した物を見て驚く一同。一人ギンガだけがガイアメモリの事を知らず困惑していた。

「変…身!」

青年はバイクのスロットルの様な物・・・アクセルドライバーの上部中央のスロットにメモリを挿入した。

【アクセル】

そしてパワースロットルを捻ると青年の姿が変わった。赤を基調とした姿で頭部に鋭利な形状となった「A」の文字が見られシールドの奥に青い円状の複眼が見える。

アクセル。それが青年、リュウヤ・アークライトが変身した姿だった。

アクセル「さあ、振り切るぜ!」

そしてアクセルとドーパントの戦いが始まった。

アクセル「はあああ！」

アクセルはデバイスを改造した武器エンジンブレードでドーパントに斬りかかった。

しかし・・・

「フツ！」

エンジンブレードがドーパントに触れた瞬間エンジンブレードが氷結した。

アクセル「何!?!」

アクセルはエンジンブレードが凍ったのに驚き一度離れた。

アクセル「お前、氷・・・氷結系のドーパントか」

アクセルがドーパントに向かって言った。

アイスエイジ「そう、私のメモリはアイスエイジ。絶対零度の冷気を放出させ全てを凍らす事が出来る」

アイスエイジ・ドーパントはそう言った。つまりこのドーパントにはどんな武器も攻撃も凍らせてしまう能力があるとゆう事だ。

アイスエイジ「分かったか、お前らでは私を倒せない」

しかしアクセルは

アクセル「ふん、たかが凍らせるだけで俺を倒せると思うなよ」

そう言っただけでエンジンブレードを構えた。それを見てアイスエイジはアイスエイジ「お前は馬鹿だね。何故勝てないと分かっている敵に立ち向かうの？」

アクセルを見てそう言った。そしたらアクセルが

アクセル「お前は一つ勘違いをしている。俺は勝てないと分かっている立ち向かってんじゃない」

そう言うとアクセルが全身から高熱を放熱し

エンジンブレードの氷が溶けた。

アイスエイジ「何!？」

アイスエイジは驚いていた。まさか自分の氷が簡単に溶かされるなんて思ってもいなかったからだ。そしてアクセルはアイスエイジに向かって

アクセル「勝てるかと分かっている立ち向かっているんだ」

そう言いながらエンジンブレードを構えて走っていきアイスエイジを切り裂いた。

アイスエイジ「グワァ！」

アイスエイジは切り裂かれて後ろに下がる。アイスエイジの冷気が

効かないのはアクセルが強力な熱を放ってるからだろう。

アクセル「はあああ！」

アクセルはメモリの力による超加速で切り裂いていく。アイスエイジは手も足もでない状況だ。

アイスエイジ「くそ、何故だ!？」

アクセル「メモリの適合率と・・・経験だ」

そう言いエンジンブレードを思いつ切り振りアイスエイジを吹っ飛ばした。

アイスエイジ「グア！」

アクセル「それじゃあ終わりにするか」

アクセルは左クラッチを引きその後パワースロットルを捻った。

【アクセル！マキシマムドライブ！】

アクセル「ハアアア！」

アクセルの青い円状の複眼が発光すると同時に炎を纏いアイスエイジに後ろ跳び回し蹴りを叩き込んだ。

アイスエイジ「ギャアアアア！」

アクセル「・・・絶望がお前のゴールだ」

そしてアイスエイジは爆発した。煙が晴れると倒れてる人と壊れたメモリがあった。
アクセルが変身を解除しエンジンブレードを待機状態に戻すとリュウヤはヴィータ達の方を向き。

リュウヤ「あの、機動六課ってどっちですか？」

一方、主人公

翔「zzzz」

なのは「……翔君」

フェイト「ねえ、シエル」

シエル「……何だい？」

フェイト「何で翔はこの状況で寝てられるんだろう？」

シエル「僕が聞きたい」

翔は本当に空の上で寝ていた。しかも爆睡している。

シエル「仕方ない、僕がこれに乗ってくから二人は翔を頼む」

ちなみに爆睡した翔が起きたのは午後7時半頃だった。

第23話(後書き)

フォ「もうすぐヴィヴィオがでます。しゃべります!」

マリナ「みんな知ってるわ!」

フォ「それにしても主人公壊れたな」

マリナ「壊れたとゆうよりボケた気が」

フォ「どっちでもいいや」眠いから

マリナ「え?」

フォ「zzzz」

マリナ「・・・次回も見て下さい」

第24話(前書き)

あまり意味がない話だと思つのですが見て下さい。

第24話

機動六課部隊長室

今、ここに部隊長のはやてと隊長の二人とリイン。シエルとリュウヤがいる。

シエル「それにしても、まさか君を呼ぶなんてね」

リュウヤ「ああ、俺も何故呼ばれたのかよく分からないが」

リュウヤはため息を吐いた。自分の姉だがマリナの考えてる事がリュウヤはまったく分からない。

シエル「まあ、どうでもいいか」

リュウヤ「考えるだけ無駄だ」

二人が会話していると

はやて「あの〜盛り上がってる所悪いんやけどええか？」

リュウヤ「ああ、すまん。で、俺に聞きたい事とは？」

リュウヤが部隊長室にいる理由は隊長達へ挨拶ともう一つ

はやて「何でリュウヤ君もガイアメモリを持ってるんや？」

その質問にリュウヤは

リュウヤ「ああ、俺のガイアメモリは姉さんが強奪したらしい。それで俺にこれを使えって無理矢理渡してきた」

その言葉に一度納得した四人。確かにマリナならやりそうだそう思ったからだ。

リン「でも、一番驚いたのはリュウヤさんがマリナさんの弟だって事です」

はやて「そうやな、それ聞いた時が一番ビックリしたわ」

はやてはリンの言葉に頷いた。自己紹介の時リュウヤがマリナの弟だと言ったときシエル以外の全員が声をあげて驚いていた。

リュウヤ「まあ、あの人を知ってる人は俺が弟だと言うとみんな驚くからな」

シエル「それはそうさ。あんな無茶苦茶な人の弟がこんな普通なんだから誰だって驚く」

その言葉に全員が苦笑した。確かに誰もリュウヤがマリナの弟だと思わないだろう。

リュウヤ「それじゃあそろそろ部屋に案内して欲しいんだが」

はやて「そうやな、リン。リュウヤ君を部屋まで案内してな」

リン「はいです」

そしてリンとリュウヤは部隊長室を出ていった。

シエル「それじゃあ僕も行くかな」

そう言っつてシエルも部屋を出ようとした。

フェイト「え？何処かに行くの？」

そうフェイトに尋ねられたシエルはフェイトの方を振り向き

シエル「ああ、相棒の状態を見にね」

翔「zzzz」

翔は帰ってきててもずっと寝ていて全く起きる気配がない。そこにシエルとなのはが入ってくる。

シエル「翔、やっぱり起きてないか」

翔「zzzz」

なのは「にゃはは〜この調子だと当分起きないかもね」

シエル「だね」

なのはの言葉に納得するシエル。そこでシエルは何かを思い出した様になのはの方を見た。

シエル「なのは、悪いがちょっとリュウヤと話をしてくる」

なのは「うん、分かった」

そう言ってシエルは部屋を出た。

なのは「で、どうしよう」

なのはは寝てる翔を見て言った。なのはから見て翔の寝顔はすごく可愛く見えるらしくこのままにしておきたいのだがそれだとマズイ事もあるだろうし起こすことにした。

なのは「翔君。起きて〜」

翔「zzzz〜」

なのはが翔を揺すって起こそうとするが翔は起きない。

なのは「う〜ん、どうしよう」

そう思っていると

翔「う〜ん」

翔は寝ぼけてなのはの服の裾を掴んだ。

翔「zzzz」

それを見てなのはは微笑んで

なのは「少しぐらい・・・いいかな」

そう言ったが翔が起きる午後7時までそのまま状態だったのはであつた。

リュウヤの部屋

リュウヤ「シエル、予想なんだが。ファングが出てきたのって」

シエル「君の予想通りだと思う。ファングが僕のピンチでもなく、呼んでないのに現れるって事は近い将来何か起きるかもね・・・勘だけど」

シエルはため息吐いて言った。

シエル「まあ、勘とか予想で済めばいいんだけど」

リュウヤ「未来がどうなるかなんて誰にも分からないからな」

シエルとリュウヤが窓の外を見て

シエル「ああ、だから僕達は今を一生懸命生きてるんだろっね」

リュウヤ「……………ああ」

シエル「それじゃあ僕は相棒とその彼女の様子を見てくるかな」

そう言い立ち上がるシエル。

リュウヤ「邪魔はするなよ」

シエル「それぐらい分かってるよ」

シエルはそう言いリュウヤの部屋を出た。シエルが部屋を出たあと再び窓の外を見て

リュウヤ「……………何も起きなきゃいいがな」

第24話（後書き）

フォ「次回は翔にちょっとだけボロボロになってもらいます」

翔「な、何で!？」

第25話(前書き)

ついに書けた。第25話です。

第25話

翔は今車の中にいる。そして後部座席で寝っころがってる。まず車に乗ってる理由は先日の任務で保護した子を見に行く為と寝っころがってる理由は前の任務のあとからずっと眠いのが原因である。因みにシグナムが運転し助手席になのはが座ってる。

なのは「すみませんシグナムさん。車出してもらっちゃって」

シグナム「なに、車はテストロッサからの借り物だし、向こうにはシスターシャツハがいらっしやる。私が仲介した方がいいだろう」

なのは「はい」

翔「そうっすね」

シスターシャツハは聖王教会のシスターで一応翔も知ってる。

シグナム「しかし、検査が済んで何かしらの白黒が付いたとしてあの子はどうなるのだろうな」

シグナムが真剣な顔になって聞いてきた。

なのは「当面は六課か教会で預かるしかないでしょうね」

翔「そうだな。受け入れ先を探すにしても長期の安全確認を取れないとな」

なのは「うん」

そんな会話をしていると

シャツハ『騎士シグナム。聖王教会シャツハ・ヌエラです』

慌てたようにシャツハから通信が入った。

シグナム「どうされました？」

シャツハ『すみません。こちらに不手際があり、検査の合間にあの子が姿を消してしまいました』

翔達が聖王教会に着くとシャツハがやってきた。

シャツハ「申し訳ありません」

なのは「状況はどうなってますか？」

なのはがシャツハに尋ねる。

シャツハ「はい、特別病棟とその周辺の避難は済んでいます。今のところ、飛行や転移、進入者の反応は見つかっていません」

その対応に翔は思わずオイオイと言ってしまいそうになった。確かに完全に安心とゆう訳ではないだろうけどそこまでやる必要はある

のだろうか？と思ってしまっ。

なのは「外にはでてないはずですよね？」

なのはが再び尋ねた。

なのは「では手分けして探しましょう。シグナム副隊長」

シグナム「はい」

こうしてシグナムとシャツハが病棟を翔となのはが外を探す事になった。

翔「うん、どこにいるんだ？」

ため息吐きながら女の子をさがす翔

翔「仕方無い。奥の手を使うか」

なのは「奥の手って何？」

翔「こっだ！」

そう言い翔は体勢を低くして探し始めた。

なのは「えっと、それは？」

翔「うん。こつゆう風に子供の視点にあわせると見つけやすいと思
つて」

なのは「そ、そうなんだ」

なのはは思わず苦笑いした。翔は少し歩きづらそうだが頑張っ
て探していた。

そこに・・・

ぬいぐるみを持った女の子がいた。

なのは「あ・・・」

翔「見つかったな」

そう言いながら翔が体勢を低くしながら女の子に近づこうとした時

シャツハ「逆巻け！ヴィンデルシャフト」

窓からデバイスを起動させたシャツハが飛んできたが

翔「ぐへえ！」

何故かシャツハのデバイスが翔の後頭部に激突した。

なのは「翔君！」

シャツハ「すみません。大丈夫ですか」

翔「あ、ああ。大丈夫」

そう言っただけで起きあがる翔。女の子はさっきの事にビックリしたのか
尻餅をついている。

なのははその女の子に近づき話しかける。

なのは「ごめんね。ビックリしたよね」

なのはが女の子が落としたウサギのぬいぐるみを拾い渡した。

なのは「大丈夫？」

「うん」

女の子は涙目になりながらぬいぐるみを受け取った。

なのは「立てる？」

そう言うと女の子はゆっくり立ち上がった。

なのは「初めまして、高町なのはって言います。お名前言える？」

なのはが優しく問いかけた。

ヴィヴィオ「……ヴィヴィオ……」

なのは「ヴィヴィオ。いいね可愛い名前だ。ヴィヴィオどこか行き
たかった？」

なのはが尋ねると

ヴィヴィオ「ママ……いないの」

なのはと翔は一瞬驚いた表情になったがすぐに笑顔になり

なのは「ああ、それは大変。じゃあ一緒に探そうか」

ヴィヴィオ「……うん」

なのはの提案にヴィヴィオは頷いた。そして視線を翔に移した。

ヴィヴィオ「……」

翔「うん？どうした」

ヴィヴィオ「……」

翔が尋ねるがヴィヴィオは無言だ。

なのは「あ、翔君。多分名前が知りたいんだよ」

ヴィヴィオはなのはの言葉に頷いた。翔は「なるほど」と言いヴィヴィオの目を真っ直ぐ見て

翔「ヴィヴィオ。俺の名前は高宮翔。よろしくな」

翔はそう言ってヴィヴィオの頭を撫でた。その時なのははヴィヴィオが笑った気がした。

フェイト「臨時査察って、機動六課に？」

はやて「うん、地上本部にそうゆう動きがあるみたいなんよ」

フェイト「地上本部の査察は特に厳しいって」

はやて「うちはただでさえツツコミ所満載の部隊やしな」

フェイト「今配置やシフトの変更命令があったら致命的だよ」

はやて「うん、なんとか乗り切らな」

フェイト「ねえ、これ査察対策にも関係してくるんだけど六課設立の理由そろそろ聞いてもいいかな」

六課設立の理由。それ知ってる部隊員はやて以外にいない。

マリナ「そうね、そろそろ教えた方がいいんじゃない？」

そして突然はやての隣にマリナが現れた。

はやて「うわぁ、マリナさん」

フェイト「何時から？」

マリナ「今から」

そう言っつて立ち上がり

マリナ「今日、聖王教会のカリムの所に行くんでしょ。ならそこで全部話せば」

はやて「はい……ってマリナさん。カリムの事知ってるんですか」

マリナ「一応ね。実は恥ずかしい過去を知ってたりする」

その言葉に苦笑するはやてとフェイト。

マリナ「じゃあ私は先に行ってるから、翔も連れてきてね」

そう言い部屋から出た。

フェイト「そう言えばなのは達戻ってるかな」

フェイトが画面を出すと保護した女の子がなのはにしがみついでてその目の前に倒れてる翔がいた。

二人はそれを見て心の中で

(何があつた！？)

とツツコミを入れた。

はやて達が部屋に入ってきてエリオ達にどうなってるのか説明を求めた。

なんでもなのはと翔が部屋から出ようとした時ヴィヴィオが翔の足をつかんで翔はバランスを崩して顔から転んで今の状況らしい

はやて「そうなんや」

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん。あの・・・助けて」

なのはは親友二人に助けを求める。そこに

ドアを開けてカエルの着ぐるみが現れた。

全員『・・・は!?!?』

カエルの着ぐるみはヴィヴィオの前に行きお辞儀をした。ヴィヴィオは泣きやみそれを見てお辞儀する

ヴィヴィオはそれから興味があるのかずっとカエルを見ている。そこに復活した翔がヴィヴィオの頭を撫でて

翔「ヴィヴィオ。ちょっと出掛けるけどこのカエルと仲良くしててくれな」

ヴィヴィオ「うう……」

翔「帰ってきたらいっぱい遊んでやるよ。だから少し我慢してな」

ヴィヴィオ「……うん」

ヴィヴィオ「よし、いい子だ」

そう言いヘリポートへ歩いていった。

はやて「なあ翔君」

翔「うん？」

はやて「あのカエルは何だったん？」

翔「多分、リユウヤだと思う」

な・フ・は「……え！？」「」

中の人が意外な人物だった為驚く3人。

翔「アイツいろんな物もってるんだよ。アレは確かデパートに潜んでる犯罪者を捕まえる時に使ったやつだっけ」

な・フ・は「……………」

そんな会話をしながらヘリポートへ向かう4人だった。

そして聖王教会

なのは「失礼いたします。高町なのは一等空尉であります」

フェイト「フェイト・T・ハラOWN執務官です」

翔「高宮翔一等空佐です」

三人は敬礼して部屋に入る。

カリム「初めまして、聖王教会、教会騎士団騎士、カリム・グラシアと申します」

カリムが翔達に挨拶したそれと同時に

カリムの後ろの天上が開きマリナが飛び出してきた。

マリナ「スクラップの時間だぜエ！」

翔「ギャフウ！」

翔はマリナの跳び蹴りを喰らって吹っ飛んだ。

マリナ「さて、じゃあ話しをしよう」

なのは「翔君は・・・」

マリナ「その内起きるわ」

そう言いマリナは翔を引きずり席に座る。

フェイト「クロノ提督少しお久しぶりです」

クロノ「ああ、フェイト執務官」

カリム「ふふ、2人共そう堅くならないで。私達は個人的にも友人だからいつも通りで平気ですよ」

クロノ「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

はやて「平気や」

なのはとフェイトを見て言うはやてとクロノ

マリナ「えゝ私この人知らなゝい」

マリナがクロノを指さして言った。

クロノ「嘘をつくな。僕と君は何度も会ったことがあるだろ」

クロノがマリナのボケを冷静にツッコむそれを見て笑みを浮かべるカリム達

なのは「じゃあ、クロノ君久しぶり」

フェイト「お兄ちゃん元気だった？」

クロノ「それはよせ・・・お互いいい歳だぞ」

少し照れながら言うクロノそれを見てマリナがニヤニヤしながら

マリナ「本当はその呼び方がいいくせに」

クロノ「誰がそんな事言った!」

マリナ「顔に書いてあるよ」

はっはっは。と笑うマリナ。クロノは何か言いたそうだったが我慢する。

翔「まったく、マリナは」

なのは「うん・・・って翔君。何時の間に!」

なのはの後ろに翔が立っていた。

翔「さつき起きた。すごい痛かったけど」

そう言い頭を押さえる翔。

マリナ「さすが、あれぐらいじゃあくたばらないわね」

翔「一歩間違えたら三途の川渡ってたぞ」

カリム「すいません。話に入りたいんですけど」

カリムがこのままだと話が進まないと思い2人に言った。2人は仕方なく席に座る。

それと同時にカーテンが閉まり部屋が暗くなった。

クロノ「六課設立の表向き理由はロストロギア、レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例。知つての通り六課の後見人は僕と騎士カリム、そして僕とフェイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

モニターに後見人である3人の顔が表示された。

クロノ「それに加えて非公式であるが、かの三提督も設立を認め協力を約束している」

カリム「その理由は私の能力と関係があります」

カリムが立ち上がり紐で結ばれた紙の束を取り出し紐をほどいた。そして紙が光りカリムを囲むように浮く。

カリム「私の能力、プロフェーティン・シュリフティン。これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出して予言書の作成をする事ができます。2つの月の魔力がうまく揃わないと発動することができませんからページの作成は年に一度しかできま

せん」

なのはとフェイト、翔に紙を見せる。なのはとフェイトは理解不能な文字の為解らなそうな仕草をしている。翔は目の前の紙をじっと見ていた。

カリム「予言の中身も古代ベルカ語で解釈によって意味が変わる事がある難解な文章。解釈ミスを含めれば的中率や実用性はよく当たる占い程度。つまりはあまり便利な能力ではないんですが」

クロノ「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言にはよく目を通す。信じるかは別として有職者の予想情報の1つとしてな」

はやて「ちなみに地上部隊はこの予言がお嫌いや、実質のトップがこの手のレアスキルがお嫌いやからな」

それを聞いて納得したように翔は呟いた。

翔「レジアス・ゲイツ中将……か」

マリナ「まあアレ仕方無いと思うよ。マジで」

翔とマリナはため息を吐く。

翔「まああの人の事はどうでもいいしほっとくとして、話を続けて下さい」

カリム「あ、はい。私の予言能力に数年前から少しずつある事件が書き出されています」

カリムは頷いて話し出した。

カリム「古い結晶と無限の欲望と集い交わる地、死せる王の下聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆け……」

翔「……数多の海の法を守る船も砕け落ちる……か？」

「!？」

マリナ以外の全員はカリムが言おうとしていた予言の内容を翔が知っていた事に驚いた。

翔はみんなが驚いてるのを見て苦笑する

翔「そんなに驚く事じゃないでしょ。さっき文を見せてもらったんだから」

カリム「いえ、驚いてるのはそこでは無く何故あなたが古代ベルカ語を読めたかなんですけど」

カリムに言われて翔は一度息を吐きカリムの方を向いて

翔「……読めたからです」

と言った。本当はちゃんとした理由があるのだがそれは言わない事にした。マリナは翔がこの状況で理由を言いたくないのを理解したのか話を戻した。

マリナ「で、この予言が示すのは地上本部の壊滅と管理局システム

の崩壊って所かしら？」

カリム「はい」

カリムが頷いた。そして全員が少しの間沈黙する。しかしマリナは笑顔で

マリナ「ま、何とかなるでしょ」

そう言った。それを見て翔も笑い

翔「そうだな、何とかなる。何とかしてみせる。全部完璧に救えな
いだろうけど全部終わるまで・・・最後まで全力で戦う。守る為に
・・・それが俺が唯一出来そうな事だから」

翔「ふう」

翔は自分の部屋のベットに座っていた。ベットの上にはヴィヴィオ
が寝ている。夜になってヴィヴィオがいきなり翔と寝たいと言いだ
したからだ。

翔（全く、どうしてこんなになつかれたんだ？）

そんな事考えてると部屋の外で人の気配がしてそっちを向いた。

翔「ん？誰だ」

そう言つてドアを開けるとなのはが立っていた。

翔「どうした？こんな時間に」

なのは「うん、ちょっと聞きたい事があつたから」

翔「・・・そうか、じゃあ入れよ」

そう言つてなのはを部屋の中に入れる。なのはは翔の隣に座つてヴィヴィオを見る。

なのは「・・・ヴィヴィオにすこくなつかれちゃったね」

翔「人の事言えないだろ」

なのはを見ながら翔は言う。その後少しの間2人は無言になった。

なのは「あのさ・・・」

先になのはが口を開いた。そして翔の方を向く。

なのは「翔君が古代ベルカ語を読めたのって・・・」

翔「ああ、あの実験で頭もいじられたからだろうな」

翔は自分の頭を指差して言った。なのはそれを聞いて少し悲しそうな顔をする。それを見て翔は笑いながらなのはの頭を撫でた。

翔「気にすんな、別になのはが悩むような事じゃないから」

なのは「・・・うん」

なのはは撫でられて嬉しそうにする。翔はなのはを撫でながら窓の外を見ながら言った。

翔「俺さ・・・」

なのは「ん？」

翔「夢が今まで無かったんだ」

翔はなのはの頭から手を離して立ち上がり言った。

翔「けど今はある。他人からみたらちっぽけで夢なんて言える物じゃないかもしれないけど」

なのは「？・・・どんな夢なの？」

なのはが翔を見ながら言う。翔もなのはを見て

翔「・・・ずっとヴィヴィオやなのは、みんなが笑顔でいられる世界にする。それが今の夢・・・平和な世界にするとかそんな俺には出来ないけどいろんな人が笑ってられる世界にするのは出来そう
な気がするんだ」

そう言って翔は再びベットに座った。

なのは「・・・出来るよ。翔君なら絶対に。私が保証する」

翔「・・・この世界に絶対なんてなんだけど・・・なのはに言われ
たら出来そうな気がする」

そう言いベットに寝っころがる。そしてなのはも一緒に寝る。

翔「・・・おい」

なのは「いいでしょ」

翔は一度ため息を吐いて

翔「・・・そ、そんなに入りたいなら入ってもいいぜ」

なのは「うん」

こんな感じで色々あった一日が終わった。

おまけ

フェイト「ねえリュウヤ」

リュウヤ「うん？」

フェイト「カエルの着ぐるみを持ってた理由は分かったけど、何で

持ってきてたの？」

フェイトの疑問にリュウヤは

リュウヤ「・・・何かに使えそうだったから」

フェイト「普通は使わないよ」

リュウヤ「・・・確かに」

シエル（たまにやるんだよね。「つつゆつ事」

翔達が帰ってきたあとの話

第25話（後書き）

これから更新が遅くなりますがこれからもお願いします。

第26話(前書き)

久しぶりの投稿！
ちよっと話が進みます。

第26話

翔の朝はそんなに早くない。朝は特にやることなく少し遅く起きても何か言われることもない。なので翔はいつもみんなより遅く起きています。その翔の隣には昨日保護した女の子が眠っていた。

金髪で年は6歳ぐらい、右目が緑、左目が赤のオッドアイの女の子。名前はヴィヴィオ。何故か翔にすごく懐きヴィヴィオの面倒を翔が見てるのだ。

翔「ん〜どうするか」

この日、翔が起きて一番最初に困った事。それは寝てるヴィヴィオの事だ。ヴィヴィオは翔の服の裾を掴んでいて離す様子が無い。翔もヴィヴィオが起きるまでこのままとゆうわけにもいかないのかいい方法が無いか考えてると

ヴィヴィオ「う〜ん」

ヴィヴィオが目を擦りなが体を起こした。翔はヴィヴィオの頭を撫でながら声を掛けた。

翔「おはよう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「うん・・・」

翔の声に答えるが眠そうにしてるヴィヴィオ。それを見て翔は

翔「（もうちょっとこのままにしとくか・・・）」

そして翔はヴィヴィオを自分の膝の上に乗せもう一度頭を撫でた。その時ヴィヴィオが嬉しそうな顔をしていたが翔には見えてなかった。そして10分ぐらい経って翔が言った。

翔「・・・ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「なに？」

翔「なのはさんのところ行くか？」

ヴィヴィオ「うん！」

こうして翔とヴィヴィオは部屋を出てなのは達の元へ向かった。

翔はヴィヴィオを連れて訓練所に向かっていた。

翔「もうすぐで着くからな」

ヴィヴィオ「うん、かけるパパ」

・・・うん？

翔は一瞬フリーズした。

この子は自分をなんと呼んだ？

翔「パパ？パパってなんだ？翔は考える。」

パパってちっちゃい子が父親を呼ぶ時に使う言葉だよな？

それをヴィヴィオが俺に使った。

つまりそれって……

翔「ヴィヴィオの父親って事である」

頭の中でヴィヴィオが言った事を理解しヴィヴィオに話し掛ける。

翔「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「なに？」

翔「俺、ヴィヴィオのパパでいいのか？」

そう聞くとヴィヴィオは笑いながら頷いた。

ヴィヴィオ「うん」

それを見て翔も笑顔で

翔「そうか、じゃあこれから俺がヴィヴィオのパパだ」

その言葉を聞いたときのヴィヴィオの顔はすごく笑っていた。

そして訓練所に着く翔とヴィヴィオ。翔が先に声を掛けようと思っ

ていたらスバルが翔達の方に気づき声を掛けた。

スバル「あ、翔さん、ヴィヴィオ！」

翔「よう」

翔とヴィヴィオはみんなの方へ向かう。なのははヴィヴィオに話掛けた。

なのは「おはよう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「うん、おはよ〜」

ヴィヴィオはなのはにすっかりあいさつした。

翔「えらいぞヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「うん、翔パパ」

この瞬間、まるで時が止まったかのように翔とヴィヴィオ以外の人の動きが止まった。その中で一番初めに復活したティアナが翔に尋ねる。

ティアナ「あの、翔さん」

翔「ん？」

ティアナ「今、ヴィヴィオが翔さんの事パって言ったように聞こえたんですけど……」

翔「あゝ」

翔はそれを言われてどう説明しようか困ったが正直に言うことにした。

翔「え〜と、なんかヴィヴィオが俺の事をそうやって呼びたいらしいから・・・そうゆう事です」

スバル「へえ〜そうなんですか」

そしてこのあとなのはが誰も想像してなかった発言をする。

なのは「・・・ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「なに？」

なのは「私の事、今から“ママ”って呼んで」

再び時間が止まったようになのはとヴィヴィオ以外の動きが止まった。そして全員声を揃えて

『えーーーーー!!』

叫んだ。もう六課全体に聞こえる位叫んだ。

ヴィータ「え!?!オイ本気で言ってるのか」

焦るヴィータ。

エリオ「なのはさん!いきなり何言ってるんですか!?!」

キャラ「そ、そうですよ」

驚くエリオとキャラ。スバルとティアナも口を開けて固まっている。

そんな中翔は・・・

翔「・・・良いんじゃないか」

『え!?!』

翔の言葉になのはとヴィヴィオ以外は驚く。気にせず翔は続けて言う

翔「やっぱりさ父親だけじゃなくて母親も必要だと思っし、ヴィヴィオの為にもなると思っし」

その言葉にその場にいる全員が納得する。それを見て翔はヴィヴィオに視線を合わせて言った。

翔「ヴィヴィオ、今からなのはさんがママだからな」

それを聞いてヴィヴィオはなのはの方を見て

ヴィヴィオ「・・・なのはママ?」

と言った。それを聞いてなのはは笑いながら

なのは「うん、なのはママだよ」

そう言った。ヴィヴィオもそのなのはの笑顔を見て笑った。

その頃

翔の部屋にはシエルとマリナが立っていた。

二人はしばらく沈黙していた、この沈黙を先に破ったのはシエルだった。

シエル「で、話して?」

そう聞かれてマリナは自分のズボンのポケットに手をつっこみながら答えた。

マリナ「いやあ、ちょっと相談したい事があってね」

シエル「相談?」

シエルが珍しそうにした。基本マリナは人に相談したりせず自分の判断だけで色々やるタイプだ。悪い言い方をすれば自分勝手である。そんな人が相談するなんてどんな事だろうとシエルは思った。そしてその内容は予想をはるかに越える物だった。

マリナ「そろそろ、“アレ”を使ってみようと思わない?」

シエル「!?!」

シエルは驚愕の表情を浮かべた。マリナの指す“アレ”には心当たりがある。だからシエルはマリナの提案をすぐに否定した。

シエル「やめたほうがいい。君は僕達……いや翔が成功すると思ってるのか?」

マリナ「いや、普通は成功しないとおかしいんだけどね」

マリナはポケットにつっこんでいた手を出した。

マリナ「翔が成功しなかった理由は精神面の所為だと思うのよ。アレ”を最初に使った時の精神状態は最低だったしね・・・」

シエル「・・・なるほど」

シエルは納得した。確かにそれはあるかもしれないと

シエル「でも使う必要はあるのかい？大体は通常のWで対処出来るしもしもの事があってもファンゲやリユウヤもいるし・・・」

それを聞いてマリナは少し目を瞑った。その数秒後目を開けて部屋の入り口まで行った。

マリナ「確かにそうね。使わない状況ならそれでもいいかもしれない。でも、もし必要になったらいつでも言いなさい・・・まあ必要になったらアイツの事だし自分から言いそうだけどね」

それだけ言ってマリナは部屋から出た。それから少しして翔が部屋に入ってくる。そしてシエルに話掛けた。

翔「うん？どうしたシエル」

シエル「別に」

それだけ言っているとシエルは部屋から出ていった。翔はそれを少し不思議

議そうに見送った。

そして廊下でシエルは一人呟いた。

シエル「アレ」が必要になる事なんて・・・あるわけない」

その呟いた声は誰もいない廊下で大きく聞こえた。

第26話（後書き）

フォ「“アレ”とは一体何なんでしょう」

翔「それを言ったらネタバレになっちゃうでしょ」

フォ「“アレ”なんてほつといてプトティラかけーな」

翔「話が変わったよ」

フォ「そしてDOG DAYSがシリアス展開突入？」

翔「1つ話題を続けて話せないのか？」

フォ「無理！」

翔「あっそう」

フォ「そんな訳で次回、勇者とプトティラと“アレ”です。お楽しみー」

翔「おい、なにする気だ！やめるー！」

次回も普通の話です。けっして上記の題名の話はしません

おまけの話 その1 (前書き)

今回は本編に全く関係ない話です。

おまけの話 その1

女装

はやて「翔君。一つ言わせて」

翔「何だよ」

部隊長室のはやてに翔は呼ばれていた

はやて「いや、翔君って少し女の子みたいな顔してるやないか」

翔「……」

翔はこの時すごく嫌な予感がしていた。そしてそれは見事に的中した。

はやて「だから、これ少し着てみて」

はやてがそう言うつとリンが一着の服を持って来た。

それはセーラー服だった。

翔「……」

はやて「どうや？」

翔「逃げる！」

翔は凄い勢いで走りだしたしかし翔の体はバインドで拘束されてしまった。

翔「な!？」

しかもバインドの色はピンクだった。

翔「おい!どうゆう事だよなのは!」

翔が叫ぶと天井が開きなのはが現れた。

なのは「ゴメン翔君。私も見なくなっちゃたからつい」

翔「それよりもお前がマリナ専用入口から出てきた方がびっくりだよ!」

翔が顔だけなのはの方を向いて言った。

*マリナはよく出入りする場所の天井に隠し扉のようなものを作っている。

はやて「ふっふっふ。これでもう逃げられへんで」

はやてが怪しいオーラを発しながら翔に迫ってくる。翔「や、やめるー!」

そして数分後

翔「……」

強制的にセーラー服を着せられ涙目になっている翔がいた。

はやて「おお、予想以上に似合ってるな」

なのは「ホントだ・・・」

はやてとなのはは翔のセーラー服が似合いすぎていて驚きの表情を浮かべている

翔「おい、もういいだろ。俺の服返してくれよ」

翔は涙目で言うがはやては

はやて「駄目や、今日一日女装してもらっつで」

翔「絶対やだ!」

翔が拒否するがはやては笑みを浮かべたまま

はやて「でもそのカッコじゃあこの部屋からでれへんよ?」

翔「あ!」

翔の今の服はセーラー服。この格好で部屋に戻るとその間の廊下で誰かに会う危険がある。

翔「じゃあ俺の服返せ!」

はやて「返せって言われて返す人はいないで」

翔「くそ・・・」

翔はそのまま地面で体育座りをした。それを見たリインは

リイン「大丈夫です翔さん。すごく似合ってますから」

その言葉はリインは励まそうとして言った言葉だったが、翔はその言葉によって大ダメージを受け部屋の片隅で体育座りをしながら泣きだした。

それを見てリインは慌てだす

リイン「か、翔さん。どうしたんですか!?!」

翔「・・・もうほっといてくれ」

そんな翔を見てはやては

はやて「仕方ない、翔君」

翔「何?」

はやて「ちゃんと制服に戻したる」

翔「ホントに!?!」

翔は部屋の端からはやての元に光の速さでやってきた。そして目をキラキラさせながら

翔「ホントに?ホントにもどれるの!?!」

はやて「もちろん、制服になれるで」

この時翔は気づかなかった。はやては制服にもどれるとは言わず制服になれると言った事を……

そして翔は

翔「……おい」

女性用の制服を着せられた。

それを見てはやてはガッツポーズしていた。

はやて「よし！」

翔「よしじゃねーよ。俺の服返せよ」

そこではやてはすごく悪そうな笑顔で

はやて「うちは制服に戻れるって言っただけや、決して翔君の制服に戻るなんて一言も言っていないで」

翔「……あ」

翔ははやての言った言葉の数々を思い出した。確かに制服に戻るとは言ってるが翔の制服に戻るなんて一言も言っていなかった。

翔「あの、はやてさん。今日一日……」

はやて「もちろん、そのままやで」

翔「ですよ〜」

そして翔はその日一日女装して過ごした。

そしてその日の夜、翔は真っ白に燃え尽きていた。

とある魔王？の接吻作戦

夜中、ある男の部屋に近づく影があった。

その影は部屋に入り男が寝てるベットへ近づく

そしてベットに潜り男の顔に自分の顔を近づけていく

しかし残り1?の所で男の目が開いた。影は焦り男は呆れた表情でその影を見ていた。そして少しの沈黙の後、男が口を開いた。

「・・・なにやってるんだ・・・なのは」

「・・・」

これが高宮翔と高町なのはの深夜のやり取りである。

翔「で、なにやってたんだ？」

なのは「えつと・・・」

なのははなんて言おうか困った。翔はなのはを見ながらさっきの状

況を整理した。

なのは自分の顔を翔の顔に近づけていた。

なのははそんな事して結局何をするつもりだったのか。

そして翔は答えにたどり着いた。

翔「……もしかしてキスしたかった？」

なのは「……………」

その言葉になのはは顔を朱くして頷いた。翔は一度ため息を吐いてなのはに言った。

翔「……別にしたきゃしたいって言えばいいのに……………」

それに対してなのはは顔を朱くしながら言う

なのは「だ、だってそんなこと言うの恥ずかしいし翔君が起きてる時にやるのも恥ずかしいんだもん」

翔「……………」

その理由を聞いて少し呆れた顔になる翔。そして一言こう言った。

翔「……じゃあ俺からやるよ」

なのは「え!？」

翔「なのはが出来ないなら俺がキスする」

その発言に驚くなのは

なのは「えええええ！な、なに言ってるの翔君！」

翔「いや、なのはからするのが無理なら俺がするしかないだろ」

なのは「そうじゃないよ！なんでキスする前提で話が進んでるの！？」

それを聞いて翔はキョトンとした顔で

翔「え？だってなのは、キスしたいんじゃないの？」

なのは「ふああ！た、確かにしたいけど・・・」

顔を朱くしながらモジモジしはじめるなのは。翔は心の中で仕方無いとつぶやき・・・叫んだ。

翔「なのは！目を瞑れ！」

なのは「え！？わ、分かった」

そう言い言われた通り目を瞑るなのは。その隙に翔は

なのはの唇にキスした。

一瞬なのは何が起こったのか分からなかった。

数秒後、自分に何が起こったのか気付いた。

今の自分は翔にキスされている状態だと。

なのは「（あ、あわわわわ）」

そして翔は自分の唇を離し笑いながらなのはの頭を撫でて言った。

翔「……どうだった？」

翔がそう聞いたがなのは顔を朱くしたままパタリと倒れてしまった。

翔「あれ？どうしたんだ？」

なのは「ふにゃあー……」

なのは朝までこの状態だったらしい

おまけの話 その1（後書き）

かなりどうでもいい話でしたね。

ちなみに女装版の翔の活躍は時間があれば書く予定です。

第27話(前書き)

遅くなつてすみません。
最新話投稿です。

第27話

リュウヤ「どおしてこうなった」

リュウヤは訓練所の中心で呟いた。リュウヤの目の前には騎士甲冑姿のシグナムがいた。何故こんな事になっているかという数時間前まで遡る。

シグナムがいきなりリュウヤに向かって言った。

シグナム「リュウヤ、私と模擬戦をしないか」

リュウヤ「・・・は？」

リュウヤはいきなりの事に啞然とする。そんなリュウヤにシグナムは続けて言う。

シグナム「高宮達とは一度戦った事があるがまだお前とは戦った事が無いからな」

ちなみに戦った後の翔の感想

翔「もう一生やらねえ！」

と言ったらしい

とまあ断つてもバトルマニアのシグナムは引き下がらずこつゆつ結果になってしまった訳である。

リュウヤ「・・・仕方無いか・・・」

リュウヤはアクセルドライバーを取り出し腰に装着しアクセルメモリを取り出した。

リュウヤ「変・・・身！」

【アクセル！】

リュウヤはガイアメモリをドライバーのスロットに挿入しパワースロットルを捻りアクセルになった。

アクセル「さあ、振り切るぜ！」

こうしてアクセルとシグナムの模擬戦が始まった。

シグナム「はああああ！」

先に仕掛けたのはシグナムだった。アクセル目掛けて走りだしレヴァンティンを振るう。

アクセルもそれをエンジンブレードで受け止める。

シグナム「ふ、やるな。今の本気の一撃だったのだが・・・」

アクセル「本気と言ってもリミッターをつけての本気だろ？」

そう言いアクセルはエンジンブレードでレヴァンティンを押し切った。

シグナム「ぐっ（力が・・・強い）」

シグナムはアクセルの力に押され少し後ろに下がった。

アクセル「はああああ！」

【エレットリック】

さらにアクセルはエンジンブレードに電流を纏わせシグナムに攻撃を仕掛けた。

シグナムはそれを左に避けてアクセルに切り掛かった。

シグナム「うおおおお！」

アクセル「ぐっ！」

アクセルは紙一重でそれを避けた。

シグナム「やはり強いなりユウヤ。これほど楽しい模擬戦は久しぶりだ」

アクセル「これが楽しいとはな、やっぱりとんでもないバトルマニアだなお前」

アクセルのその言葉に笑みを浮かべシグナムは再びレヴァンティンを構える。

シグナム「ならば、こいつはどうだ！レヴァンティン！」

【シュランゲフォーム】

レヴァンティンは連結刃のシュランゲフォームになった。

シグナム「はああああ！」

シグナムは連結刃を鞭のように振るった。アクセルはそれをギリギリでかわす。シグナムはその後も攻撃を続けアクセルは防戦一方になっていった。

アクセル「（くっ、この状況どうするべきか・・・）」

アクセルはシグナムの攻撃を防御しながら考えていた。そして“ある方法”を思いつきそれを実行する事にした。

アクセル「（仕方ない・・・やるか）」

アクセルはシグナムから距離をとった。シグナムはその行動に疑問を持ったが何が来るのか分からないので一応レヴァンティンを通常形態のシュベルトフォームに戻し構える。

シグナム「（さて、どう来るか・・・）」

シグナムが考えてるとアクセルはアクセルドライバーのバックルを両手で保持したまま取り外した。そしてアクセルは変形した。

シグナム「なに！？」

シグナムはアクセルが変形したことに驚いた。しかも変形した姿はまるでバイクの様であった。

翔「おーやってるなー」

翔が二人の戦いを見て言った。その他大勢の皆さんはアクセルがバイクになったことに驚いているのか口を開けて硬直している。

翔「ん、どうしたんだ？口開けたまま固まって」

翔がそう言つと一番先に硬直状態を解いたフェイトが少し慌てて翔に尋ねた。

フェイト「か、翔。リュウヤがバ、バイクになっちゃたよ!？」

翔「あゝそれは確かにツツコミたくなる部分だけど気にしないでくれ」

はやて「あれってどうゆう仕組みになってんの？」

はやての質問にシエルが答える。

シエル「ああ、あれはアクセルメモリとアクセルドライバーの能力の一つだよ」

ティアナ「あんな事まで出来るなんてガイアメモリって本当有り得ない物よね」

ティアナはため息混じりに言った。翔はそれを聞いて苦笑しながら

翔「まあ、それを言ったら魔法だって地球の奴からしたらかなり有り得ない物だけだな」

翔はなのはとはやての方を見て言った。なのはとはやてはそれに苦笑して答えた。翔は訓練場の方を見た。

翔「さて、あっちはどうゆう状況かな？」

シグナム「・・・くっ」

シグナムはレヴァンティンをシュランゲフォルムにしてバイクフォームのアクセルにふるっていた。しかしアクセルはそれを簡単にかわすアクセルはバイクフォームの状態だと高速移動を可能とする。そのためシグナムの連結刃を簡単に対処することができるのだ。

そしてアクセルはシグナムとの距離を詰めていくそしてアクセルはシグナムの目の前まで近づくと通常状態に戻りエンジンブレードをシグナム目掛けて振りかざす。

アクセル「ハア！」

シグナム「がつ！」

そしてシグナムは吹き飛ばされる。が、そのまま倒れず吹き飛ばされてる空中で体勢を立て直し着地した。

シグナム「・・・やはりすごい力だな、お前もメモリも・・・」

アクセル「それほどでも無い。人から褒められる物じゃないよ、俺

もコイツも」

そう言いながらクラッチレバーを引いた。

アクセル「悪いがこれでお終いだ」

【アクセル！マキシマムドライブ！】

シグナム「なら、私もこれで終わりにしよう。レヴァンティン！」

シグナムが叫びレヴァンティンはカートリッジをロードし炎を纏った。

アクセルはパワースロットルをひねり全身に炎を纏った。

そして・・・

シグナム「紫電・・・一閃！」

アクセル「はあああ！」

二人の攻撃がぶつかり爆発が起きた。

そして煙が晴れるとそこには

アクセル「……………」

シグナム「……………」

アクセルが膝立ちしてるシグナムにエンジンブレードを向けていた。

シグナム「・・・負けたか」

アクセル「ああ、俺の勝ちだ」

そう言うとアクセルはエンジンブレードをしまいメモリを抜きドライバを外してリュウヤの姿に戻った。

こうして二人の模擬戦も終わりリュウヤが自室でベッドに潜り込んでいるとドアをノックする音が聞こえた。

リュウヤ「・・・どうぞ」

そう言うとドアが開きフェイトが現れた。

リュウヤ「どうした、何か用があるのか？」

フェイト「いや、用は無いけどちょっと話があったから」

リュウヤ「・・・そうか」

そう言うとリュウヤは起きあがりベットに座った。フェイトもその隣に座る。

リュウヤ「で、何を話す？」

フェイト「えっと・・・」

リュウヤ「・・・？」

フェイトが困った表情をしていてリュウヤは疑問に思った。そしてフェイトが発した言葉は・・・

フェイト「何も話すこと……無いんだよね」

リュウヤ「……マジか」

リュウヤは頭を抱えた。何故話す内容が無いのに話をするのか

リュウヤ「……とりあえずゆっくりしていけ」

フェイト「……うん」

こんな感じでフェイトはリュウヤの部屋で少しの間居た。そしてリュウヤが少し小さい声で呟いた。

リュウヤ「……いつまでもこんな感じで平和であって欲しいな」

フェイト「……そうだね」

こうして二人の時間はゆっくりすぎていった。

第27話（後書き）

本当遅くなってしまいすみませんでした。理由は色々ありますが一番の理由は気力だと思います。忙しい為か書く気力が少なくなっていたのでそれが最大の原因だと思います。

これからはもう少し早く投稿出来るよう頑張りますので応援の方よろしく願います。

第28話(前書き)

今回かなりてきとつですがどうぞ

第28話

翔「仮面ライダー？」

翔は昼食を食べている時その言葉を聞いた。

翔「一体何のことだ？」

翔はちょうど隣に居たエリオに尋ねた。

エリオ「僕も詳しい話は知りませんがWの事らしいですよ」

翔「なんで？」

まさかWに仮面ライダーと言う名前が付けられてるなんて思いもしていなかったのである。

翔「でもなんで仮面ライダーって名前なんだ？」

それに答えたのはエリオの隣にいるキャラ口だった。

キャラ口「なんでも仮面を被ってバイクに跨り怪物を倒したから“仮面ライダー”らしいですよ」

翔「ほえ〜そう言えばそんな事したこと合ったな」

はやて「まあその話しは置いて翔君、ちよつとコレ飲んでみて」

いきなりはやてが現れそんなことを言ってきた。

翔「別にいいけど・・・仮面ライダーの話はアレで終わりかよ」

はやて「当たり前や。アレで一話分の話し出来るわけないやろ」

翔「にしても短いだろ」

翔は右手を頭に置いてため息混じりに言った。そしてはやてが差し出した謎の液体を見た。

翔「で、これは？」

はやて「うゝん栄養ドリンク？」

翔「何故、疑問形？」

はやて「いいから、いいから」

そして半ば強引に謎の液体を飲まされた翔。そして飲んだ後翔に異変が起きた。

翔「なっ！」

いきなり翔の体が光り出した。そして光りが収まるとそこには・・・

????「な、何が起きたんだ？」

翔をちっちゃくした様な男の子がいた。

はやて「よし、成功や」

はやては親指を立てて笑みを浮かべた。男の子は、はやての方へ歩いていきはやてに言った。

????「オイ、コレはどうゆう事だ」

はやて「え?どうゆう事って見て分かるやろ?翔君は今子供の状態になっただんや」

そう、この男の子ははやての持ってきた液体によって子供にされた翔だった。

翔「こんな事して何するつもりだ?」

はやて「そんなの和むに決まってるやん、この翔君を見ると本当癒されるわ。なあエリオ、キャラ」

はやては翔の頭をなでながらエリオとキャラの方を向いて言った。なでられてる翔はその状況に不満げな表情をしている。

エリオ「は、はい」

キャラ「ちっちゃい翔さん、可愛いです」

翔「ふ、二人とも(泣)」

翔がエリオとキャラの言葉に涙目になりはやてはその翔の状態を満面の笑みで見ている。

翔「ところで、これはいつまで続くのかな?はやてクウン?」

はやて「え？勿論一生このま・・・あ、待つてください隊舎目掛けてリボルキヤリー突撃させないでください」

スタッグフォンでリボルキヤリーを呼ぼうとしている翔にはやてが土下座しながら止めさせる。流石の翔も土下座までされて実行するほど鬼では無いのでスタッグフォンをしまう。

翔「で、いつ戻るんだ？」

はやて「明日の朝には戻ります」

翔「これはお前一人で作ったのか？」

はやて「シャマルに手伝ってもらいました」

今、翔が仁王立ちし目の前ではやてが正座している。翔の背が小さいのでその光景はかなりシユールなものである。そして翔はこの犯行にシャマルも加わっていると知ると再びスタッグフォンを取り出し電話をかけた。

翔「もしもし、俺だ。え？声が違う？変な薬飲まされたんだよ。コン君状態だ。だから、お前に頼みがある。主犯は捕まえたから共犯者を捕まえてくれ。名前はシャマルだ、いいな」

そう言うとう電話を切りスタッグフォンをしまった。

はやて「ちなみに今の電話は・・・」

翔「シャマルの元には特殊部隊が行った。それだけだ」

それだけと言ってるがかなり恐ろしそうな感じが漂っている。

翔「そんなわけだ。はやて、お前にも罪を償ってもらうぜ」

ちっちゃい翔が言う。もう少し身長があれば威厳があったのだが今は威厳もクソもない。

翔「さて、どう料理してやろうかな？」

翔が悪党の様な台詞を言う。しかしはやては不適な笑みを浮かべている。そして翔に向かい言った。

はやて「残念やな翔君、うちの勝ちや」

翔「は!？」

翔は一瞬何を言ってるんだと思っていたが直後その言葉の意味を知った。

翔「まさか、お前・・・」

はやて「そのまさかやで」

そして翔はふり返った。まだ間に合うはず。まだはやての思惑通りにならない、そう思っていた。しかしもう遅かった。

なのは「・・・」

翔「・・・」

そう、はやての狙いはコレだった。ちっこい翔となのはを会わせる。それによって何が起こるかと言つと

なのは「……………」

翔「……………(汗)」

なのは「……………」シユン!

翔「ヤバ!」

そう言つたがもう遅く、翔はなのはに抱きつかれていた。

翔「ぬわぁ!」

そして抱きついたなのはの一言

なのは「好き!」

であった。

翔「な、なのは。苦しいから離れて欲しいのですが」
しかしなのはは抱き着いたまま動かない。そこで翔は助けを求める
為辺りを見渡すがそこには

困惑気味のエリオとキヤロ

そして勝ち誇つた顔のはやてが仁王立ちしていた。

翔「(あの野郎)」

翔ははやてに少し怒りを覚えるが今は怒るよりなのはをどうにかしないといけない。

翔「なのはさん。とりあえずどいてくれませんか？」

なのは「やだ、ちっちゃい翔君可愛いから」

そしてそのまま数分した時フェイトが現れなのはから翔を引きはがした。その時のなのはの顔はとんでもないものだったらしい。

翔はその時助かったと思ったがそれは誤解であった。

これからが大変だったのだ。

まずチビ翔が廊下であつたのがスバルとティアナだった。

スバルは翔を見ると小走りで向かってきて抱きしめた。

翔「ぬわあ、お前もか!？」

翔は突然スバルがだきついてたのに驚いた。

ティアナ「ちよつとスバル!翔さんに何やってんのよ!？」

ティアナが怒鳴るもスバルは聞いてない。ずっと翔に頬擦りしている。ちなみにティアナ達はシエルから翔がちっちゃんくなつたと聞いている為混乱せずにいた。

スバル「だって〜ティア、ちっちゃん翔さんプニプニしてるんだもん」

ティアナ「だからってアンタは・・・」

そのやり取りを見ながら翔は心の中でため息をついてティアナに言った。

翔「まあ、俺は大丈夫だから気にすんな」

ティアナ「わ、分かりました」

この後、数十分後翔は解放された。

翔「・・・はあ」

夜、チビ翔はため息を吐いていた。あの後マリナに捕まり翔を見たヴィヴィオの頭が混乱してしまったりふたたびなのはに捕獲されたり色々大変だった。

翔「まあこんなのもいいかな？」

そうだった翔は直後すごい眠気に襲われた。どうやら体が小さくなると眠くなる時間帯も早くなるらしい

翔「・・・寝るか」

こうしてちっちゃい翔の一日が終わった。

次の日

なのは「スー、スー」

ヴィヴィオ「むにゃー」

翔「お前ら・・・」

翔になのはとヴィヴィオが抱きついている状況が完成していた。

翔「コレで何回目だー！」

朝早く翔の叫びが機動六課中に響いた。

第28話（後書き）

早くスパイラルも書かないと・・・

翔「頑張れ」

マリナ「次回はなのはキャラが増えます」

マジで？

翔「マジだよ」

泣いてやる

翔・マリナ「知るか」

第29話（おまけその2）（前書き）

あまり29話関係ありませんが見てください。

第29話（おまけその2）

今回の話、ギンガさんとマリエルさんがきました。

〜終わり〜

ギンガ「終わりにすんなー！」

スバル「ギン姉、どうしたのいきなり！」

ギンガの叫びに驚くスバル。

さっきも書いた通り今日ギンガとマリーが機動六課に出向してきたのだった。

しかし今回は29話という名のおまけ話なので今回は出番ありません。

ギンガ「え、ホントなの！本当に出番ないのー！」

マリー「もう、あきらめます」

マリナ「ドンマイ（笑）」

くそれはとつても知りたいなつてく

これはある日の部隊長室、今ここにいるのはタヌ・・・はやてとフ
エイトだった。フェイトが部隊長室にいる理由は大した事では無い。
そんなときはやてはフェイトにあることを聞いた。

はやて「なあ〜フェイトちゃん〜ん」

フェイト「何、はやて？」

はやて「フェイトちゃんつてリュウヤ君とどうゆう仲なの？」

フェイト「ぬっふえ!？」

フェイトは突然の質問に奇声を上げる。

フェイト「な、何でそんなこと聞くの？」

はやて「だつて〜二人共このごろ仲いいんだも〜ん」

そう、このごろフェイトとリュウヤの仲が良いのである。
なんか一緒にいると二人ともすごい感じなのだ。

はやて「なんかあるやろ〜?」

フェイト「な、なにも無いよノノノ」

はやて「ホントかな？」

フェイト「本当！」

フェイトは少し強めに言った。はやても「そうか」と言いそこでもう話しは終わった。

しかしそれで本当に終わるほどはやてはいい人ではない。はやてはある人物を呼んでいた。フェイトとリュウヤの仲がすごく良くなっているのを証明するため

はやて「フェイトちゃん」

フェイト「何？」

はやて「さっきの話なんやけど」

フェイト「うん」

はやて「マリナさんも気になるって」

フェイト「ふあい!？」

再び謎の声をあげるフェイト

フェイト「え？な、なんでそんなことはやてもマリナさんも気になるの？」

それを聞きはやて無言で立ち上がり自分の胸の前で拳を握り

はやて「それがとてもおもしろそうだから！」

と大きい声で言い放った。フェイトはただ呆然とするしかなかった。その時天上が開きマリナが姿を現した。

マリナ「さて、私もおもしろい話し聞きに来たわよ」

そしてフェイトに近づき笑顔で

マリナ「全・部・教えてね」

数分後フェイトの悲鳴が部隊長室から聞こえたと言う

超平和

ある日の昼過ぎシエル達が遭遇した平和を象徴するような光景。それは……

翔「zzzz」

ヴィヴィオ「zzzz」

この二人のお昼寝シーンだった。これを見た人達は口を揃えて『平和だ』と言ったらしい。

ちなみにこの後ここになのはが無理やり入ろうとして止められた。

ここから本番

マリナ「さて、読者の皆様。いつもこの作品を見て下さりありがとう

うございます」

翔「次でこの『魔法を少女リリカルなのはstrikerS』も30話になります」

マリナ「30話からは原作の中盤部分を書いていきます」

翔「そして今日はその予告の様なものを載せます」

翔・マリナ「是非見てください」

これは魔導士と

戦闘機人と

科学者と

聖王と

仮面ライダーの

物語

始まる公開意見陳述会。そしてそこで起こる事件

蘇る

「絶対潰す！」

【ACCEL】

「どこまでも付いていくさ、相棒」

【CYCLONE】

「いくぞ最後の戦いだ！」

【JOKER】

魔法少女リリカルなのはstrickersSW二人で一人の仮面ライダー

第2章

開幕

「さあお前の罪を数えろ！」

【XTREME!】

マリナ「その前に第1章の話を一部変更します」

翔「次話の投稿はもう少し先になります。ご了承ください」

翔・マリナ「それでは次回をお楽しみに」

第29話（おまけその2）（後書き）

次から昔の話を編集していくので次話は結構先です。これからよろしく願います。

第30話(前書き)

久しぶりの最新話です。どうぞ

第30話

9月11日機動六課隊舎 PM9:00

翔「あゝめんどくせ〜」

翔は自室のソファで寝ていた。

シエル「翔、久しぶりの最新話なんだからもうちょっと頑張ろうよ」

翔「ああ・・・ってか作者何やってんの？過去の話の一部変更とかちゃんと新しい話もかけよ」

翔が愚痴を言っていると出発の時間になったので翔とシエルはヘリポートへ向かった。

翔「俺、行きたくないよ〜」

リュウヤ「知るか」

翔の発言を放といてリュウヤはヘリにのる。翔は「最近冷て〜」と思いつながらヘリにのろうとするとヴィヴィオと寮母のアイナさんがいた。

翔「ん？どうしたヴィヴィオ？」

翔がしゃがんでヴィヴィオに尋ねる。

アイナ「ごめんなさいね。どうしてもパパとママのお見送りするんだって……」

翔「そっか……」

なのは「駄目だよヴィヴィオ、アイナさんにわがまま言っちゃ」

なのはも翔の隣に来てヴィヴィオに言った。

ヴィヴィオ「ごめんなさい」

翔「まあ、夜勤でいないのなんて初めてだからな……不安なんじやねえの？」

なのは「あ、そっか。なのはママ今夜は外でお泊まりだけど明日の夜には帰って来るから」

ヴィヴィオ「……ぜったい？」

なのは「うん、絶対。いい子で待ってたらヴィヴィオの好きなキャラメルミルクつくってあげるから」

ヴィヴィオ「うん」

ヴィヴィオとなのはは指切りをして翔はヴィヴィオの頭を撫でへりに乗りこんだ。

スバル「それにしてもヴィヴィオ、ホントに懐いちゃってますね」

ティアナ「全く」

なのは「そうだね、結構厳しく接してるつもりなんだけど」

翔「（何処がだよ・・・）」

なのはの言葉に心の中でツッコム翔。そんなこと言ってる自分もヴィヴィオにかなり優しく接しているのだが

キャロ「きつと分かるんですよなのはさんが優しいって」

翔「あれ？俺は？」

リュウヤ「お前は優しいんじゃないって事だ」

翔「・・・否定出来ない」

そう言い持ってきたコーヒーを飲み

リン「もういつそなのはさんと翔さんの子供にしちゃうとか」

そして思いつ切り吹き出す。リュウヤが呆れた表情をしたのは達は気付かないのかそのまま話を続ける。

なのは「受け入れてくれる家庭探しはまだするよ。良い受け入れ先が見つかってヴィヴィオがそこに行くことを納得してくれれば」

エリオ「納得しない気が・・・」

キャロ「うん・・・」

なのは「ええっ!？」

リュウヤ「・・・納得する光景が浮かばないぞ」

スバル・ティアナ「うん、うん」

なのは「そりやずつと一緒にいられたらうれしいけど、本当に良い行き先が見つかったらちゃんと説得するよ・・・いい子だもん、幸せになつて欲しいから」

翔「・・・」

なのは「まあ、そんな家庭が見つかるまでは私が責任もって守ってくよ。それは絶対に絶対」

スバル「ですね」

エリオ・キャロ「はい」

翔「当たり前だろ」

そんな会話をしながら一同は目的地へ向かっていった。

翔達が地上本部に着いて数時間

翔「そろそろ中入るか」

なのは「そうだね、内部警備の時デバイスは持ちこめないそうだからスバル、レイジングハートの事お願いしていい？」

スバル「あ、はい！」

リュウヤ「俺は外にいるぞ」

翔「おう、分かった」

そして公開意見陳述会は始まったが・・・

翔「……………」

なのは「どうしたの？翔君」

翔「…………いや、なんでもない」

翔はさっきから黙っていた。

翔「（何か・・・嫌な予感がする、とんでもない事が…………）」

このとき翔は知らなかった。その予感が的中してしまうとは

そして公開意見陳述会も終わりに近づいてきたころ
事件は起きた

地上本部が襲撃されたのだった。

翔は本部内をスタッグフォン片手に走っていた。

翔「おいリュウヤ！そっちはどうなってる！」

リュウヤ『とりあえず中に入って敵をぶっ飛ばそうと思ってる』

翔「そうか、コッチはとりあえずシエルと合流を……」『翔！』

翔が前を向くとシエルがこちらに向かって走ってきていた。

翔「リュウヤ、とりあえずコッチは自分達のやり方で敵を討つ！みんなの事頼んだ！」

リュウヤ『分かった。しっかりやれよ』

そう言って電話を切った。

シエル「それで、どう動く？」

翔「まず敵が密集している所に向かおう、そうすれば敵の正体や狙

いとかが分かるかもしれない」

シエル「なるほど、じゃあとりあえず下のほうに行ければ良いんだが・・・全部閉まってると思う」

翔「なら、無理矢理開けるまでだ」

シエル「は!?!」

翔は「ついてこい」と言っとそのまま走りだした。

〽数分後〽

なのは達がエレベータの扉を開けようとした時

翔「うおおお!!」

翔が全速力で走ってきた。そしてエレベーターの扉に向かって

翔「イゝナゝズゝマゝキークク!」

跳び蹴りを放った。

ドゴオン!と言う衝撃と共に扉が破壊され扉が開いた。

そして扉を蹴り飛ばした張本人である翔は蹴り飛ばした勢いで

そのまま下に落ちていった

なのは・フェイト「エエエエ！」

なのはとフェイトはあまりにも衝撃だった為大声を上げて驚いた。そこに後ろからもう一人現れた。

なのは「シエル君！」

シエル「二人とも、僕と翔は先に行つて敵を迎撃する。他のみんなの事は頼んだよ」

なのは「分かった……つて翔君さつき落ちちゃったけど大丈夫かな？」

なのはがかなり心配そうに聞いてきた。

シエル「大丈夫だよ。この高さから飛び降りて死んでたらこれまでもこれからもやっていけないからね」

そしてシエルも破壊された扉の前に立ち翔同様飛び降りた。

なのは「……私達も行こう」

フェイト「うん」

二人は翔達の後を追った。（もちろん飛び降りて無い）

翔「さて、じゃあどうしますか？」

一番下まで降り翔がシエルに言った。

シエル「とりあえず敵の居る方へ進まない」と

翔「そうだな・・・っ！」

シエル「どうした！？翔！」

翔「クソ！こんな時に！」

翔はそう言って走り出した。シエルも翔と共に走り出す。

シエル「翔！まさか！？」

翔「ああ！ドーパントだよ！しかも2体！」

翔はそう言うとスタックフォンを取り出しなのはに連絡した。

翔「なのは、俺達は外に出たドーパントを倒す。すぐに終わらせてくるから」

そう言うと電話を切って現場へ向かった。

アクセル「はあああ！」

リュウヤは変身してアクセルになりガジェットを破壊している。

アクセル「まったく、これだけやっているのにガジェットだけか」

リュウヤはこの襲撃はジェイル・スカリエッティ一味だと思っている。

アクセル「だから、戦闘機人が出てくると思っていたのだが」

他の場所にいるのか、何か狙いがありそこに向かって行動しているのか、リュウヤは分からないが

アクセル「とりあえず、コイツ等ぶっ飛ばしていけばいつか当たるだろ」

そう言いエンジンブレードを構えガジェットに突っ込んでいった。

翔とシエルが外にでると二体のドーパントが暴れていた。翔は発見するなりドライバーを装着し
ジョーカーメモリをとり出す。

翔「早く終わらせるぞ」

シエル「ああ、それなら・・・」

シエルはそう言うと手を前に出す。するとファンゲメモリがシエルの手の平に乗った。

シエル「コレで行こう」

翔「ああ、フルパワーだな」

そう言うと2人の身体が光った。そして光りが収まると目の色が黒になったシエルが立っていた。

これは翔がシエルにユニゾンした状態である。

シエル・翔「『変身!』」

今、戦いが始まるうとしていた。

これから起こる戦いの始まりが

第30話（後書き）

次回はまた遅くなりますがこれからもよろしくお願いします。

第31話(前書き)

投稿遅くなってすみません

第31話どうぞ

第31話

W「『はああああ！！』」

現在Wは2体のドーパントと戦っていた。

バイオレンスドーパントとアームズドーパントだ。

状況は2vs1とWの方がやや不利な状況だが、ファンゲジョーカ
ーはその状況を覆っていた。

W「『ハアアアア！』」

『アームファンゲ』

Wはタクティカルホーンを一回弾きアームセイバーを出現させバイ
オレンスドーパントに斬りかかった。

W「『オラア！』」

バイオレンス「グワア！」

アームズ「テメエ！」

Wがバイオレンスに斬りかかった直後アームズが右腕を銃にして攻
撃してきた・・・しかしWはそれを全部避け、アームズの元へ走り
だした。

W「『ウオオオオオ！』」

アームズ「クッ！」

アームズは背のシールドソードを使い防御しようと構えるが

W「『ハア！』」

Wは右腕でシールドソードを殴り破壊した。

アームズ「なんだと！」

アームズは鉄壁の防除を誇る自身のシールドが破壊されたのに驚き声をあげた。

その際にWは左足でアームズの身体を、思いつ切り吹っ飛ばした。

アームズ「ウワアアア！」

そしてそこにさっきまで倒れていたバイオレンスがWの背後から右腕の鉄球で殴りかかってきた。

バイオレンス「オラアアア！」

バイオレンスはこの攻撃は確実に当たったと思ったが

Wはまるでその攻撃が分かっていたかのように避けアームセイバーで吹き飛ばした。

バイオレンス「ウワアアア！」

アームズ「何故だ！何故俺達の攻撃がまったく通用しない！」

アームズは起きあがるとそう叫んだ。
実際、彼らは一度もWに攻撃を当てられていない。

その理由はただ一つだった。

単純にWが彼らより圧倒的に強い。それだけだった。

しかしそれを認められないドーパント達は二体同時に攻撃してきた。

「ウオオオオオ！！」

それに対してWが取った行動は

W^{シエル}『行くよ！』

W（翔）「ああ！」

『ファンゲ！マキシマムドライブ！』

タクティカルホーンを三回弾いてのファンゲジョーカーのマキシマムドライブ。タクティカルホーンを三回弾くと同時に右脚部にマキシマムセイバーが出現しファンゲメモリのパワーが集約していく。

そして二体に向かって蹴り込む。

W『ファンゲストライザー！！』

『グワアアア！！』

Wの放ったファンゲストライザーは二体のドーパントに直撃し爆発

が起きた。

爆発がおさまると二人の男性と破壊されたメモリが置いてあった。

アクセル「まったく、全然なんにも会わないとはな・・・」

アクセルは地上本部をエンジンブレード片手に歩いていった。

彼はこれまで出会ってきたガジェット（100以上）を一人で全部倒してきたのだった。

アクセル「さて、そろそろ何かあっても良いんだけど」

すると次の瞬間

バン！ドオン！バコオオン！

衝撃音、爆発音、金属音。

そして人の叫び

アクセル「・・・何かあったな」

アクセルはバイクフォームになりその場所へ向かった。

アクセルが場所に向かうとそこはたくさんの残骸とその中で一人涙を流しながら倒れているボロボロのスバルの姿があった。

アクセル「スバル！」

アクセルは変身を解除しリュウヤの姿に戻りスバルに駆け寄る。

リュウヤ「おい、スバル！何があった」

リュウヤが尋ねるもスバルはただ泣くだけだった。

そこになのはとティアナも到着した。

ティアナ「スバル！？」

なのは「リュウヤ君、一体何が・・・」

リュウヤ「分からない・・・」

リュウヤは拳を握りしめながら呟いた。

リュウヤ「アイツ等はなんの為に・・・何が目的で戦うんだ」

メモリの残骸を回収した後、翔とシエルは予想外の情報を手にした。

翔「機動六課が襲撃されてる！？どうゆう事だよ！」

シエル「分からない、アイツ等は何がしたいんだ!？」

翔とシエルは考えたするとそこに謎の声が聞こえてきた。

「その理由、私が教えてあげましょう」

翔とシエルが振り向くとそこにはスーツの若い男が立っていた。

翔「どうゆう事だ。お前はこの事件を起こした奴らの狙いがなんなのか知ってるのか？」

翔は冷静に尋ねた。男はそれに答える。

「まず、この事件を起こしたのはジェイル・スカリエツィ一味だというのは・・・分かってますね。

では機動六課が襲撃された理由はというとまずは一番厄介な戦力の拠点を潰すため。もう一つ、それよりも彼らの計画にとって重要なものがあるからですね」

翔「重要な・・・」

その時、翔の隣にいたシエルが目を見開き硬直している

翔「どうした、シエル!？」

シエル「まさか・・・」

シエルのリアクションを見て笑みを浮かべる男

「気づきましたか・・・しかし君にしては少し遅くないですか？」

シエル「一度だけ見たことあるだけだからね・・・それにしも僕の能力を知ってるってことは」

「ええ、僕はガイアメモリ流通組織の人間です」

それを聞いた翔とシエルは自身のメモリを取り出す。男は笑みを浮かべたまま

「そう警戒しないでください。自分は戦うつもりなどありませんから」

翔「信用出来るか・・・そもそも何がガイアメモリ流通組織だよ。普通に「ミュージアム」っていえば言いだろ」

そう言うと男は少し驚いた表情をした後ふたたび笑みを浮かべ

「ああ、そう言えばまだ言ってますでしたね・・・もうそんな組織は存在しませんよ」

翔「なに!?!」

翔は男の言った言葉に驚く

「あの組織は僕達の偉大なる主が壊滅させましたからね・・・それより早く戻った方が良くないんじゃないですか?」

シエル「そうだ翔!早く六課に戻ろう!」

翔「お、おい!どうゆう事だよ」

シエル「説明は移動中にする！」

そう言った次の瞬間、リボルギャリーが現れボディを展開しホード
ボイルダーが姿を表す。

翔とシエルはそれに跨り六課に向かって出発した。

翔「で、なんなんだアイツ等のねらいは」

翔はハードボイルダーを運転しながら尋ねた。後ろのシエルはそれ
に答える。

シエル「昔、一度だけベルカの王の事について書いてある本を読ん
だことがある」

翔「……」

翔は、その話を黙って聞いていた。シエルは続けて言う。

シエル「その本には当時のベルカの王についてかなり詳しく書いて
あった。聖王教会の資料にでもなりそうなくらいね」

翔「……それで？」

シエル「……その中に“聖王”という項目があつてね……君も
知ってるだろう。有名な王だ」

翔「ああ・・・」

翔は頷いた。

シエル「そしてその聖王の特徴は・・・」

シエル「金髪で右目が緑、左目が赤のオッドアイだった」

翔「なっ!!」

翔はかなり驚いた表情をし声を発した。

確かにそれはヴィヴィオにも当てはまる事だった。つまり・・・

翔「ヴィヴィオは聖王のクローンって事かよ！」

シエル「ああ！そしてスカリエッティは自身の計画に聖王の血を持つ者が必要なんだ！だからヴィヴィオを手に入れる為に六課を襲撃したんだ！」

翔「ちくしょう!!」

翔はハードボイルダーの速度を上げた。

1秒でも早く六課に着くように

翔とシエルが六課の場所に着くとそこには以前の六課は無くあったのは炎に包まれ変わり果てた六課があった。

翔「・・・マジかよ」

翔はその光景に思わずその言葉を漏らす。シエルも目の前の状況に驚いていた。

翔は辺りを見渡しながらシエルに尋ねる

翔「・・・シエル」

シエル「今調べてるけどあまり希望は持つなよ」

翔「分かってる」

そして数分後シエルが翔に近づき言う

シエル「翔、サーチを試してみたけどヴィヴィオの反応は無かった」

翔「・・・そうか」

翔が答える。その直後いきなり画面が現れジェイル・スカリエツテイの顔が映された。

スカリエツテイ「いやあ、始めまして高宮翔君、そしてシエル君」

翔「・・・なんか用か」

スカリエツティ「ずいぶん冷静だね、私の予想では君は僕に怒りの表情を見せると思っていたのだが」

翔「そうか、予想が外れて残念だったな」

翔が自分の予想と違った言動を取った事にどう思ったのか笑い出すスカリエツティ。

スカリエツティ「フハハハハ！素晴らしい！やっぱり君は素晴らしいよ高宮翔君。さすが『ミュージアム』の切り札・・・ジョーカーと呼ばれていた存在だ」

スカリエツティが自身の事をここまで知っていたのは予想外だった。翔は少し驚いたが顔には出さなかった。

翔「で、なんか用か？」

翔が尋ねるとスカリエツティが笑いながら

スカリエツティ「ああ、君に一つ提案がある・・・私と手を結ばないかい？」

翔はその台詞に啞然とした。まさかそんな事言うなんて

翔「・・・なんで？」

その問いにスカリエツティは笑みを浮かべたまま

スカリエツティ「君に教えてあげよう。実は管理局はガイアメモリの流通に手を貸していたのだよ」

翔「何!？」

続けてスカリエツティが言う

スカリエツティ「それだけではない、ガイアメモリの制作、実験にも協力し利益の一部を貰っていたのだよ」

翔「……」

スカリエツティ「君はガイアメモリに関わる人間が憎いだろ？自分をそんな身体にした人間を殺したいだろ？なら、私と共に来るかい。君の復讐に力を貸そう」

翔「……」

その言葉に翔は無言のままだったがやがて口を開け言った。

翔「確かに俺は憎かった。こんな身体にした奴、家族を殺した奴、全部壊してやりたかった、殺してやりたかった」

でも……と翔は続ける。

翔「アイツ等を殺しても昔の自分には戻れない、誰も帰って来ない」

翔は言葉を続ける

翔「だから俺は誰も殺さない。アイツ等の企みを潰してメモリも全部破壊して罪を数えさせる。それが俺のすべき事だ！」

翔はそう言つと拳を握り思いっ切り地面を殴りつけた

すると半径3〜4メートルの地面はヒビがはいり割れている部分もあつた。

そして目の色を紅くした高宮翔はこう言つた。

翔「そして、俺が・・・俺達がお前の野望を止めて罪を数えさせてやる！」

これから大きな戦いが始まるうとしていた

仮面ライダーと魔導士達の大きな戦いが

高宮翔達の壮絶な物語が

第31話(後書き)

あとがきはありません

第32話(前書き)

第32話(つづ)

第32話

時空管理局本局

そこにマリナ・アークライトが使っている部屋が1つだけある。ちなみにその部屋は上層部の人間を脅して使っているのだが・・・今はそんな話はどうでもいいのだが、その部屋に高宮翔がきていた。

翔「で、なんだよ話って」

マリナ「いやあくトンデモ無い事になってるから呼んでみた」

翔「なんだよその理由」

そう言いながらもソファに座りマリナの要件を聞くことにした。

マリナ「大変な事になってるわね」

翔「ああ、全くだ」

翔がそう言った後、マリナは席を立ち翔に背を向けて言った。

マリナ「・・・ねえ」

翔「ん？」

マリナ「今のWでスカリエッティに勝てる？」

翔「・・・」

翔は一瞬考え視線をマリナの方に持っていき言った。

翔「アイツ等がヴィヴィオをどう利用によるな」

マリナ「それなら大体分かってる」

そう言い翔の前に一枚の紙を置いた。翔はそれを読む。

翔「・・・聖王の・・・ゆりかご・・・」

翔はその紙を全部読むと机の上に置いた。

翔「なるほど、これの為に聖王のクローン・・・ヴィヴィオを生みだし」

マリナ「これを動かしミッドチルドや他の世界も崩壊させるのが目的だと思う」

それを聞いた翔はおもいつきり机を殴り静かに呟いた。

翔「・・・ふざけんなよ・・・」

マリナ「本当ね・・・で、今のWでゆりかご墮とせる?」

翔「・・・」

翔はその問いに無言になる。それは多分無理だ。そう考えていた。

マリナ「無言って事は無理って思ってる事よねえ」

翔「・・・ああ、無理だな」

翔のその言葉を聞くとマリナは引き出しの中から一つの箱を取り出した。

翔「な!!」

その箱を見て翔は驚きの表情をした。マリナはその表情を見て「やれやれ」といった顔で

マリナ「別に使うかわらないかは翔の判断に任せるわ」

翔「・・・だけど」

マリナ「大丈夫よ、ソレだって分かってるわよ。自分と一緒に戦う仲間の事ちゃんと信じなさい」

翔「・・・」

翔は箱を持って無言で外にでた。

翔が持っていた箱

それには「X T R E M E」と書かれていた。

翔「・・・」

翔はミッドチルダで以前借りたままにしていた部屋に居た。
今は一人、誰もいない。

そこで翔は箱を開けた。

そこには機械の鳥が入っていた。その鳥に翔は手を触れる。すると

【起動】

と言う音と共に機械の鳥の目に光が宿り鳥が浮いた。

翔「……久しぶりだな、エクストリーム」

機械の鳥「……エクストリームメモリ」が翔の言葉を返す。

エクストリーム【ホント久しぶりですね。会いたかったですよ私のマスター】

翔「本当かよ？」

エクストリーム【本当ですよ。私はマスターの事大好きですから】

その言葉は翔に棘のように刺さった。

翔は少し声を震わせエクストリームに尋ねた。

翔「……なんでそんな事言えるんだ？」

エクストリーム【そんな事？】

エクストリームは翔が言った言葉の意味が分からなかった。翔は続けて言う。

翔「本当のことだよ。お前、俺の事嫌いだよ」

そう言うがエクストリームは・・・

エクストリーム【全然嫌いじゃないですよ。むしろ大好きです】

翔はその言葉を聞いて「なんで・・・」と呟く。

その言葉を聞いたエクストリームは

エクストリーム【まだ、あのコト気にしてるんですか。確かにあの暴走はマスターの精神面が悪かったと言うの一番の原因ですが。制御出来なかった私も悪いですしあんなのただの不幸な事故ですよ気にすることありません】

翔「・・・」

翔はエクストリームの言葉を黙って聞いていた。そしてしばらくすると翔が口を開きエクストリームに話始めた。

翔「エクストリーム、俺な大切な人たくさん出来たんだぜ。あのとキといろんな事が変わったんだ」

エクストリーム【・・・】

翔「俺その人達の事絶対守りたいんだ・・・その為にはお前の力が必要なんだ。確かに俺、お前の事暴走させたりしちゃったけど・・・お願い一度だけで良い俺に大切な人を守る力を貸してくれ」

翔はエクストリームにそう言った。するとエクストリームは翔に近づき一言こう言った。

【もちろんですマスター】

その日の夜、翔は屋上に来ていた。

色々な事が起きて少し混乱してるから星でも見て落ち着こうそう思ったからだ

そこには先客がいた。

翔「・・・何してんだ」

そこにいた先客はなのはだった。

なのは「翔・・・君」

翔はなのはの隣に立ち言った。

翔「・・・ヴィヴィオの事考えてたな」

なのは「・・・うん、約束破っちゃったなって・・・」

二人は少しの間無言だったがしばらくしてからなのはが言葉を発した。

なのは「・・・私がママの代わりだよって、守っていくよって約束したのに傍に居てあげられなかった
守ってあげられなかった・・・あの子、きっと泣いてる」

なのははそう言いながら涙を流した。翔は静かにゆっくりとなのはを抱き寄せた。

なのは「ヴィヴィオが一人で泣いてるって悲しい思いとか痛い思いしてるかもって思うと身体が震えてどうにかなりそうなの！」

翔「・・・」

翔はなのはの言葉を抱きしめながら黙って聞いていた。

なのは「今すぐ助けに行きたい！だけど、私は・・・」

翔「大丈夫・・・大丈夫だよ」

翔はなのはを抱きしめながら言った。

翔「絶対助けよう、俺達の力で」

第32話(後書き)

後書きはありません

第33話（前書き）

話があまり進んでない

第33話どうぞ！

第33話

次元航行艦船アースラ、現在翔はその中にいた。

機動六課はここを本拠地にしてジェイル・スカリエツィ一味を制圧しに向かう。

六課のメンバーもそれぞれ決戦に向けて準備していた。

翔「さて、俺も色々準備しますか」

翔の準備・・・と言ってもメモリとドライバーの点検と整備だけだ。

翔は自身のメモリとWドライバーを取り出す。

ジョーカー、メタル、トリガー、そして・・・

翔「エクストリーム・・・」

一つの箱を取り出しそうつぶやいた。

そして箱を開けようとした時、部屋に誰かが入ってきた。

マリナ「よっ」

マリナだった。

翔「ああ、みんなはどうしてる？」

マリナ「ん、皆さん準備完了らしいよ」

翔「そつか・・・」

そう言っつて立ち上がった。

翔「それじゃあ行くか！」

そう言い翔はみんなが居る場所へ向かった。

翔が行くとすでに全員揃っていた。

機動六課の前線メンバー、リュウヤ、そしてシエル

これまで色々な問題を一緒に解決し戦ってきた仲間、全員の顔を見て翔は言った。

翔「行くぞ！！」

そして今、機動六課、仮面ライダーvsジェイルスカリエティームの戦いが始まった。

翔「なあ、シエル君」

シエル『なんだい相棒』

翔「どうしてあの人達はバリアジャケット展開せずに飛び降りたのでしょう!？」

シエル『僕が知りたい』

翔がシエルとユニゾンしWドライバーを取り出すのと同時になのは、フェイト、はやて、ヴィータが飛び降りたのだった。

アクセル「まったく、敵がどこから狙ってくるか分からないのに」

翔の隣にアクセルに変身したりユウヤが現れた。バイクフォームでタービュラーユニットを装着していた。

何故かというとりユウヤは陸戦魔導士なので空は飛べないのだった。

翔「とりあえず、先行ってるぜ。場所分かるな!」

アクセル「当たり前だ!」

そう言い翔はなのは達の元へ向かった。

翔「んじゃそろそろこっちも行くか!」

ドライバーを装着し二本のメモリを取り出す。

翔・シエル「『変身!』」

【サイクロン!】

【ジョーカー！】

二本のメモリを挿入しバツクルを展開した。

【サイクロン・ジョーカー！】

W「『うおおおお！』」

Wは竜巻を纏い飛んでいった。

そして先に到着したなのは達がゆりかご周辺のガジェットと対峙している時

巨大な竜巻がいきなり出現した。

はやて「な、なんやアレ……！」

はやてが驚いていると一つの電子音が聞こえた。

【サイクロン！マキシマムドライブ！】

はやて「ま……まさか」

はやてがそう言った途端竜巻がいきなり一点に圧縮され球状になった。

そしてその竜巻の球を持っているのは……Wだった。

W「サイクロン・スパイラル！」

Wはそう叫び竜巻の球を投げた。

そしてガジェットの大群に当たり爆発した。

ドガアアアアン！

Wの一撃で約70のガジェットが破壊されてしまった。

W（翔）「さあてちよつくら準備運動と行きますか、なのはとヴィー
ータ、先行つてろ」

なのは「・・・うん、分かった」

ヴィーータ「早く来いよ」

そう言うてなのはとヴィーータは進入できそうな地点へ向かった。

W^{シエル}「さあ行こうか」

W（翔）「ああ！」

【サイクロン・メタル！】

Wは風をまとわせたメタルシャフトでガジェットの大群に向かっていき破壊していった。

W（翔）「次はコイツだ」

【ルナ・メタル！】

次にWはメタルシャフトをムチの様に振り次々とガジェットを破壊した。

W^{シエル} 『まだだよ』

【ルナ・ジョーカー！】

右手、右足を自由に伸ばしガジェットを一体、一体壊していく

W^{シエル} 『更に！』

【ヒート・ジョーカー！】

近づいて来たガジェット達を炎を纏った右手で次々壊し

W（翔） 「もういっちょう！」

【ヒート・トリガー！】

炎の弾丸を何発も打ち出していき

W（翔） 「次い！」

【サイクロン・トリガー！】

風の弾丸を連続発射し次々にガジェットを破壊していく

W^{シエル} 『はああー！』

【ヒート・メタル！】

炎を纏ったメタルシャフトを振り回しガジェットを破壊

W（翔）「うおりゃああ！」

【ルナ・トリガー】

不規則な弾丸が次々にガジェットを撃ち落としていった。

W「ラスト！」

【サイクロン・ジョーカー！】

【ジョーカー！マキシマムドライブ！】

W「ジョーカーエクストリーム！」

Wはゆりかごに向かってジョーカーエクストリームを放った。

途中でたくさんのガジェットがWを止めようとしていたが関係無くWはガジェットを破壊しながらゆりかごを攻撃し穴を開け中に入っていた。

それを見ていたはやては

はやて「・・・ホント、トンデモない力やな」

そう呟いたのだった。

ゆりかご内部

W（翔）「さて、到着」

W^{シエル}「それじゃあ行くところか」

そう言い自分たちの目的を果たす為に走った。

ジェイルスカリエッティのアジト

リュウヤ「ここか・・・」

フェイト「うん・・・」

スカリエッティのアジトの前でそう言った

リュウヤ「・・・アイツを早く捕まえて終わらせるぞ」

フェイト「うん」

リュウヤ達はスカリエッティのアジトへ入っていった。

続く

第33話（後書き）

フォ「次回リュウヤ大活躍！」

リュウヤ「何!?!」

フォ「だと思っ」

リュウヤ「はつきりしろ！」

フォ「宇宙キター！」

リュウヤ「おい！」

翔「・・・作者がいきなりフォーゼにはまっていますけど放って置いて」

シエル「次回も見て下さい」

第34話(前書き)

リュウヤ大活躍

第34話どうぞ！

第34話

バキ！バキ！バキバキ！

何かを壊す音が聞こえる

その音は何かを引きずる音

まるで重い物を引きずって歩き地面を抉ってる音

その音の正体は

フェイト「あの・・・リュウヤ？」

リュウヤ「ん？どうかしたか？」

フェイト「なんでエンジンブレード引きずってるの？」

現在リュウヤ、フェイト、シャツハの三人がスカリエッティのアジトの内部にいた。

リュウヤ「エンジンブレード、この戦いの為に改良したんだ・・・」

フェイト「うん」

リュウヤ「重量、変身時の使いやすさ、切れ味・・・色々やってたらデバイスみたいに待機状態に出来なくなってるこんな感じになった」

フェイト「そ、そうなんだ」

フェイトはそれを聞いて笑う事以外のリアクションを取ることが出来なかった。

そんな中シャツハは真面目な感じで言う。

シャツハ「そんな大きい音を出していると進入されたのが気付かれるのでは？」

そう言ったシャツハを見てリュウヤは

リュウヤ「問題ない・・・もう気付かれてる」

その言葉にフェイトとシャツハは「え？」と声を発した。

リュウヤ「もう気付かれてる。あの変態が他人に自分の本拠地に入られたのぐらい分かんなかったらこんなデカイ事件起こさないさ」

フェイト「でも、それだったらすぐにガジェットや戦闘機人が・・・

」

リュウヤ「そうゆう作戦だろうな。多分そろそろ動く」

すると突然シャツハの足が何かに捕まれた。

フェイト「シスター！」

リュウヤ「何だ!?!」

二人が驚いているとブーメランの様なものが飛んできた。

それを避けると目の前に二人の女性が立っていた。

戦闘機人、ナンバーズのトーレとセツテだった。

トーレ「フェイトお嬢様、こちらにいらしたのは帰還ですか？それとも反逆ですか？」

それに対してフェイトは

フェイト「どっちも違う犯罪者の逮捕・・・それだけだ」

リュウヤ「嫌だったら抹殺でもいいぜ？」

リュウヤの言葉には誰もつっこまなかった。

W（翔）「つし、潜入成功！」

Wはゆりかご内部にいた。

上空には穴が空いている。

Wのジョーカーエクストリームで破壊した穴だ。

W（翔）「さて、確かここからだといよいよの場所に近いなんだよな？」

W^{シエル}『……………』

W（翔） 「どうした？シエル」

W^{シエル} 『翔、予想外の事が起きた』

W（翔） 「は？」

シエルの言葉に驚く翔

W（翔） 「な、何が起きたんだ!？」

W^{シエル} 『実はさっきのジョーカーエクストリームが予想より強すぎて・・・』

W（翔） 「強すぎて?」

W^{シエル} 『予想着地地点と大幅に違う場所にきてしまった』

W（翔） 「・・・マジでー」

そう言っただけだったりするW

W^{シエル} 『とりあえずここから目的の場所に向かって行く』

W（翔） 「・・・ああ」

そしてWは走りだした。

そのころスカリエッツィのアジト

フェイト、リュウヤがトーレ、セツテと戦っていた。

アクセル「くらえ！」

セツテ「はぁ！」

セツテがブーメランブレードを使い攻撃してくるのをアクセルはエンジンブレードで受けながら攻撃していく。

フェイトもトーレと激しい攻防を繰り返していた。

アクセル「フェイト、AMF大丈夫か!？」

フェイト「少し・・・キツイ。早く倒して先に行かないといけないのに」

二人が並んで会話をしているといきなり通信画面が出現しスカリエッツィの顔が現れた。

スカリエッツィ「やあ、ごきげんよう。フェイト・テストロッタ執務官、それとリュウヤ・アー「いくぜ!」・・・」

リュウヤはスカリエッツィの登場を無視して走り出した。

スカリエッツィ「・・・」

まだ何か言いたそうだったスカリエッティが黙った。

アクセルはただひたすらエンジンブレードを振るい戦っていた。

フェイトがスカリエッティと何か言い争っているが関係無い

アクセル・・・リュウヤはただ戦う

それが今のリュウヤに出来るただ一つの事

リュウヤにはすぐ守りたい人や夢も戦う意味なんてものもないし
無い。

だから・・・

アクセル「（俺はみんなの守りたい人をみんなの夢を守る！それが
今の俺に出来る事だ！）」

『エンジン！』

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリを挿入しエンジンブ
レードにエネルギーをためる。

アクセル「ハアアアア！」

そしてそれを放とうとしたその時

スカリエッティ「そこまでだよ。こちらを見てご覧」

アクセル「っ！」

アクセルがスカリエッツィの指した方を見るとフェイトがスカリエッツィの力で束縛されていた。

W（翔）「うらあああ！」

Wはガジェットを倒しながら前に進んでいく

W^{シエル}「よく、これほど数を揃えたものだね」

W（翔）「どうでもいいし数なんて」

【ビート・トリガー】

W（翔）「どんだけ数がいようと」

【トリガー！マキシマムドライブ！】

W（翔）「敵がどれだけ強かろうと」

W（翔）「関係ねえ！」

ドオオオン！

ヒートトリガーのマキシマムドライブ、トリガーエクスプローションで多くのガジェットを破壊した。

W（翔）「・・・俺はアイツ等を守ると心に誓った。だから助けるまで絶対に負けない」

リュウヤは今、フェイト同様にスカリエッツティにより束縛されていた。

スカリエッツティ「以前、トーレが言っただろ、君と私は親子のようなものだ」と

スカリエッツティがフェイトに語る。リュウヤには全く関係無い事なのでさほど聞く耳を持ってはいなかった。

スカリエッツティ「君と私はよく似ているんだよ。私は自分で作り上げた生体兵器達、君は自分で見つけた自分反抗出来ない子供達」

スカリエッツティは続ける

スカリエッツティ「それを自分の思うように作り上げ自分の目的の為に使っている」

リュウヤ「・・・」

フェイト「黙れ！」

スカリエッツィの発言に叫びながら攻撃するフェイト。しかし全て防がれる。

スカリエッツィ「違うかな？君もあの子達に自分に逆らわないように教え戦わせているだろう？私がそうだし君の母親も同じさ」

リュウヤ「……………」

リュウヤは自分の手に力が入ってるのを感じた。

自分は今、自分で押さえられない程の怒りを感じ始めているのだと。

スカリエッツィ「周りの全ての人間は自分の為の道具にすぎない。そのくせ君達は自分に向けられる愛情が薄れるのには臆病だ」

誰も気付かないくらい静かにゆっくり剣を抜く
もう充分だ。

恨みや憎しみはない

ただ、目で苦しんでいる人がいる。
悲しんでいる人がいる

それだけで十分だ

戦う理由になる。力になる

戦士はそれだけで戦える

スカリエッツィ「間違いを犯す事に怯え薄い絆にすがって震えそんな人生など無意味だと思わんか？」

ゴオオオオ!

スカリエツテイ「な!？」

フェイト「え!？」

その場の全員が突然の事態に驚いた。

いきなり灼熱の炎がこの場を支配したからだ。

そしてその中心にいる人物は

フェイト「リュウ・・・ヤ？」

リュウヤはただエンジンブレードを構え言う

リュウヤ「人は臆病で弱い生き物だ」

一歩、一歩踏みだし

リュウヤ「一人では何も出来なくて人との繋がりをひたすら求めて足掻いてる愚かな生き物だ」

スカリエツテイ「その通」だが!」・・・？」

リュウヤ「繋がりが・・・絆が人を強くする」

リュウヤ「フェイトは一度大切な大きな絆を失った。だけど、その分大きな優しい新しい絆を手に入れたそして強くなった!」

フェイト「……………」

リュウヤ「だから、絆……人との繋がりの大切さを知ってる。絆の意味を知ってる……だから絶対間違わない！」

フェイト「リュウヤ……」

リュウヤ「もし、間違ったら俺がぶん殴っても止めてやる」

フェイトの方を見て言うリュウヤ

フェイト「……………うん」

そしてアクセルメモリを取り出し

リュウヤ「スカリエッティ……テメエは此処で燃え散れ」

【アクセル！】

リュウヤ「変……身！」

t o b e c o n t i n u e d

第34話（後書き）

マリナ「宇宙キター！」

翔「今、関係ねえし」

シエル「リュウヤ、次回大活躍っばいね」

マリナ「もう活躍今回でいいんじゃない？」

翔「駄目だろ」

シエル「ところでリュウヤが放出していたのはなんなんだ」

マリナ「次回で分かるよ」

翔「サオン＝ブレーズとかじゃね」

シエル「（絶対違うから）」

マリナ「・・・いいぜテメエがそのネタを使いたいなら」

ピカアア！

翔「光った！」

マリナ「マリナ百式が相手よ」

翔「なあああ！」

マリナ「マリナ百式百蓮華!!」

翔「ギャアアア!!」

シエル「次回も見てください」

フォ「あれ? 出番は!？」

第35話(前書き)

アクセルがすんごく振り切る35話見てください。

第35話

リユウヤは炎を纏いながらスカリエッティに近づいていきながら
アクセルドライバーにアクセルメモリを挿入しスロットルを捻った。

【アクセル！】

アクセル「全て・・・振り切るぜ！」

そう叫びアクセルはスカリエッティとの一気に詰める為走る
しかしその前にトーレ、セツテが立ちふさがる。

セツテ「IS・スローターアームズ」

セツテがブーメランブレードで応戦しようとしたが

アクセル「はあ！」

一瞬でアクセルの炎がセツテを包む

セツテ「なっ!?!」

アクセル「くらえ！」

【エンジン！マキシマムドライブ！】

アクセル「はああああ！」

エンジンブレードからA字型のエネルギー刃、エーススラッシャー

をセツテに射出した。

セツテ「うわあああ！」

エースシュラッシャーが直撃しセツテがふき飛び気を失った。それと同時にトーレがアクセルに向かって走り出した。

トーレ「IS、ライドインパルス！」

トーレは高速移動能力「ライドインパルス」を使ってアクセルを攻めていく

アクセル「この！」

アクセルは炎とエンジンブレードで対向するがトーレの速さについていけない。

アクセル「ぐわあ！」

アクセルは一方的に攻撃を受けていく

フェイト「リュウヤ！」

その後もリュウヤは攻撃を受け続け後ろへ下がっていく。

アクセル「ぐっ・・・」

トーレ「終わりだ！」

トーレが攻撃仕かけようとしたその時

アクセル「お前がな！」

トーレ「何！？」

気がつくともアクセルの炎がトーレの身体を拘束していた。

トーレ「何時の間に・・・」

アクセル「お前は高速移動が得意だからな普通に炎や剣で攻撃しても避けられると思っていた、だから少しずつ炎を近づけていったんだ」

トーレ「なっ！」

アクセル「行くぜ！」

【エンジン！マキシマムドライブ！】

アクセル「はああああ！！！」

アクセルはエンジンブレードでA字型に切り裂く「ダイナミックエース」でトーレを切り裂く

トーレ「うわあああ！！！」

トーレはその場に膝をついて倒れた。

アクセル「さあ、スカリエッツィ後はお前だけだ」

アクセルはエンジンブレード、フェイトはバルディッシュを構える

スカリエツティ「……まさか私がここまで追いつめられるとは……」

スカリエツティはそう言ったが表情は笑っていた

アクセル「余裕そうだな」

スカリエツティ「いや、余裕ではないよ。こちらの最終手段を使う事になってしまったのだから」

そう言いスカリエツティは懐からガイアメモリを取り出した

フェイト「ガイアメモリ！」

スカリエツティ「そう、そしてこの力で相手をしよう」

【サイバー！】

そして自身のコネクタに挿入しスカリエツティはサイバードパントとなった。

サイバー「さあ、どこからでも来るといい」

アクセル「そうさせてもらおう」

アクセルは走り出しエンジンブレードで切ろうとした……しかし

キーン！

サイバー「そんなものかい？」

アクセル「何！？」

アクセルの攻撃はどこから出したのか謎の盾によって防がれていた。

アクセル「くっ・・・」

サイバー「知りたいかい？この盾がどこからでてきたか？」

アクセルが一度サイバーから離れると盾が消えた。

アクセル「なっ！？」

サイバー「サイバーメモリの能力はデータ化された色々な武器を使う事が出来るのだよ」

アクセル「ちっ厄介だな」

サイバー「ああ、そうさこうゆう事も可能だからね」

サイバーは数々の兵器を出現させた。

サイバー「終わりだ！」

そしてその全部がアクセルに向けて発射された。

アクセル「ぐわあああ！！！」

フェイト「リユウヤー!!」

サイバーが全ての攻撃をし終わり煙が晴れると倒れているアクセルがいた。

アクセル「ぐっ……」

サイバー「ほう、炎でダメージを軽減させたか。だがもう君に戦える力は残っていない」

アクセル「まだ……まだだ!」

サイバー「いや、終わりだ!」

サイバーがナイフを出現させアクセルに刺そうとした……が

フェイトがバルディッシュで防ぐ

フェイト「リユウヤはやらせない!」

サイバー「よく防いだものだね……だが!」

サイバーの腕に大きい銃が出現しフェイトに銃口を向けた。

サイバー「その行いは無意味さ」

そして引き金を引こうとしたその時

アクセルがサイバーを蹴り飛ばした。

サイバー「な!？」

アクセル「お前の相手は俺だろ？」

アクセルはそう言いサイバーの前に立つ

サイバー「君も頑張るね、勝てる確率なんてほとんどないのに」

アクセル「・・・どうかな」

アクセルはある物を取り出した。それは信号機とストップウォッチの様なものがついたガイアメモリ・
トリアルメモリだった。

アクセル「いくぜ!」

【トリアル!】

アクセルはアクセルドライバーにトリアルメモリを挿入しスロットルを捻った。するとメモリの信号機が黄色になりアクセルのスイッチも黄色になった。そして信号の色が青になるとアクセルの装甲がはじけ飛んで青色でオレンジの複眼のアクセルトリアルになった。

アクセル「こっからが本番だ!」

サイバー「姿が変わっても私には勝てないさ」

サイバーはミサイルを幾つも出現させ発射した。

アクセル「ふっ!!」

それをアクセルTは全弾避けた。

サイバー「何!？」

アクセルT「見せてやる。トライアルの力を！」

アクセルTはトリアルメモリをドライバーから抜きマキシмумモ
ードにしスイッチを押し上空に投げた。

そして最大加速でサイバーに近づきTの字を書くように蹴り込んで
いく

アクセルT「はあああああ!！」

サイバー「ぐ、ぐわあああ!！」

最初は全然効いてなかったサイバーも攻撃が続くにつれダメージを
受けていく。反撃をしようとしたがアクセルTの速さに武器を出
現させる事が出来なかった。

そしてメモリが落ちてくると同時に攻撃を止めメモリをキャ
ッチしメモリのスイッチを押した。

【トリアル!マキシмумドライブ!】

これがアクセルTのマキシмумドライブ「マシンガンスパイク」1
0秒間の間で敵に高速で蹴り続ける技だ。

アクセルT「9.8秒それがお前の絶望までのタイムだ」

サイバー「ぐ、アアアアア！」

サイバーは叫び声と共に爆発した。爆発が収まると壊れたメモリと気絶しているスカリエツティがいた。

アクセル「ハア・・・ハア」

アクセルはドライバーを外し・・・倒れた。

フェイト「リュウヤ!?」

フェイトはリュウヤのもとへ駆け寄る。

フェイト「リュウヤ！リュウヤ！しっかりして！」

リュウヤの身体はすごく熱くなっていてフェイトがリュウヤに何度も呼びかけるがリュウヤはただ呻っているだけだった。

フェイト「どうしよう・・・とりあえず早く病院に・・・」

「その必要はないわよそれぐらいでそんな焦んなくても」

フェイトが声のした方を見るとそこにはリュウヤの姉、マリナ・アークライトがいた。

フェイト「マリナさん・・・」

マリナ「これはリュウヤの特殊体質の様なもの・・・大気中の物質を炎にすることが出来るの」

フェイト「そんな事が……」

マリナ「それでその力を使うとこんな風に高熱がでるとゆうわけ」

フェイト「そうなんですか……」

マリナ「でも大丈夫よ、リュウヤが本当に危険になったら……
体何も残ってなかったと思うし」

フェイト「え!?!」

マリナ「とりあえずここで医療班の到着を待ちましょう」

フェイト「……はい」

フェイトとリュウヤ……仮面ライダーアクセルの戦いは終わった

第35話（後書き）

翔「ムービーたいせーんメガマークス」

シエル「Wが出るね（予告を見ると）」

マリナ「DOG DAYSの二期がやるらしいしね」

翔「ギター 姫さm」

ピンク色の何かにより翔はログアウトしました。

マリナ「残念ね、セブンの息子にでもなって出直しなさい」

翔「それは無理っす」

シエル「次回僕達が大活躍」

翔「張り切って行くぜ！」

マリナ「がんばれー」

フォ「頑張るかー」

第36話(前書き)

めっさ久しぶりの投稿です

見てください

第36話

アクセルがスカリエッティのアジトで戦闘している頃
Wはゆりかご内でガジェットを倒しながら前へ進んでいた。

W（翔）「ったくよ！全然前に進めねえ！」

W^{シエル}「だが、確実に前に進んでる。大丈夫だ！」

そして先を急ぐ為走りだした時、膨大な魔力を感じた。

W（翔）「な、なんだこれ!？」

W^{シエル}「一体誰の魔力なんだ?」

そう言いWは前を見た。そして思いつ切り走りだした。

今起ころうとしている事を止める為

一方なのははある部屋でクアットロによって聖王の力を解放したヴィ
イヴィオと戦っていた。

なのははアクセルシューターやバインドを使って攻撃をするもヴィ
ヴィオはバインドを引きちぎりアクセルシューターも相殺されてし
まった。

なのは「くっ……このままじゃ厳しい……」

ヴィヴィオと距離を取ってなのはがそう言った。

なのはは現在ブラスターシステムリミット2を使用している。ブラスターシステムはなのはの魔力を引き上げるシステムで強力だがなのはの身体にかなりの負担がかかってしまう。

ブラスタービットと呼ばれるビットを使って攻撃力等を補助してるがそれでも状況はあまり良くない

なのは「（でも……諦めない。ヴィヴィオを助けるまで絶対!）」

そう言ってレイジングハートを構え戦闘を再会した。

W（翔）「ああ！なんでこんな道長いんだよ！」

W^{シエル}『確かに……』

Wは未だにゆりかごの通路を走っていた。

W^{シエル}『どうする？このままじゃちょっとピンチだよ。飛んでもそれほど速くないし……』

シエルの問いに翔は一瞬黙り込んで何かを決意したかの様に言った。

W（翔）「……アレを使う」

W^{シエル}『アレ？』

W（翔）「ああ・・・」

そう言い左手にスタッグフォンを構え

W（翔）「リボルギャリーの隠された能力を使う時が・・・」

ゆりかご最深部

そこでクアットロがゆりかご内の状況を見ていた。

クアットロ「くっ・・・まさか駆動炉が壊されるなんて」

クアットロは今苛立っていた。理由は駆動炉がヴィータによって壊されたからである。これによってゆりかごの速度が格段に落ちてしまった。

クアットロ「でも、軌道上に上がればなんの問題もない！フフ・・・これで私の計画の達成も・・・」

その時

最深部の壁が破壊された。

翔「うおおおおりゃあああ！」

壁を破壊したのはハードボイルダーに乗った翔とシエルそしてリボ

ルギヤリーだった。

翔「ふう、なんとかうまくいったな」

シエル「でもまさかりボルギヤリーにブースター機能がついてるなんて……」

翔「俺もこの前初めて知ったし」

そんな会話を二人がしているとクアットロが言葉を漏らす。

クアットロ「な、なんでこの場所が……」

その問いにシエルが答えた。

シエル「僕にかかればゆりかご内部で一番隠れるのに最適で見つかりにくい場所を探し出すなんて簡単な事さ」

クアットロ「な!?!」

そして翔が一步前にでてクアットロをにらみつけながら言った。

翔「お前は俺の大切な人を傷つけた。それだけじゃねえ、お前は・
・お前達は私欲で毎日を生懸命生きてる人達に恐怖を与え傷つけた。その罪決して軽いものではない」

そしてガイアメモリを取り出した。

翔「覚悟しろ。こっちは内心かなりキレてるから」

今、Wとクアットロの戦いが始まるようとしていた。

第36話（後書き）

フォ「ゼノン・・・起動!!」

翔「壊れた？」

シエル「ダンボール戦機にハマったらしい」

フォ「JETストライカー!!」

リュウヤ「暇さえあればやってたからな」

フォ「いっけーオーデイン!!」

翔「こつちを早く更新しろよな」

フォ「そしてイプシローーン!!」

三人「」「黙れ!!」「」

フォ「ブフォ！」

翔「ってかコイツダンボール戦機ブースト買うつもりだぞ！」

シエリ「クラヒはどうするつもりだ!？」

リュウヤ「ってかなのはポータブルもあるんだよな」

フォ「フ・・・フフフ・・・」

翔「ど、どうした？」

シエル「まさか、何か考えが！？」

フォ「お前等に一つ言っけて置く」

三人「」「」「」

フォ「俺さ、あと武装神姫ってゲームも欲しいんだよね。おもしろそうだし」

三人「」「」「」

フォ「どうしようかな」(笑)

三人「」「(駄目だコイツ早くなんとかしないと！)」「」

37話もすぐ投稿します

第37話（前書き）

第37話

遂にWがアレになります。

第37話

ゆりかご最深部

そこで翔、シエルは戦闘機人のクアットロとの戦いを始めようとしていた。

翔「いくぜ！」

先に動いたのは翔だった。すばやくドライバーにジョーカーメモリを挿入した。すでに右スロットにはサイクロンメモリが入ってる為そのままバツクルを展開した。

クアットロ「くっ！」

クアットロは変身が完了する前に攻撃を仕かけるが翔の身体を包む突風により全て弾かれた。

【サイクロン・ジョーカー！】

そしてWサイクロンジョーカーになりそのままクアットロに向かって走っていく

W（翔）「ウオオオオオオオ！」

しかしクアットロの元へ向かうWの前に大量のガジェットが現れる。

W（翔）「ちっ！」

Wは現れたガジェットを次々に蹴り飛ばしていくが数が減らない。

W^{シエル}「翔！トリガーだ！」

W（翔）「分かってるよ！」

Wはサイクロンとジョーカーのメモリを抜きルナとトリガーの挿入する。

【ルナ・トリガー！】

W「ハアアアア！」

Wはトリガーマグナムでガジェットを次々と打ち抜いていった。

W（翔）「とどめだ！」

【トリガー！マキシナムドライブ！】

トリガーマグナムにトリガーメモリを入れトリガーマグナムをマキシナムモードにする。

そして無数のエネルギー弾を残りのガジェットに打ち込んだ。

W「トリガー！フルバースト！」

それにより残りのガジェットが全て消滅した。

W（翔）「終わりだ。堪忍しな」

Wがトリガーマグナムを向けながらそう言ったがクアットロは余裕

の表情だった。

クアットロ「フツ・・・フフフ・・・この程度勝ったつもりでいるなんて笑っちゃいますね。私がこの程度の準備しかしてないと思っているなんて！」

そしてクアットロが右手をあげると巨大なガジェットが現れた。それは全長10メートルあるかもしれない大きさだった。

クアットロ「フフ・・・それじゃあここでさようなら」

そう言うとガジェットが高速でWに向かって突撃してきた。

ドオオオオオオン！

そして強い衝撃が部屋に伝わり部屋が煙りに包まれた。

クアットロ「フツ・・・さすがにコレをまともに喰らったらもうまともに動けないはず」

そう言った瞬間

巨大ガジェットが吹き飛ばされた。

クアットロ「な!？」

あまりにも衝撃的な事態にクアットロは思わず声をあげる。

そしてもちろん吹き飛ばしたのは

W（翔）「つたくいきなり危ねーな」

拳を構えているWヒートメタルがいた。

クアットロ「ど、どうして！？あの攻撃を少しでも喰らっているはずなのに！」

その言葉にWは違うメモリを取り出して巨大ガジェットに突っ込みながら言った。

W（翔）「効かねえよこんな攻撃・・・全然堪えねえよ！今のなのはの悲しみに、今のヴィヴィオの苦しみ比べたら全然堪えねえよおおー！」

【ヒート・メタル！】

そして跳び上がり

【メタル！マキシマムドライブ！】

メタルシャフトを振りかぶり

W「『メタルブランディング！』」

高熱を纏わせ思いつ切り叩いた。それにより巨大ガジェットは一気に潰れて爆発した。

W「さて、もう終わりだよな？」

しかしクアットロは

クアットロ「まだよ！まだ・・・まだ私の計画は誰にも止められない！！！」

その叫びと同時にクアットロの後ろに1000機以上のガジェットが出現した。それを見たWは

W（翔）「・・・まだ出るのかよ」

W^{シエル}『でも・・・やるしかない！』

W（翔）「ああ！！！」

そしてWは再びサイクロンジョーカーになりガジェットの大群に向かって走りだした。

Wは次々とガジェットを破壊していく。

敵の数が多くダメージを負っているがその程度で止まる二人ではない

W（翔）「まだまだ行けるなシエル！」

W^{シエル}『ああ！こんなところで立ち止まっていられない。僕らは仲間の為

に・・・この世界の為に」

W（翔）「そうだ、どんなことがあっても諦めない。俺達には守りたい仲間がいるから・・・絶対に！」

W「ウオオオオオオオオ！」

そして突然Wの周りを光りが包みこんだ。

そしてWが上を見上げながら左手をあげる。するとゆりかごの壁を壊し何かが現れた。

鳥の様な何かがそしてそれを掴みドライバーに装着しバツクルを展開する。

【エクストリーム！！】

そしてWは光に包まれた。Wが掴んだものそしてやってきたものはエクストリームメモリであった。そしてWはエクストリームメモリをドライバーに装着し最強の力を手にしたのだった。

光が晴れるとそこには触角がX字型になり更に肩がWに変形していて身体を中心部分にクリスタルサーバーが出現したWがいた。

W^{シエル}「さあ行こう相棒」

W（翔）「ああ！」

サイクロンジョーカーエクストリーム、Wの最強形態がここに降臨した。

クアットロ「フツ・・・そんなモノになった所でこの大勢の兵器には勝てないわ！」

そう言うで大勢の兵器が一気に銃弾をWに向けて発射した。しかしWは動かない

クアットロ「避けない！？・・・フツ諦めましたかぁ！！」

そしてWに全銃弾が当たるその時Wは光の矛と盾プリズムビッカーを出現させ銃弾を全て防いだ。

クアットロ「なに！？」

クアットロが驚くがWは気にせず次の動きをする

Wシエル「敵ガジェットの数、配置、弱点を閲覧した」

W（翔）「よし、行くか」

Wはプリズムソードとビッカーシールドに分離させプリズムソードにプリズムメモリを挿入する。

【プリズム！マキシマムドライブ！】

W「プリズムブレイク！！」

プリズムソードのマキシマムスターターを押しマキシマムドライブを発動し複数のエネルギー刃を飛ばした。そしてそのエネルギー刃によって全ガジェットが破壊された。

クアットロ「そ、そんな・・・」

その光景にクアットロは頂垂れた。なぜならもうクアットロには今のガジェット達で全ての戦力を使い切ってしまったからだ。

W（翔）「よしコイツで終わりだ！」

ビッカーシールドとプリズムソードを一つにしそこにプリズムソードの柄にプリズムメモリ、ビッカーシールドのX字型に配置されたマキシマムスロットにサイクロン、ヒート、ルナ、ジョーカーの四つのメモリを挿入する。

【サイクロン！マキシマムドライブ！】

【ヒート！マキシマムドライブ！】

【ルナ！マキシマムドライブ！】

【ジョーカーマキシマムドライブ！】

W「ビッカー！ファイナリユージョン！！」

そして七色の光線がプリズムビッカーから発射されクアットロの身体を飲み込んだ。

クアットロ「い、いやあああああ！！」

W（翔）「いっけー！！」

クアットロはそのまま壁を破壊し吹き飛ばされていった。

なのはが聖王モードのヴィヴィオと戦闘をしていると突然壁が崩壊した。

なのは「えっ!?!」

なのはが壊れた壁の方を見ると気絶しているクアットロの姿があった。

なのは「これって!?!?・・・どうゆう事?」

なのはが疑問に思っていると壊れた壁の奥から足音がした。

その足音の正体は・・・

W（翔）「遅くなっちゃったな、なのは、ヴィヴィオ」

WCJXだった。

t o b e c o n t i n u e d

第37話（後書き）

フォ「遂にエクストリーム」

翔「だな」

フォ「エクストリームって事はさ・・・」

翔「ん？」

フォ「近距離攻撃全回避可能!？」

翔「無理だから!」

フォ「よし、ならエターナルかアクセルにオルタナティブモードを・・・」

翔「オイ!ぜってー何か混じってるだろ!」

フォ「さあ?」

翔「さあ?じゃねーよ!」

ダンボール戦機にエクストリームモードとオルタナティブモードというものがあり攻撃力とスピードが大幅に上昇し状態異常が回復する能力を持っている。さらにエクストリームモードは近距離攻撃をオルタナティブモードは遠距離攻撃を全て回避出来る様になるのだ。

翔「次回の更新は未定ですが早めしたいと思っています。次回も見
て下さい」

フォ「ハカイオー絶斗!!」

翔「いい加減だまれー!!」

第38話(前書き)

今回で戦闘は終了です。
第38話見て下さい。

第38話

W（翔）「やっと着いたな」

W^{シエル}「そうだね」

そう言いWはなのは元へ行く。なのはは見たこと無いWの姿に驚くも今はそれどころでは無いと判断し聖王状態のヴィヴィオの方を向く。

W（翔）「・・・ヴィヴィオを操っていたと思われる戦闘機人はそこで気絶してる。行くぞ！」

なのは「うん！」

W^{シエル}「ああ！」

そしてヴィヴィオを助ける為に動こうとしたその時

ヴィヴィオ「うっ・・・うわああ！」

ヴィヴィオがいきなり苦しみました。

なのは「ヴィヴィオ！」

W（翔）「どうした！？」

その時翔は部屋の中で自分達以外のガイアメモリ反応を感知した。

W（翔）「ど、どうゆう事だ？」

W^{シエル}「まさか、ヴィヴィオが!？」

ヴィヴィオ「うああああ！」

そしてヴィヴィオの身体が黒い光りに包まれ光りが収まると

W（翔）「な……」

なのは「えっ……」

そこには黒い鎧の騎士が立っていた。

「スカリエッツィのアジト」

フェイト「ヴィヴィオ!？」

フェイト達はスカリエッツィのアジトでゆりかご内を見ていた。

マリナ「あれって……もしかして……」

スカリエッツィ「そう、ガイアメモリさ」

拘束されているスカリエッツィが言った。

フェイト「ガイアメモリ?でもヴィヴィオはガイアメモリなんて……」

」

マリナ「持っていない、とゆうか普通のヴィヴィオじゃガイアメモリは使えない。身体がまだ幼すぎる」

マリナは険しい表情で画面を見ながら言う

マリナ「でも、聖王状態なら肉体面の問題は使える。でもそれにも問題がある。聖王状態のヴィヴィオに完璧な自我は無い、ほぼ催眠によるもの。そしてその状態でのコネクタ挿入は危険」

スカリエッティ「そう、だから私は聖王の器の為の保険であるガイアメモリを体内に埋め込んだ！そうすれば催眠が解除された後の感情によりガイアメモリを起動する事が出来る」

感情による起動、それはドライバー、コネクタに次ぐもう一つの方法であった。

フェイト「何故そんな事を!？」

マリナ「さっき言ったとおり保険、そして実験も兼ねてるんじゃない?」

スカリエッティ「その通りさ」

フェイト「そんな・・・」

マリナ「まあ、そんなのすぐどうでもなるけど」

フェイトとスカリエッティはその発言に驚いた。

マリナ「ウチの切り札はこの程度状況、簡単に打破出来るって事」

W（翔）「くっ・・・くそ！」

Wはプリズムソードとビツカーシールドを使いヴィヴィオが変身したドーパントの攻撃を防ぐ。

現在は防戦一方、Wは相手がヴィヴィオとゆうこともあるので少し厳しい。

W^{シエル}「翔！ヴィヴィオの体内のメモリが判明した。『エンペラー』帝王の記憶を宿したメモリだ」

W（翔）「帝王って、そんなメモリあるのかよ！」

W^{シエル}「聖王等の王がいるんだ、帝王の一人や二人いてもおかしくは無いだろ」

W（翔）「そう言えばそうだな！」

二人はヴィヴィオ・・・エンペラードーパントの攻撃を防ぎながら対策をたてていく。

W（翔）「やっぱりメモリブレイクか・・・」

W^{シエル}「それは危険だ、メモリブレイクだとヴィヴィオ中のレリックを

取り除くのに負担が掛かる可能性がある」

W（翔）「おい！それじゃあどうするんだよ！」

W^{シエル}「・・・方法は一つしかない、ガイアメモリとレリックを同時に破壊する」

W（翔）「そんな事出来るのか!？」

翔は初めて聞く手段に不安を覚えているのかシエルそう尋ねる。

W^{シエル}「愚問だね、出来るさ！僕達なら必ず!!！」

W（翔）「・・・そうだな俺達は一人じゃない！だから一人じゃ出来ない事も絶対なんとか出来る！」

Wは一度後ろに飛びプリズムソードとビッカーシルドを合体させプリズムメモリを挿入する。

【プリズム!】

そしてそこに魔力を注入する。

W（翔）「く、くううう・・・」

しかしW・・・翔は高い魔力を持っていながらそれを十分引き出すことが出来ないなので武器に魔力を送るのにも一苦労している。そこにエンペラードーパントがダッシュでWの元へ近づいて来る。

W^{シエル}「翔!」

W（翔）「ヤバっ!!」

いくらWでも皇帝の記憶を持つメモリの攻撃をくらえば一溜まりも無いだろう。

だが、そこに

ピンク色の光弾が現れエンペラーに当たる。
それによってエンペラーが少し怯む。

W（翔）「えっ・・・」

なのは「翔君！シエル！」

ピンクの光弾はなのによるものだった。

なのは「私がヴィヴィオの相手をしている内に早く！」

W（翔）「でも・・・」

なのは「大丈夫！だから信じて！」

W（翔）「・・・ああ！」

一度肯きWはプリズムビッカーに魔力を再び込める。

W「はあああああ!!」

緑と黒の光りがプリズムビッカーに伝わっていき。
強力な魔力がプリズムビッカーに充填された。

W（翔）「よし！魔力充填完了！」

W^{シエル}「フィニッシュだ！！」

そして四本のメモリを挿入する

【サイクロン！マキシマムドライブ！】

【ヒート！マキシマムドライブ！】

【ルナ！マキシマムドライブ！】

【ジョーカー！マキシマムドライブ！】

更にエネルギーがプリズムビッカーを纏い強力な光を放出する。

W（翔）「行くぞ！！」

W^{シエル}「ああ！！」

そしてビッカーシールドとプリズムソードを分離させエンペラー
ーパントに向かい走りだす。

W「ウオオオオオ！！」

それと同時になのはは下がる。

そしてWは魔力とガイアメモリのエネルギーをためたプリズムソ
ードでエンペラードーパントを斬った。

エンペラー「ウアアアアア！」

エンペラードーパントは叫び声を起こしながら爆発した。

ドガアアアーン！

なのは「ヴィヴィオ！」

なのはがヴィヴィオの名を叫ぶ。煙が晴れてなのはの目に写ったのは
気絶しているヴィヴィオとヴィヴィオを抱きかかえているWの姿だ
った。

その足下には破壊されたレリックとガイアメモリが落ちていた。

これによりこのスカリエッティ一味による事件は解決へ向かってい
っていた。

第38話（後書き）

マリナ「オリジナル設定とか入れない方良いと思う」

フォ「何故!？」

マリナ「アンタ説明下手だから」

フォ「・・・否定出来ない」

マリナ「それにしても、遂に原作終了ね」

フォ「そうだね」

マリナ「そして終了の可能性アリ」

翔「TPPか・・・」

マリナ「総理・・・何やってんだか・・・」

シエル「このまま参加になったら日本すごい荒れるだろうね」

フォ「もう結構批判も多くなってるけどね。自分的にはやっぱり二次創作を読むのも書くのも好きだから参加して欲しくないな」

翔「俺も打ち切りなんて嫌だぞ」

マリナ「だね、とりあえず今日はここまで」

フオ「うん、次回でゆりかごとスカリエッティの話しは終わりで、それからは過去の話しを修正と説明の補足を入れたり日常の話し書いたりです」

翔「みなさんこれからもよろしく願います！」

第39話(前書き)

原作しゅりょです！

第39話見てください。

第39話

W（翔）「成功だな・・・」

W^{シエル}「うん、すっかりメモリブレイク出来てるしレリックの破壊出来た」

ヴィヴィオをしっかりと抱きかかえWは言った。そして変身を解除するためにヴィヴィオを右手で抱え左手で変身を解除した。

翔「ふう・・・」

シエル「とりあえず僕達の出来る事はやったね」

翔「そうだな・・・」

二人がそんな会話をしているとなのはが駆けてきた。

なのは「翔君！シエル君！」

翔「おう」

シエル「とりあえずお疲れ」

なのは「それよりヴィヴィオは！？」

翔「ん？見ての通りだよ」

翔が寝ているヴィヴィオの顔をなのはの方へ見せる。

翔「色々あって疲れた所為か爆睡中だ」

なのは「そうなんだ・・・良かった」

ヴィヴィオが無事だった事に安心するのは、そこに・・・

はやて「なのはちゃん、翔君、シエル君！」

はやてが飛んできた。

翔「よお遅えよ」

はやて「仕方無いやろ、コッチも忙しかったんやから」

はやてが翔の隣に着地しそう言った。

翔「んじゃあ、早めに準備して脱出するか・・・」

そう言った途端ゆりかごのアナウンスみたいなものが流れる。

『聖王陛下、反応ロストシステムダウン。艦内復旧のため全ての魔力リンクをキャンセルします』

それによりはやてはラインとのユニゾンが強制的に解かれる。

『艦内の乗員は休眠モードに入ってください』

シエル「つまり魔力結合出来ないって事だね」

ライン「通信も出来ません！」

はやて「しゃーない歩いっ」ふっふっふっ」・・・どないしたこんな時に」

はやての喋っている時にいきなり笑い出す翔。そして翔はシエルの方を見る、それによりシエルも翔が何を考えているのかを理解したのかスタックフォンを取り出しボタンを押していく。

翔「魔力結合を出来ないのは痛いけど別にだからと言って歩く必要は無い」

ライン「どうしてですか？」

ラインが尋ねると同時に

リボルギャリーが壁を壊して入ってきた。

翔「コイツがあるからだ」

まさかのリボルギャリーの登場に驚くのは、はやて、ライン。

そして一緒にやってきたハードボイルダーに翔に跨り

翔「どうした、早くソイツの中乗れっ」

翔はリボルギャリーのボディを展開させそう促した。

リボルギャリー内

はやて「なあシエル君」

シエル「うん？なんだい？」

はやて「コレ、飛ぶんか？」

シエル「・・・多分」

はやて「って知らんのかい！？」

シエル「翔からただ飛ぶとしか聞いてないからね」

はやて「めっちゃ不安なんやけど・・・」

リイン「不安です」

そんな会話しているとシエルのスタッグフォンが鳴った。ハードボイルダーを操縦中である翔からだ。

翔『今、前にリボルギャリーが通れそうな穴があったからそこを通って脱出する。ちなみにコッチのユニット変えたいんで一時停止するから』

そう言うとハードボイルダーとリボルギャリーは一時停止しハードボイルダーをハードタビュラーに変更した。そしてその穴の目の前で

翔「よし、行くぜー！」

翔の掛け声と共にリボルギャリーから翼とブースターが出現しそのまま空へと羽ばたいた。

はやて・リイン「飛んだー！」

シエル「シユールな光景だと思っよ・・・多分」

ハードタービュラーで外から見ていたなのもその光景にはビックリしていた。翔も「実際飛ぶと衝撃的だな」と呟っていた。そして近く来ていた六課のへりに全員乗った（リボルギャリーはそのまま地上へ降ろした）

へりの中で窓の外を翔が見ていたらヴィヴィオが眼をさました。

翔「起きたか・・・」

ヴィヴィオ「うっ・・・」

ヴィヴィオは眼を覚ますと眼を擦り翔の方を見た。

翔「・・・どうした？」

ヴィヴィオ「パパはヴィヴィオのほんとうのパパじゃないの？」

その言葉に翔は驚くがヴィヴィオをじっと見て言った。

翔「そう・・・だな、確かに俺もなのはもヴィヴィオの本当の親じ

やない……」

それを聞くとヴィヴィオは悲しい表情を浮かべる。

翔「でもな……血が繋がってなくても心の底から望めば本当の家族になれるんだ」

ヴィヴィオ「えっ？」

ヴィヴィオがよく分かっていない様な顔をしている。それを見て翔は笑いヴィヴィオの事を抱きしめた

翔「ヴィヴィオは俺と一緒にいたいかって事だよ。ヴィヴィオの生まれとかそうゆう細かい事関係無しにヴィヴィオの思ってる事言ってみな」

そう言うとヴィヴィオは翔の袖を掴みながら涙を流して言った。

ヴィヴィオ「ヴィヴィオは……パパとママとずっと一緒にいたい」

翔「本当の親じゃないけどいいのか？」

ヴィヴィオはその言葉にしっかりと頷いた。それを見て翔は笑いながら

翔「じゃあ俺達は今日から家族だ」

この日、ジェイル・スカリエッティ、戦闘機人、レリック、聖王と

ゆりかご

いくつもの事に決着が着いた。

でも翔の戦いはここからが始まりだった。

第2章へ続く

第39話（後書き）

翔「ひとまず終わりだな」

フォ「だね」

シエル「ここまで結構時間掛かったね」

フォ「すみません」

リュウヤ「これからはどうするんだ？」

フォ「前にも書いたけどこれまでの話の直しと更に番外編を別で書きます。そして2章の執筆もします」

マリナ「そんなにやって大丈夫なの？」

フォ「何故そんな事を？」

マリナ「だって今週ダンボール戦機ブーストが発売するし12月のはじめにはクライマックスヒーローズフォーゼ発売だしなのはGOでもでるし」

翔「確かに執筆がおろそかになるな」

フォ「……が、がんばるぞ」

シエル「不安だ……」

翔「成長しない駄目作者ですがこれからもしつかり更新して頑張っ
ていきますのでこれからもよろしくお願いします」

フォ「お願いします。ではまた第2章と番外編で会いましょう」

第40話(前書き)

翔のちょっとした話

第40話どろぞろ

第40話

翔「よし、完成」

翔の前にはケーキがあった。これは翔が作ったものだ。

翔「ヴィヴィオーおやつだぞー！」

ヴィヴィオ「は〜い」

翔が作ったケーキはヴィヴィオのおやつ用に作ったものだった。

ヴィヴィオ「おいしい〜」

翔「それは良かった」

二人でそんなやり取りをされていて翔は今日も平和だなと思うのだった。

そこに・・・

なのは「何で翔君はこんなにおいしそうなもの作れるの」

なのは「別にかやってきた。別にそれは構わないのだが翔はなのはが少し不機嫌な気がしたのだ。」

翔「どうした？なんかあったのか？」

なのは「別に〜ただなんで翔君、男の子なのにこんなに料理がうまいのかなって思ってた」

翔「そりゃあ、色々作ったから気が付いたらうまくなってたって感じだな」

なのは「ふうん」

ヴィヴィオ「ごちそうさま」

翔「はい」

翔は皿をもって台所へと向かっていった。

なのは「……」

なのはその後ろ姿をじっと見ていた。

なのは「翔君って何であんなに出来るのかな？」

フェイト「えっ？」

なのははフェイトにそう言ってみた。

フェイト「どうゆう事？」

なのは「だって、翔君ってさあ料理もうまいし掃除とかもよくやるらしいし」

フエイト「うん」

なのは「男の子でそこまで家事する人っている?」

フエイト「うん、別にいてもおかしくないと思うけど?」

なのは「そうなのかな?」

二人でそんな会話をしているとマリナがきた。

マリナ「どうしたの二人共?」

なのは「あ、マリナさん」

マリナ「何かあった?」

なのは「いや、翔君って料理とかうまいけど他に何かあるのかなって思っ
て」

マリナ「うん、翔の趣味はね?裁縫とか?」

フエイト「え?」

なのは「いや、そうゆづのじゃなくてもうちちょっと男の子らしい趣味とか・・・」

マリナ「男の子らしい趣味か・・・」

それを聞いて少し考えると

マリナ「じゃあ、尾行しますか」

なのは「えっ？」

翌日

翔「~~~~」

翔は一人クラナガンのショッピングモールを歩いていた。それを憑ける複数の影

なのは「……………」

はやて「……………」

シャマル「……………」

マリナ「なんか増えてるね」

本来なのはと二人で来るはずだったのだが何故かはやてとシャマルもきていた。

はやて「だっておもしろそうなんやもん」

シヤマル「この頃出番無かったので」

マリナ「まあいいけど・・・」

取りあえずこの四人で翔の尾行をすることになった。

翔の行動その1

ゲームセンターで遊ぶ。

翔「LRキターー!!」

翔はゲームセンターで大声を出すけど誰も気にしない多分いつもの事なのだろう。

なのは「あのゲームって小学生ぐらいが対象じゃなかったっけ？」

マリナ「大丈夫、大人もやってるから」

はやて「でも昼間から大の大人が大声出すって・・・」

シヤマル「しかも昼間のゲームセンター」

翔の行動その2

プラモデルを買う

翔「お、ゼンだ。買おう」

翔がよく買うプラモデルはダン・ール戦機のである。なんでミッドで売ってるか？それは企業秘密です。

なのは「プラモデル買ってたんだ」

はやて「知らなかったな」

シャマル「ですね」

マリナ「うん、たまに買うのよね」

そして翔はレジに向かい店員と会話をしていた。

翔「これくださーい」

店員「ああ、だが君に是非奨めたい商品がある」

翔「えっ？」

店員「この俺が作ったプラモその名も「バース」だ！腕や脚に武器パーツをつけられたり何よりもカッターウィングやブレストキャノンがs「さよなら」・・・」

店員がすごい熱く方っているのを後にし翔は店を出た。

なのは「で、翔君はどこにいったのかな？」

はやて「消えたな」

シャマル「行動パターンが読めないってゆうか歩くのが速いってゆうか・・・」

マリナ「まあ確かに予測出来ないわよね」

四人は翔の事を見失っていた。

マリナ「翔って勘はいいからバレたのかもね」

はやて「なるほど」

シャマル「取りあえず六課に戻ります？」

マリナ「そうしようか」

なのは「はい」

取りあえず四人は六課に戻る事にした。

～機動六課～

ヴィヴィオ「～～～」

なのは「どうしたのヴィヴィオ？」

いつもより機嫌がいいヴィヴィオになのが聞いた。

ヴィヴィオ「パパが買ってくれたの」

なのは「えっ！そんなの？」

確かに見たことのないぬいぐるみをヴィヴィオは抱えていた。何時買ったんだろう？となのはは疑問に思ったその時、翔が来た。

翔「よおなのは、ちょうど良かった用があったんだ」

なのは「えっ？」

翔「これ」

そう言っ取り出したのは細長い箱だった。

なのは「これは？」

翔「開けてみて」

翔に言われた通りなのはが箱を開けると星形のネックレスが入っていた。

なのは「これは？」

翔「まあ、ちょっとした感謝の意味を込めてのプレゼントとゆうか・
・まあそんな感じだ」

翔が少し恥ずかしそうに言った。そんな翔をみながらなのはは笑顔で

なのは「ありがとう翔君！」

翔「ああ・・・」

なのは「・・・」

翔「・・・」

なのは「・・・えい」

翔「うわぁ！」

いきなりなのはが抱きついてきて翔は少しバランスを崩す。

翔「全く・・・」

なのは「えへへ」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオも」

翔「おっと！」

さらにヴィヴィオも翔に抱きついてきた。

翔「全く、困った親子だな」

なのは「翔君も困ったパパだけどね」

翔「それは反省してます」

そう言って二人の頭をなでて思った。

やっぱり家族っていいなと

第40話（後書き）

翔「なんかおかしい人がでてた気が・・・」

フォ「気のせいです」

シエル「そうかな？」

フォ「そうです、次回はリュウヤの話です」

リュウヤ「え？」

フォ「頑張れよ」

リュウヤ「あ、はい頑張ります」

フォ「まとまんねーけど次回も見てください」

第41話（前書き）

movie大戦おもしろかったー！

Wも大活躍でしたし期待以上の作品だったと思います。

第41話どうぞ！

第41話

クラナガン自然公園前

リュウヤ「……………」

リュウヤはここである女性を待っていた。

「リュウヤ！」

自分を呼ぶ声がしたのでその方向を向くと金髪の女性、フェイト・T・ハラオウンが小走りでやってきた。

フェイト「ごめん待った？」

リュウヤ「いや、全然」

そう言い二人は並んで歩き出した。

はやて「うまくやってるかな？」

翔「どうだろうな」

なのは「でも、何でリュウヤ君とフェイトちゃんはデートに行った

の？」

翔「何でってオイ」

ヴィータ「そりゃあアレだろ」

なのは「アレ？」

何故なのは気づかないのだろうか？みんながそう思っていた

シグナム「それはあれだろ？テストアロツサがアークライトに好意を持っているから誘ったのだろうか？」

するとシグナムがそう言った。それを聞いてすごく驚くなのは

なのは「ふえええ！そうだったのー！」

その反応にずっとこける一同なぜならこの事を知らないのはなのはだけだったからである。

シエル「知らなかったんだ」

リイン「リインも知ってたです」

はやて「ってかフェイトちゃんのリユウヤ君に対する態度を見てればすぐ分かるけどな」

エリオ「僕も知ってましたよ」

キャロ「フェイトさん、リユウヤさんと話しているとすごく嬉しそう

ですよね」

なのは「orz」

翔「まあドンマイ」

そんな感じで機動六課は平和でした。

リュウヤ「それで、何処へいくんだ？」

フェイト「え〜っと、まずは映画見よう」

そうフェイトが言って二人は映画館へ向かった。

フェイト「リュウヤは映画とかよく見る？」

リュウヤ「そうでもないな、暇な時かすごく見たい作品が無いと・

・

フェイト「そうなんだ」

二人でそんな会話をしてい歩いていると目の前に映画館が見えてきた。

リュウヤ「アレか？」

フェイト「うん」

二人は映画館の方へ進んでいった。

リュウヤ「それで？どの映画を見るんだ？」

フェイト「えっとね・・・アレ！」

フェイトが指をさした所にはこの前公開した恋愛ものの映画だった。

リュウヤ「ふん」

フェイト「どうかな？」

リュウヤ「俺はなんでも構わない」

フェイト「うん、じゃあ見よつか」

なのは「翔君はどんな映画が好きなの？」

翔「俺？」

翔はなのはの問いに少し考えこみ言った

翔「俺は・・・グンラ ンとか好きだぞ」

なのは「・・・翔君らしいね」

その言葉を聞き少し不機嫌そうな顔をして

翔「なんか馬鹿にされてる気がする」

なのは「そんなこと無いよ」

そうやってなのはは翔の頭を撫でた。翔も少し納得がいかないらしいが撫でられて満足したらしくこれ以上何も言わなかった。

ヴィータ「それでいいのかオイ」

六課は今日も平和でした。

フェイト「映画どうだった？」

リュウヤ「少しベタな展開だったな」

フェイト「確かに・・・」

二人は映画館をでて街を歩いていた。時刻は12時半二人はそろそろ昼食を摂ることにした。

フェイト「何処にする？」

リュウヤ「そうだな・・・じゃあ俺がよく行く店にするか？」

フェイト「うん、いいよ」

二人はその店に行くことにしたのだが段々道が混んできた。なのでリュウヤは

フェイトの手を握った。

フェイト「えっ？」

フェイトはいきなり手を握られ驚くと同時に顔を赤くする。リュウヤは前を見ながら

リュウヤ「人が多いからな」

一言そう言った。フェイトもそれに頷き店へと歩いていった。

はやて「何時も思うんやけど」

翔「あん？」

はやて「スバルとエリオの食欲って任 堂のピンク色の人気キャラに似てるなあ」

翔「ホント今更だな」

エリオとスバルの食事をみてそう言う狸な部隊長八神はやて

はやて「誰が狸や！」

なのは「はやてちゃん誰に話してるの？」

翔「なのは、はやてにも色々あるんだぜ」

はやてに可哀想な視線を送る翔。そんな大人達のやり取りの中に気になった事があった
ティアナが質問する。

ティアナ「あの、エリオとスバルがピンク色のキャラクターに似てるって言いましたけど
なんですかソレ？」

翔「ああ、確か」

翔はどこからかペンとスケッチブックを取り出しそのキャラを書いていく

翔「まあこんな感じだ」

翔が渡してきたスケッチブックにはピンク色の球状のものに手と足らしきものが付いていて更に目、口、ほっぺ等のパーツが付いているキャラクターだった。

ティアナ「コレですか？」

翔「ああ、そいつその体で食べ物とか色々なもの吸い込むんだよな」

ティアナ「なるほど」

その絵を見た後大量の食べ物すごい勢いで食べるエリオとスバルをみて

ティアナ「確かに似てるかも」

そう呟いた。

はやて「ウチはタヌキやないそうやるのはちゃん！」

なのは「うん、でもタヌキでも可愛いと思っよっ。」

はやて「又オオワアアア！」

なのは「はやてちゃん？」

シヤマル「落ち着いてははやてちゃん」

六課はホント平和です。

フェイト「美味しかったね」

リュウヤ「ああ」

二人は海沿いの道を並んで歩いていた。

リュウヤ「なあフェイト」

フェイト「うん？」

リュウヤ「少し話があるんだ」

フェイト「・・・分かった」

二人は足を止め近くのベンチに座った。

フェイト「話して？」

リュウヤ「俺の身体についてだ」

フェイト「身体？」

リュウヤ「ああ、俺と姉は少し複雑な生まれかたをしててな」

フェイト「えっ？」

フェイトはリュウヤの言葉に驚いた。自分も普通とは違った生まれ

かたをしているからだ

リュウヤ「まず始まりはあるプロジェクトだった。トップクラスの魔導師、魔法とは別の能力を使う異能者、強力なレアスキルを持つものの遺伝子をあわせたらその子供はどれだけの力を持っているか」

フェイトはリュウヤの言葉に驚いた。彼もまた人工的なもので生まれた存在なのかとそして堪らず声をあげる

フェイト「それってもしかして!？」

リュウヤもそれを察して首を横に振る

リュウヤ「いや、クローン技術等の違法な手段では無く今実際に使われている人工授精等の生殖手術の一種だ・・・まあ俺にはあまり違いが理解出来ないがな」

そう言って再び話を続ける。

リュウヤ「そこで俺と姉はそこで同じ父親の遺伝子で生まれた姉弟だった。そして同じように多くの子供が生まれて計画も少しずつ落ち着こうとしていた時、事件が起きた」

フェイト「事件？」

フェイトの言葉にリュウヤは頷く。

リュウヤ「事件とはある組織がその計画の関係者を皆殺しにするという事件だ。それにより多くの研究者や子供が死んだ」

フェイトはその言葉に驚愕した。リュウヤは話しを続けた。

リュウヤ「極少数のの者は逃げる事に成功し今も生きてる。だがその時襲われた子供達の中にはその時の事件の所為であまり良い人生は送れてない者も極僅かにいるらしい」

フェイト「そうなんだ・・・」

リュウヤ「俺達は何も無く普通の生活を送っているがな」

リュウヤが話終わると長い沈黙状態になる二人。その沈黙を先に破ったのはリュウヤだった。

リュウヤ「この話を聞いてどう思った？」

フェイト「え？じゃあ一つだけいい？」

リュウヤ「ああ、いいぞ」

リュウヤの言葉に肯きフェイトは言葉を発する。

フェイト「リュウヤはその組織の事憎んでる？」

フェイトの質問にリュウヤは少し考えて答えた。

リュウヤ「・・・憎んではないと思う、だがアイツ等はこの世界の闇の一部だと思う。だからこの先アイツ等の所為でまた多くの人が死ぬかもしれない。俺はそれを止めたいそれだけだ」

フェイト「そうなんだ・・・」

フェイトはそれを聞いて何か決意をした顔をしてリュウヤの方を向く
フェイト「リュウヤ、私に出来る事はなんでも言っで。私はリュウ
ヤの力になりたいどんな事でもいいから」

リュウヤは少し驚いたが少し笑ってフェイトの方をみた。

リュウヤ「じゃあ一つだけいいか？」

フェイト「うん、いいよ」

リュウヤがフェイトに言った事は・・・

リュウヤ「じゃあ、俺の傍に離れないでずっと一緒にいてくれ」

フェイト「・・・え？」

フェイトには一瞬何をいつているのかわからなかった。なのでリュ
ウヤはもう一度言葉を変えて言った。

リュウヤ「だから、俺はフェイトの事が好きだからずっと一緒にい
てくれて言ったんだ！」

さっきの言葉をもっとストレートに言った。直後恥ずかしくなった
のかフェイトとは逆の方を向いた。

リュウヤ「・・・で、どうだ？別に今答え出せなんて事は言わな
いけど・・・」

リュウヤがそう聞いた時、フェイトがいきなり抱きついてきた。

リュウヤ「……え？」

リュウヤはいきなりの事で驚いてしまった。

フェイト「私もリュウヤの事好きだから、私もずっと一緒にいて欲しい」

その言葉を聞いてリュウヤはフェイトの方へ向き直す。フェイトもリュウヤをじっとみる。

そして段々と二人の顔が近づいていき

二人はキスをした

この日は二人にとってすごく大切な日となったのだった

第41話（後書き）

（あとがき）

フォ「movie大戦の見所？・・・バースチームじゃね」

マリナ「いやタトバキツクじゃない？」

シエル「大文字先輩」

リュウヤ「翔太郎と弦太郎のやり取りが・・・」

翔「いや、お前等そこはWだろ」

『・・・・・・』

翔「・・・え？」

『そこまで見所じゃないと思う？』

翔「いや、見てよWも！」

マリナ「一番の見所はラストバトルです！」

『そりゃそうだ』

フォ「ちなみに説明するとマリナの能力は高い魔力と戦闘力でリュウヤは強力な炎です」

翔「次回も見てください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3677q/>

魔法少女リリカルなのはstrikersW 二人で一人の仮面ライダー

2011年12月11日20時56分発行